

川柳塔

昭和四十一年一月九日 創刊
昭和六十一年四月二十五日 印刷
昭和六十一年五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷七〇八号



日川協加盟

No. 708

五月号

友好と観光

中国吟行の旅

北京一万里の長城一大同

☐ 61年9月下旬

(前号「10月下旬」は誤りです)

☐ 6日間コース

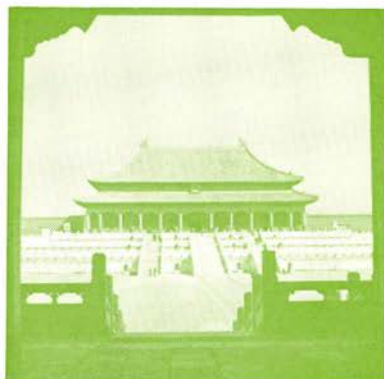
☐ 費用24万8,000円

(全食事付)

☐ 人員25名かぎり

(詳細は逐次、発表します)

川柳塔社



尼 緑之助句文集

生かされて

定価二、〇〇〇円

送料 二五〇円

大矢十郎還暦記念句集

みかん船

頒価二、〇〇〇円

送料 二五〇円

羽原静歩句集

足 跡

頒価二、〇〇〇円

送料 二五〇円

小西無鬼遺句集

わらじ酒

頒価二、〇〇〇円

送料 二五〇円

■在庫少々あります お申込みは本社まで

川柳塔社

菜の花や

西尾 葉

昨年、一昨年の日川協大会の文部大臣賞にクレームがついた。それを取消せとも、没にせよとの抗議はなかったのであるが、日川協として余りにも權威のないことであるから、何とか良い方法の選句がないものかと、常任理事会で鳩首してこれで完全だという方法もないので、とりあえず、文部大臣賞と大会賞だけは候補作品を全国の理事の方々にかけて決定

することにしてはという意見のもとに、右二賞の表彰は次年度に於て行われるようになった。一日五万と作られる川柳、しかも五七五の短詩文芸なれば、盗作などどわめきたてなくとも、コピー同然のものの出来るのも致し方ないことである。昭和六十年の俳人協会主催の朝日新聞社賞の作品

雷来るか 鯽来るか 海荒れはじむ

の句は昭和四十八年度靖国神社献詠句に既に発表されたものであるというので受賞を取消された。僅か十七文字の川柳、俳句には偶然の一致ということもあるが、先によく似た句のある時は、後で作句さ

れた方はいさぎよく取消すのがマナーである。

かの有名な与謝蕪村の句に

菜の花や月は東に日は西に

という人口に膾炙された句は実景を写生したものではなく、陶淵明の雑詩の本歌どりである。即ち

白日^{シヤ}淪^イ西阿^イ 素月出^イ東嶺^イ

をつまぐ十二音に短縮したもので、陶明の詩「遙々たり万里の輝 蕩々たり空中の景」の換骨脱胎である。菜の花の季題を頭につけて佳句にした蕪村は流石である。

座右の句

遠き人を北斗の杓で掬わんか

(薫風)

私の句

空間に独りおかれている鼓動

松本 はるみ

川柳塔 五月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

菜の花や

西尾 葉 … (1)

よさ来い土佐へ

黒川 紫香 … (2)

川柳塔 (同人吟)

西尾 葉選 … (4)

自選集

東野 大八 … (30)

川柳太平記 (96) 川柳の群像 延原句沙弥

東野 大八 … (30)

連載 誹風柳多留廿六篇研究 (二十五丁)

東野 大八 … (30)

水煙抄

黒川 紫香選 … (34)

秀句鑑賞 [同人吟]

尼 緑之助 … (55)

水煙抄

田中正坊 … (59)

愛染帖

橘高 薫風選 … (52)

万里の長城

東野 大八 … (56)

よさ来い土佐へ

(川柳高知春季大会に参加して)

黒川 紫香

例年になく彼岸が過ぎてても寒さがきびしい
3月22日、突然の招きで高知に向う。

瀬戸内海を船で渡る頃から降り出した雨は
土讃線の奇勝、大歩危、小歩危を走る折には
激しくなり、車内放送で名勝案内をする車掌
の声も途切れがちだった。

夕刻高知に着く。駅まで迎えに来て戴いた
赤川菊野さん、中内朱坊さんと共に宿舍の高
知新阪急ホテルへ車で行きチェックインを済
ますと繁華街大橋通りに出て活魚料理店で夕
食を共にして高知川柳界のお話を聞く。

翌23日は大会の日で、もう雨は止んでいた
が風がきつくてホテルのテレビは東京周辺の大
雪を報じていた。ホテルからも高知城からも
近い文教会館が大会場で、歩いて到着すると
もう前夜ホテルでお会合した会長の川竹松風
さんが何かと設営の世話を焼いておられた。

東は室戸岬、西は宿毛辺りから長時間交通機
関を利用して胸躍らせて参加する柳人達、投句
のメー切時間には六十余名が集った。これでも
前夜の雨が祟って人数が少ないという。

大会は何処も同じ風景だが、話し合いの中
に土佐弁というか高知弁というものが見られ
ず、大阪に居るのと変りない気易さと雰囲気

同人アンケート 私のグルメ手帖……………(60)

正敏・兆代賀・静水・十郎・酔夢・克枝・菊野

芳子・射月芳・月子

えの木姫……………(64)

初步教室……………(66)

「頑張る」……………(68)

一路集「ムード」……………(68)

「損」……………(69)

柳界展望……………(70)

本社四月句会……………(72)

各地柳壇(佳句地10選/田形美緒)……………(76)

■5月各地句会案内 87 編集後記 89

座右の句

人の世や嗚呼にはじまる広辞苑 (薫風)

私の句

生まれるも死ぬるも一人かもめ呼ぶ 細木歳栄

に安堵感を覚えたのと同時に国説りが聞くことが出来なかったさびしさも味わった。

川柳塔誌上で馴染みの深い松岡三吉さん、北川竹萌さん、曾我部佳風さん等をはじめお逢いした方でも旧知の如く話し合えるのも川柳の良さかも知れない。中でも若き溢れる小沢幸泉さんは司会に、運営に生きのよいところを見せて大活躍、美声とそつない行動には次の時代の川柳高知を明るく表徴している。年度表彰につづいて八つの兼席題の披露も終り祝宴に入る。酒量豊かな高知の人達によって賑やかな宴になり、飲めない私もすめられてグロッキーになるのではとの心配も危惧、みなさん大人しく紳士的なのには感心した。ただ残念なのは永年水煙抄に投句されていた山下登舟さんが二月に亡くなられ、この大会では60年度優秀者として黒潮賞を貰われる事になっていたが、その栄誉の日も見ずにお嬢さんが代って授賞されていたのには涙する。

掃阪の24日は打って変って快晴となった。

朝ホテルを出て独りで高知城、はりまや橋等を歩き車で桂浜に行く。透き通る青い空そして広い大平洋、五色の石が拾える浜辺を散策して洋上を睨む龍馬の像、闘志をむき出しにする土佐大を見て高知駅に来るとわざわざ見送りの菊野さんと逢う。来春の再会を約し堅い握手をして特急南風号に飛び乗ったのは午後四時半だった。

寒くとも風さわやかな桂浜



西尾 葉選

富田林市 藤田泰子

身は一つ心は封書に入れました
適材適所お内裏様は上の段
重い荷を背負い初めたランドセル
コーヒーと番茶話がくいちがう
友引を選ぶ夫の退院日

鬼の掌の中で華やぐ五色豆

岡山県 土居耕花

銀行へ入る真似して又歩く
色いろと見て天井に又戻り
脳軟化こんな優しい語をもらう
春を待つ神経痛と水虫と
弔いの鉦を迂闊に七拍子
御堂筋田舎の父がホツとする

岡山県 嘉数兆代賀

生きていく明日へ回る風車

切り詰めたくらしへ慶弔ばかり来る
亡母の指紋が塩壺にあり雨李に入る
蛙にはなるなと蛙 子を育て
突っ走るわたしへ遮断機が降りる
これしきの善意へ夕陽すばらしい

伊丹市 樫谷寿馬

ドラマのような夫婦を望むかい妻よ
書の道へいそしむ妻の背すじかな
透きとおるフグの刺身と居る孤独
欠陥のストープといふ寒の部屋
鶯を籠で飼つてゐる人の春
草の名を知り過ぎてゐる紀行文

桜井市 岩本雀踊子

終着駅雪は私にばかり降る
亡父の樹に登つて過去をふり向きぬ
忘却の旅に遍路笠を買う

寒椿記憶の中へ落ちました
雑魚になる父にも小さな意地がある
良心のかけらがトキドキ目を覚す

大阪市 北 勝美

社長訓取ってとって取りまくれ

新年度新たに替る棒グラフ

田高が机の位置を替えさせる

テレビ囲碁いやに掃除機耳ざわり

過去既に掃いて落した錆物砂

老い二人迂余曲折の語り草

竹原市 小島 蘭幸

子よ遊べ通知票などまだいらぬ

昼の月一年生の子が帰る

合格をした娘が父と腕を組む

余生とや今日はどこまで歩くのか

おふくろとここは確かに春の街

父がいて少うし早い夕ご飯

松原市 谷垣 史好

風は五月お弁当でもこしらえて

この叔母が来ると美々卯のうどんすき

人嫌いには非ず酒場の隅にいる

クラリネット誰かが吹いている花曇り

トンビ舞う高い望みは捨てました

あの世にも花あり三々五々行かん

島根県 堀江 正朗

あの頃を臉に桜疼きだす

疲れたとこぼせば笑う春炬燵

冗談の言える温みも輪の中で

でこぼこを春のぬくみに労わられ

湯加減のよき妻の手が呼んでいる

八尾市 宮西 弥生

米櫃が満ちて流れを変えてみる

潮時にはならない別れの語

曇のち晴女が先に待っている

花束をうけた明日からまたいくさ

身におぼえないので馬鹿になり切れず

山の手のくらしで世間を狭くいる

大阪市 西出 楓楽

突然にはほは笑む神に死神も

六方は踏めぬ自作自演劇

家出など考えてみる五月晴れ

悪態で中年夫婦のラブコール

失ったものなど想う風の夜

ストライクゾーンを時に外さんか

和歌山市 松原 寿子

新緑へ花の舞いかな風の舞い

人並みと思う黄色いさくらんぼ

胸は一瞬そんな言葉を待っている

約束が萌えるみどりへ動き出す

揺れたくて枝は優しい風を待つ

週末の絆をたたむ雨の傘

啓蟄や愛の予感の髪を梳く
松原市 佐藤 藤子

杜若ときに嫉妬をかうことも
新酒とどく黄砂の風が吹くころに
この道を歩くと決めてからの風
学生のはそこは明るい雨の駅
葬式がつづく春の公民館

連翹が咲いておんなの忌がめぐる
八尾市 高杉 鬼遊

一合の酒でとむらうほたるいか
からっぽの頭の中で血がさわぐ
転勤の子に会って来た落花生
五月だな五月ですねと老夫婦

富田林市 板尾 岳人

五月だなチリメン雑魚もうまからう
男から女へ渡す丸木橋
仇討ちはイチゴ畑でするがよい
妻の手が少し冷たい御堂筋
父の下駄泥に汚れていた五月

弘前市 波多野 五楽庵

地下足袋を脱げば無口で酒好きで
トンネルの中でボソボソしゃべり出し
動員の歌も五尺の日の記憶
この辺で妥協しようとティーカップ
平均点以下にむすめをやる苦惱

島根県 西村 早苗

水割りの底に妻子の顔がある
土くさい男偽らないくらし
なにか喋らないと心の灯が崩れ
ほのかなる思慕この町に住むと聞く
七人の敵の一人へ笑いかけ
堺市 高橋 千万子

影法師まだまだ春になりきれず
友情のままで共学さようなら
顔立ちで役が決った新社員
旧姓にもどった女のけつまずき
六十の晴着一本朱線入れ

呉市 林野 甦光

襟足の雪のごときを読んでいる
霧晴れて塔を斜めに画架を組む
手刀はやおら明日へもう秘策
傘を持つ杞憂を夫婦笑い合い
子に孫にひ孫に続く武者轍

倉吉市 奥谷 弘朗

悠々といつ死んでもが言える古稀
やりくりのうまい女房の知恵を借り
平凡が続く幸せかみしめる
何んとなく調子合わせて生きてはる
立場上肩寄せ合ってする我慢

美祢市 安平次 弘道

笑い袋に下手なジョークが無視される
白痴化へ拍車をかける視聴率

椅子取りに負けて善人面をする
但し書きどんでん返しはご免だよ
平凡なくらしにもある句読点

富田林市

岩田美代

心足る日なりていねいにバターぬる
袴の折目に男の貌があり

春爛漫人間くさく生きようぞ

杏咲くころには私翔んでます

石鹼の泡から生まれたコント春

倉敷市

野田素身郎

行間に恐ろしいことが書いてある

賞状の数からいっても妻が上

もう五分あと五分結局小一時間も待ち

定年後の話になって気が減入り

卒業式あの子が生きていたならば

熊本市

有働芳仙

春の雲単身赴任の窓に浮き

職場にもいじめがあつた新入社

逆境へ影だけ俺についてくる

他人様のボケが気になる年になり

栄転のふるまい酒の苦い味

下関市

石川侃流洞

都市改造燕へ去年の軒がない

雑兵へ伴奏などはいらぬ唄

関門の茜淋しい芙美子の碑

百円玉終りさよなら遊園地

鍋底を貧乏神が磨いてる

兵庫県

遠山可住

三回目の桜に左遷を労われ

財布・眼鏡・薬 男が旅に出る

桜咲いて去年の借りを思い出し

一日の春へ疲れが腰に出る

アル中と聞く悲しみに負けた友

島根県

小砂白汀

ご都合もおありでしょうがと泣きつかれ

今もって馬鹿になれない耳をもち

初恋の人が猫背のシルエット

風化させてはならないベレー帽

身体髪膚五月病とはなんだ

京都市

都倉求芽

人はみな春の台詞に酔うている

舌に弾こめて七人の敵へ時す

よそ見せず役目悟つた落し蓋

途中から本当の涙に溺れてる

穴を掘る前に良心は捨ててある

松江市

恒松町紅

反骨の父にもいつか痴呆症

紙オムツ嫌いプライドだけ達者

自由主義見合いを二度も断られ

葬式で法衣の袖の胸算用

米子市

小西雄々

税がくるたびにいらだつ爪の先
肩車亡父には返す恩がある
水割りへ話はつきず四季の詩
グルメにもリズムくるわす血糖値
神様の予告がほしい男運

鳥取県

川崎秋女

あの夢もこの夢も失せ鬼と棲む
生き甲斐に鬼を一匹飼いならす
鬼ごっこ孫との距離がちぢまらぬ
おしやべりがしたくて鬼の小屋覗く
そして朝鬼と握手をしようかな

大阪市

津守柳伸

丹後路の雪再会へ暖かし
ローカルの雪昏にそつと触れ
風花へ集団で行くお手洗い
月末を無事乗り越えた梅便り
バーゲンに走れぬ自我を持てあます

京都市

松川杜的

お地藏さん正ちゃん帽がよく似合う
般若経は知らんが朝夕拝んです
大阪はいやいや地下でまた迷い
秘訣などおへんと母の味加減
古稀を未だ「わたしの言葉」持たずいる

和歌山市

西山幸

亡母の日に花盗人をしてしまふ
春は憂しジョーク一つが解せず

手をそれた毯が転がる加速度で
菜種梅雨下手なおんなをくりかえす
私からわたしがうまく逃げられぬ

和歌山市

堀端三男

春風と一緒に回る万歩計
幕切れは言わず初日の刻選ぶ
着飾って心が飢えてゆく世相
肩書きで飾る名刺の疎ましき
服に着く種で始まるサスペンス

和歌山市

福本英子

正座して考えること何も無し
ほろびを繕う指が嬉しがり
春風が吹いてもやっぱり読書好き
それなりの理由をつける知恵哀し
寡婦手当まだ捨てられぬ夫婦箸

倉敷市

小野克枝

白いシャツ白く洗って満ち足りる
幸せが減るから見ない玉手箱
安心の歩幅ときどき踏み違え
許せない鬼に沢山要る切手
安定剤依存の妻をどう裁く

豊中市

安藤寿美子

犬が仔を産んだ話で夕焼ける
ほつという私を選んだのは貴男
自問自答勝手な答出している
辞書用の眼鏡見当らぬから止めた

軒先で雀は何の噂する

松原市 玉置 重人

法善寺さてこれからのうどんすき
青畳受書の筆によく匂う

夫婦も犬も我が家の動作にぶくなり
お水取り首無し地蔵も待っている

待ち合わせふえた四月の花時計

大阪市 中川 滋 雀

会者定離花の便りを待っている
年金の目減りが覗きにくる無職

番付にのる脱税もしてみまし
鉄仮面かぶれば楽な日もあろう

春や春ビル従えた天主閣

奈良市 宮口 笛生

ネギ坊主春の畑の草も伸び
梅の花ひと月先の陽気とか

土産買う旅の女は金持ちで
中飛車で堂々勝負かけてくる

その上に新婚旅行ヨーロッパ

大阪市 西森 花村

春雨の孤独銅像だけが濡れ
オープン戦選挙の方も負けていず

シルクロード私と散歩しませんか
スマートと言われてカマキリ考える

家を出てだんだん道が広くなり

今治市 越智 一水

人生のサイズへ生き方も変える
梅咲いて風がふくらむ平家村

春一番でんちぬごうかぬぐまいか
バカバカと言うてうれしき口にせず

五月晴れ金魚ワルツのよう泳ぎ

東京都 増田 次章

限りある生命言うべきは言うつもり
気がつけば身近になっていた年金

ふんぞりかえるから器見すかされ
勤儉貯蓄世界中からきられる

二次会のツケが忘れた頃にくる
岸和田市 福浦 勝晴

おのれからだいぶぼけたとぼけもせず
戯れに恋はすまじと神諭す

愛犬にクシャミ残して出勤す
バチンコ屋たたくと出る出る税不正

怒り心頭に発して石にけつまずく
大阪市 江城 修史

歳だからで済ませたくない老師の計
無為無策責める如くに風光る

福耳の妻が明日の荷を背負う
春告げる雨に恨みの小商い

日銭追う暮しに春の詩がない
米子市 林 瑞枝

新風が欲しくて都会にきた鴉
母という花のしずくを掬い上げ

紅刷けば夢のかけらがほろほろと
しつとりとライトを浴びる私の絵
無視してもやがては治る疵だった

島根県

堀江芳子

生きていく心ぬくめる数え唄
意地を張る寝顔に見えぬ掛布団
胸のなかいっしょに開く春の窓
わたしにもイジメ血圧飛び上り
春の陽へお喋りしたくなる女

米子市

林荒介

アングルをかえれば偏頭痛も治る
四面壁落書きなおも続けねば
点となり面ともなつてははが来る
父よりもすこし高い樹を撰ぶ
六十の節をト口火で煮詰めよう

西条市

片上明水

婆さんが供えためしは高く盛る
ここからは深目に被る橋の風
悪戯の筆すらすらと走る春
春うらら息子がヒゲをのびしかけ
人の手の温みに馴れた手の厚さ

兵庫県

辻文平

思い出を並べて老いの飾り棚
朱を少し足して明日の画布を練る
妻に勝ちゆずって平和なお茶を飲む
ひょうきんな笑いの裏にある涙

こわいもの一つない実年の女たち

名古屋

越村枯梢

下町の風は温いかめしのれん
居酒屋の酒は超特級だと思ふ
マネキンを横目で睨む二段腹
糸瓜の下でのんびり余生など話す
鬼の子を寝かせる鬼の子守唄

藤井寺市

吉岡美房

政治家の派閥めだかは群れたがり
極道と坊主外車に乗り無税
殴っても死んでも教師に誅首は無い
憲法がどっかへ行つた愛の鞭
何故という言葉ばかりの出る四月

羽曳野市

塩満敏

兎小舎めだかのような鯉のぼり
ミシミシと五十男の肩がなる
スピードが落ちて定年考える
ぐいのみを吞むまねをして品定め
ビール腹歩け歩けと万歩計

米子市

菅井とも子

故里の銅剣に逢うはずむ靴
巢立つまで型紙千枚裁つ鋏
矢印が無くても進む母の道
戦友が相手割り込むすきも無い
桜餅食べに花見に城へ行く

島根県

榊原秀子

ああ樹氷あけたカーテンから見とれ
また計報死なせてならぬ人でした
引込み思案年意識したその日から
木々芽吹く悲喜こもごものうらおもて
ほうき星天女が乗ってるかも知れぬ

河内長野市

井上喜醉

鶴橋の匂いとなったホルモン屋

実年は豊かで丸い視野にいる

タイムーの始動で明けるビルの朝

伴奏が続くと怖い夫婦坂

申告書黒字が好きなボールペン

和歌山市

中島正博

憎い程雨の予報がよく当り

隠居部屋日曜だけは早く起き

老人に老人クラブ嫌われる

賛成の皆んな味方と限らない

飽食に格を落した卵子焼

尼崎市

春城年代

飯蛸ともずくとそこへ熱燭と

霊界があるような気も三次元

この町の猫増えつづけ増えつづけ

神の道インターホーンで聞いておく

バトカーの追跡劇も春の宵

尼崎市

春城武庫坊

髭剃って野暮な話は聞き流す

お世辞など言わず山茶花咲き続け

申告に税務署笑顔準備する
雪の日の朝のみそ汁豆腐浮く
越冬の蠅が無賃でバスに乗る

和歌山市

若宮武雄

履歴書の余白に悔いと安らぎと

佗び寂びも肴にしたいちゃんちゃんこ

札束の重さ忘れた庭いじり

喧嘩相手を杖にしている喜寿の坂

春めいて口から元氣もどる齡

京都市

山本規不風

運強い女で神を弄ぶ

姉さん女房のブームになって打明ける

鳴る受話器とれば情けに負けそうで

木の芽だち電話は遠い女の声

表札の亡夫に一人を守られる

寝屋川市

稲葉冬葉

ひとことを溜めて交換条件をのむ

ジャンプステップ手の中に石礫

その他の中に彼が居るから不思議

野菊の里で少し記憶をとりもどす

人間をおやめなさいと言うてやり

唐津市

田口虹汀

外食に飽いた赴任の永い冬

火を噴いた山とは見えぬ雪の富士

傘寿なお嬬鑠妻の処方箋

額いた儘で開かぬドンの口

隻眼のたるま会釈を忘れない

唐津市

浜本義美

妻も子も夫の味に合わせられ

高齢化養老院も順を待ち

吹き溜りゲートボールの音響き

家計簿の赤字弁当持たせられ

植木市小さな春を持ちかえり

大阪市

本間満津子

しゅんのもの忘れぬ暦が舌にある

おしゃべりの好きな嫁女とうまが合い

骨折り損一つ賢くなりました

革命を連続ドラマのように聴き

目ざす家すぐ見つかった沈丁花

和歌山市

神平狂虎

淋しくて横に流れてゆく煙

男だったと言われるような樹になろう

広辞苑で酸素不足を補おう

海とおんなじ彩の心でいられるか

石になる前に恋などしてみよう

西宮市

草刈墮駄

エライのは金持乞食どちら上

子子よ蚊にはなるなよ憎まれる

しがみつくほどでない世に子を創り

靈魂がないなら寂し死ぬのいや

一秒の長さを案外気が付かず

鳥取市

森田熊生

げんこつの痛さがわかる子に育て

本心を試すかわい嘘をつく

子を入れる風呂の温みを忘れない

人間を大切にして土と生き

新しいエンピツで書くいい答

近江八幡市

前川千賀子

花明かり女は秘話を語り出す

隣の面に似せてオーケストラを聴く

米朝の落語は自前の顔で聞く

言い訳は止そう窓から梅の香よ

四季巡る熟女の椅子に近くなる

大阪市

藤田頂留子

落ち込まず外へ飛び出す影法師

忍者の血引いて機敏な影法師

ビル前で駄々をこねてる影法師

花曇り気のすすまない影法師

太陽と幼なじみの影法師

西宮市

西口いわゑ

駅前広場で小さな寄附をする

仲よしの異性を友と見てくれず

ロボットも熱いコーヒー欲しくなる

恋人のピンチヒッターからの仲

奴隷みたいに幼児とんで来る

兵庫県

中田白李

晴れ着まで届かず学費が追うてくる

夢の続き見ながら昼の飯を食う

台本にない父の計に狂いだす
尊敬のできる人への膝枕

お化粧を落して妻の顔になる

姫路市 大原葉香

僧兵の血を引く古都の寺の衆

おどり場に立つて上下の敵の位置

神に彩もらい見事な紅生姜

こせこせとするなよ雲の浮遊主義

ぜんまいを捨て針を捨て腕時計

高知県 赤川菊野

石女の瞳にピカピカの一年生

マンネリの暮しへ赤い服を買う

これしきの事も許せぬ性悲し

馴れ合いのストへ鉢巻しめて出る

Uターントンボ眼鏡の嫁をつれ

寝屋川市 岸野あやめ

明日死ぬぬが泣くよ寒の水

人皆に時は移ろい亡父の忌

お人好しだけど貫くものがある

抵当へ泣いて押したか福相印

海外旅行離婚寸前危機回避

出雲市 園山多賀子

その過去を責めてはならぬ沈丁花

肩で風切つて男に沽券論

男三女三我が家の弥次郎兵衛

帰巢性信じて長男羽ばたかせ

受け皿になる姑がいてそつがない

平田市 久家代仕男

人をさす指がぼろりと落ちた夢

殺すより生かす言葉を探さねば

自由とはいいいもの鶏の放し飼

ロボットを教えた頃が花でした

湯豆腐の厚切り少し拗ねている

堺市 藤井一二三

中島生々庵先生を悼む

浮き草の句を鞭として座右に置く

古都に春呼ぶ水取りへ息をつめ

再会の思い出ばなしあとや先

み仏の慈悲顔を出す露の臺

松江市 柳楽鶴丸

すき焼の砂糖は妻の舌加減

器用貧乏女房の手を見つめ

二人四脚妻は自立しています

白いページの押し花が語り出す

松江市 舟木与根一

悪運も誇張している戦中派

てにおはに少うしホケが出はじめ

ロボットもやがて余生が欲しくなる

啓蟄の声に温い雨となり

出雲市 原独仙

東風吹けどわが家の梅は匂わない

のんびりと年金くらし他人の目

まだ一人揃わぬ老人会のパス
重ね着を着たりぬいだり春遠し

出雲市

板垣夢酔

老いらくの恋が選らせたナウイ柄
弾む音逢えるときめた蛇の目傘
料理屋の徳利狸に似て化かす
どこへでも行けと叱った子を捜す

出雲市

吉岡きみえ

愚痴ためてためて月夜に吐きにゆく
ひび割れた茶碗に愚痴をひとつ盛る
忘却の果てに哀しい虹がたつ
ブライドがちよっぴり傷つく夜の雨

鳥取県

清水一保

ネクタイも相手も選び靴を履く
もういいかい雪の下より春を呼ぶ
美しい愛に病魔も手をこまね

新大統領に我が家も妻をかつぎそう

鳥取県

林露杖

旅一夜湯原温泉の郷雪の里
温泉に浸りひと日憂世の傘の外
額づけば高德惚ぶ十字の詩
満蒙のバズルが解けぬ孤児帰る

鳥取県

新家完司

公園のハト雨の日は腹がへる
しがらみの何を忘れる昼の酒
雑音をさかさに苦い酒をのむ

王様の気分で今日も酒をのむ

鳥取県

土橋 螢

結び目は聖女終りの日のしるし
跳んだりねたり男まさりになりそうだ
春一番フィリピンから動きだす
鶯よ信じているからなくてくれ

鳥取県

中原 諷人

椿咲く女系家族の高砂や
一つ違えば別離の詩の発射台
胸張って妻を優等生と呼ぶ
耐えているのは佗助に負けぬ沙羅

鳥取県

中原 みさ子

少女からオンナに変える花暦
ポケットの掌には合鍵もっている
花ごよみ女の気分変えさせる
キャベツから巣立つ蝶々の春がくる

鳥取県

石田 清泉

リハビリも他人のような指の先
透析を空ごという眼をそらす
日の丸を掲げる竿が見つからぬ
燦々と地球が動くのも四月

鳥根県

梅 みどり

しつけとく形見悲しき日をしのぶ
逢えぬまま祖国の枕ぬらす孤児
湯豆腐へまあるくぬくもる夫婦酒
世のひずみ子等のいじめに輪をかける

島根県

錦織文子

設計図へ茶室の夢は消えました
廻り縁少しぜいたくな話など
老夫婦の城日当りと静けさと
中庭へ楽しい四季の夢も盛り

米子市

茂理高代

二人して歩いたあとが道になる
嘆くまいあと半生の砂時計
嫁姑言葉のあやが淋しくて
花の下今日は阿呆になれと言う

米子市

政岡日枝子

ワシテンボ遅れ椅子からたち上がる
気分よい椅子と思えぬ社長室
ポシエットは気苦勞なんか嫌いです
一本の杭からはじまる思いやり

米子市

石垣花子

あとへ来る者へ足跡みだされる
結び玉忘れせつせと縫うている
みぞおちの痛みまだまだ続きそう
倦怠期もう変化球投げて来ぬ

米子市

青戸田鶴

春待てず試行錯誤をくり返す
あたたい話が好きな桃の花
風も人も変りやすく落着かぬ
橋渡る時も離せぬ本がある

米子市

寺沢みど里

人を許して指にやさしい血が戻る
ときどきはメニユーの欲しい飾り皿
巢立たせて二人の鍋が煮えつまる
古い笛吹いても寄らぬ子の育ち

西宮市

野呂鶴汀

上役の駄洒落に笑うはかはなし
倅せは叱った妻がついて来る
口角泡を飛ばしてたかが釣り
ドアのノブ握って不倫右左

西宮市

奥田みつ子

谷底で見た青空を忘れない
才女いま可愛い顔の酒の席
似た者同士だんだん視野がせまくなり
幸運をひっぱる紐を編んでいる

西宮市

藤村宏子

花持ちがよすぎる蘭の無常感
好意だと甘えすぎてたバラのとげ
友ひとり失くすは易し春風
向い風母の懐だけぬくい

岡山市

川端柳子

温顔の浮かんで消えるばたん雪

悼生々庵先生
快気祝へ

一休み春へ足どりたくましく

結婚祝

カップルのま白さ憧れ彩に染め

石穿つ雨だれながら丸い艶

岡山市 井上柳五郎

酒たばこ飴もなめると聞く嫌味

自画像へ主役ときめるポーズ選り

吞めるから元氣なんだと酒やめず

ハレー彗星緑減つたね地球さん

岡山市 時末一灯

返本は縄目もきつく裏へ出る

つんどの書棚一つの貌をもつ

シヨックです遺憾ですなど聞きあきた

りハーサルのようにはいかぬ五分前

高槻市 辻白溪子

カラオケへ音痴の下戸がついてくる

腹立ちへ酒では妥協をしない意地

セールスがコートを脱いで来たフアイト

腹たてて見てもお酒はよう飲まず

高槻市 竹内花代子

手作りのブローチ貰うた誉め言葉

戒名の一字に胸の痛む文字

道後の湯坊つちゃん気分で浸かる旅（道後の旅にて）

水墨画よろしく三阪峠を雨のバス（"）

倉敷市 稲田豊作

裏山に鶯老農畚を編む

農愉し蛙の話はよく笑う

結納金物価を知らぬ振りで来た

新聞の醜惡記事に慣れさせる

倉敷市 藤井春日

花の里札所巡りの杖は反れ

鬼仏同居人の心の哀しけれ

青空へ夢を預けた鯉のぼり

貧乏症軽い布団じゃ眠られず

大阪市 天正千梢

古里へ傷口ソツと埋めに行き

沈黙の力千年の杉見上げ

髪形変えて落ち着かないひと日

ボタンかけ違えた事から沈みかけ

大阪市 黒田真砂

訃報聞いた日も木枯しの昼の月

立春の寒さとまどう猫柳

一人聞く雨空白の刻を越え

慰めた友から貰う温いうそ

大阪市 神夏磯道子

朝食に菜の花漬けを添えておく

即席へ譲らぬ母の削り節

お料理の技が外食断らせ

平日の梅園老いのひとり言

大阪市 河井庸佑

場違いがひとりまじって座が白け

先生をころりと騙す手を憶え

ぐるぐると話回っただけの会

気が付けばもはや戻れぬとこに居る

大阪市 山根いつを

改札でボクは五ツや言うのやで
あれもこれも買うてやれない肩ぐるま
血統書やぶりすてたいブルの恋
だましには一人も来ない無一文

大阪市 大塚節子

熱いもの食べて寝てなと春の風邪
風花や社葬に義理の顔がある
バス停へ足跡つづく雪の朝
逝く春の名残を惜しむ鐘の音

大阪市 柳原静香

せっかちな同士で早い梅を観に
心の鍵忘れて交通事故に遇い
傷よりも心の傷をもてあまし
もしももしもと小さな傷をなぐさめる

和歌山市 内芝登志代

ライバルの足音先へ先へ行く
花柄を選つて粧う春の席
大樹の蔭狙つて個性のない男
口下手が上手に世渡りしています

和歌山市 福井桂香

作戦を練つて湯舟に浮いてみる
汚されて口紅憎いティーカップ
セザンヌもピカソも持っている噂
イヤリングつけて別れの言葉選る

和歌山市 山川克子

円満な顔だが何か物足りぬ

胎教も計算しての育児法
幸せを招く笑顔を絶やさない
年ですわ僕より若い人が言う

羽曳野市 榎本吐来

幸せそうな奴にちよっぴりケチをつけ
ぎこちない算盤で食うきりぎりす
昼酒を勧めてくれるのは他人
監督も観客もない夫婦劇

羽曳野市 佐野白水

一病と永い付き合い七十三
五十回忌親の年越す子が列び
在位六十年式典神に祀る気か
啓蟄に妻の動きも速くなり

羽曳野市 中村優

ほそ細と火種を護る夫婦酒
雑兵の己は所詮影武者で
揃わない茶碗へ呪文かけてみる
インスタントカメラへ姫が笑わない

東大阪市 斉藤三十四

ふる里は俺を子供にしてくれる
金の事なら初手からノーと言う
三面に春の雪崩が大きすぎ
ジャンケンで選ぶ民主主義もある

東大阪市 森下愛論

窓際に居て頬杖の午後三時
空想を背負つて歩いている寡黙

10階に住んでラーメン届けさせ
友情の限界これまで金からむ

東大阪市

崎山美子

亡母の字が梅酒のビンに生きている
親交を誇るペアーがかつ歩する
幸薄い女がおぼえた酒の味
ホームバー空のボトルも役にたち

尼崎市

奥山美智子

春風へ翼を限りなく広げ
勲章を飾った部屋に通される
神さまとご縁を結ぶ守り札
無の境地神も仏も身に宿る

尼崎市

角野かず子

新緑の風が書かせた友の文
玉手箱運んだ波がもう見えす
いつからか足が出てきた子の布団
体調がよくてうかうか乗せられる

尼崎市

伊藤春子

すべて空悟れないまま冬の坂
枕を反す言葉ひとつが鳴りやまぬ
円空の柾目酷しい冬の旅
倅せを絵にした家に反逆児

唐津市

仁部四郎

食堂の味に詳しい父子家庭
初耳のように妹五十歳
安かったからよと妻の青い靴

秤では卒業証書のこの重さ

唐津市

久保正敏

蹣いた靴で乗り継ぐ亡命地
顔いてばかりはおれぬ娘の主張
口説かれて編棒交又させたまま
春の土堤お喋り好きと聞き上手

唐津市

浜本久仁於

外食の店で訛を尋ねられ
散策のコースを変える春の風
顔いた医者無口が気にかかり
四月の駅皆んな手を振る人ばかり

倉吉市

渡辺独歩

これはまあ百寿の構え皮膚に染み
円高で野麦峠の噂聞く
交際の疲れわが家に五月病
老いらくの恋字足らずの目をかこつ

倉吉市

渡辺菩句

お陽さまはいつも童顔なんだぞーと
衿穴にバラでも挿して訪ねよう
この坂もあの寺へいくだけの道
人間は穴だらけと思う日よ

守口市

羽原静歩

王将を泣かせてみたい歩の心
女坂男坂よりきびしくて
家系図の中に煩惱蒔いて
檜山が近いと思うガラス拭く

守口市 野呂右近

通院の日を日めくりを書いて妻
御自慢の嫁糠味噌に手を入れる
安売りのチラシに負ける市場籠
形身分けねじ巻く時計離されず

岸和田市 清野こう

雪しんしん姉逝き心まで冷える
もがり笛肩よせて聞く老い二人
子に買えぬ雛人形を孫に買う
集まれば女着る事食べること

岸和田市 古野ひで

血縁に薄い宿命さだめという独り
遠い日の傷みが疼く春風
老人のぼける話を今日も聞く
人形師の想いを秘めた恋人形

姫路市 人見翠記

生々庵先生御逝去
雪しきり師の逝く道は白い道
頭の中空っぽにして見る銀世界
石段をゆっくり降りる独言
録音の我が声いぶかるままに聞き

姫路市 丁坪サワ子

家風まで持って嫁いで来る娘
媚知らぬ女で涸れた砂漠ゆく
土筆ン坊春の恵みに袴はく
嫁に姑避雷針が弱過ぎる

富田林市 田形美緒

マリオネット愛がもつれて絡む糸
腹話術坊やが本心しゃべり出す
ばんばりに安堵が灯る老母の雛
心機一転未知の扉に触れてみる

大阪府 坂口公子

あの世から来た招待状は受けられぬ
やってごらんあなた一人に出来ますか
年ですねなんて私に言うのです
妻や子の祈りへかける真帆片帆

寝屋川市 江口度

父の忌や千の辛夷が灯をともし
猫柳もうはじけるかはじけるか
自然界咲く順番をわきまえる
三月の街は親子でみちあふれ

玉野市 小谷仙山

いい話聞いたと涙ふいている
崩れない積木は誰も振り向かぬ
春を呼ぶおたまじやくしの浮き沈み
春の雨人には苦が有り楽があり

大和高田市 岸本豊平次

駆け込めばストーブの前あけてくれ
家中が遺品になった七七日
何でもない振りをしすぎて知りぬかれ
自然から小学唱歌が消えてゆき

竹原市 森井菁居

現役の旅なり過密スケジュール

騙された振りしてみてもおもしろし

弁解を許してくれぬ棒グラフ

僕もセールスでうっかり妥協する

八尾市

宮崎 シマ子

姉夫婦もうちの夫婦も同じ愚痴

欲へらした分だけ幸せ寄って来る

多岐亡羊楽しみ一つ減らそうか

味噌ラーメン婚期を過ぎた顔そろい

高石市

浅野 房子

ここからは渡ってならぬ橋である

枝ぶりをほめた序でに孫もほめ

仮住居いつか住みなれ猫といふ

病める子に桜の一枝活けて出る

神戸市

仲 どんたく

冥土との綱引病衣の手の細さ

野心きらきら余命の指を折り

鹿の声修二会の僧は腹がへり

共通一次解けぬ父だが父の位置

寝屋川市

平松 かすみ

思い出は溶けてしまったハートチヨコ

うれしくて多弁になった内裏様

合格の足しにはなった満期金

両肩へとてもやさしい仕舞い風呂

今治市

矢野 佳雲

善意だと取れば笑うてことがすみ

我が子とも知らず種牛すれ違いうしろにいる男を知っている鏡
起重機の夢は地球を持ち上げる

呉市

横田 英詩

ライバルに毒矢を向けぬ日の余裕

セールスが素通り忌中と書いてある

流行を無視する妻の束ね髪

よりどころ老母に読経とカラオケと

大田市

藤田 軒太楼

今日もまた紙上にいじめの死の抗議

違和感が出てすんなりと親しめず

あの時の成行き噂の種となり

原作はここら辺りで愛にとけ

兵庫県

藤後 実男

素顔なら言訳少し聞いてやる

古寺に又秘宝出て来たレントゲン

自動車などいらぬ意地張る万歩計

マージャンで上司に負ける技をもち

笠岡市

松本 忠三

右足で踏む第一歩からけちがつき

さようならただそれだけの付合か

縁先に暮色が襲う爪を切る

為す術もなく引かれる後ろ髪

檀原市

岩井 本蔭棒

雨の音聞きながら視る雨予報
憎い人思い切れない夜の雨

求人へ過去を背負うた男女佇つ
売り声を今日は高座の芸に聞く

桜井市

河合茂雄

エリート隣の席に居たくない

浮き沈み沈んでばかりいる私

雪国でないから奇麗な枝の雪

職人の誇りは無口の奥にある

浜田市

中川幸一

佗しくもまだ生きる気の休肝日

売っという吸い過ぎに注意とは何だ

推理小説結末急ぐ斜め読み

広告の写真が憎い瘦せぐすり

豊中市

田中正坊

時計台わが青春に悔い多し

六十路にもまだ残ってた登り坂

限りあるいのちを思う砂時計

啄木は知らず手を見る赤ん坊

七尾市

松高秀峰

真白のエプロン持参里の母

金銭にとてもルーズな赤い爪

進学の子がいて家計簿四苦八苦

七転び八ころび癌が追って来る

大阪市

長谷川春蘭

鈴なりの絵馬の中から運もらう

彼岸会善女になりて姑に添い

物の芽も遅速貴賤の区切りあり

日曜祭日ご遠慮と言う切符

家庭事情包丁の錆知っている

写真屋が顔の整形やつてのけ

大阪市

岡田ふみ

毎朝の鏡に亡母に逢う思い

春来ると思えば雪も暖かい

何事も順応性だと思ふ

大阪市

吐田公一

口説かれるムードを作る遠廻り

嫁の座を温めてゆく日の流れ

損ばかりする世話好きの父が好き

大阪市

塩田新一郎

雪の朝笈さも知らず逝きし友

婦人会乗ったらしやべるたべるねる

青帝の斥候見たり初蜥蜴

大阪市

板東倫子

笑いたくないギャグばかり氾濫し

人間が好きでこの世はパラダイス

あこがれを込めて不倫を口にする

大阪市

古川美津枝

一円玉たまった頃に彼岸来る

カラオケの自己陶醉が湯舟から

振りむかす程の魅力の窓口よ

大阪市

町田達子

コーヒーの香にお茶の間の良いムード

街角の花屋で拾う花言葉
ピクニック愛の歌聞く野の仏

大阪市 松尾柳右子

早起きの出来た一にち午後の雨
窓に雨加速の歯痛猫をける
休息へセールス電話の多い事

鳥取県 森田布堂

地震国忘れてビルが天を突く
肩書が弔辞祝辞と走らされ
北帰行編隊組んで渡り鳥

鳥取県 中原汲香

「当るのください」宝くじをあさる
銀行をかけこみ寺として安堵
寒い風またお年寄り連れていく

岸和田市 原さよ子

名シーン余韻を抱いて帰途につく
集会が話し込んでる子の話

お城まつり

園児描く曲ったお城も花の中

岸和田市 芳地狸村

一言のあとが淋しい軽い口
阿呆なこと言わんといてと肘鉄砲
孤児を抱く腕に力が入る母

岡山県 直原七面山

大の字に寝て豪快な夢見る気
貧乏を気にせず生きて来た一家

裸婦の絵に光を当てる窓を開け

岡山県 岩道博友

実年のあくび隣が気を使い
早春の無策へ古い時刻表
さくらんぼ実れば入社も馴れて来る

島根県 松本はるみ

犬の死がこんなに悲しい梅が散る
年金の証書がとどく空は青
花束に嘘はなかった離婚劇

島根県 松本文子

斜めから眺める位置を守りぬく
逃避する場所湖の波の音
バトンタッチした子に焦立つこと多し

島根県 岸本輝水

付けのある店から歳暮が先にくる
一周忌一言居士が同席し
この辺がお開きどきと年の功

島根県 北川民子

夢がある太陽みたいな孫がおり
老いらくの恋も楽しや鳩時計
バスデオーデコロンぐらいかな

島根県 藤原鈴江

歳のこと忘れてハミング春のうた
おさんどん止めて淋しい妻楊子
生き抜いたつもりを星に笑われる

倉吉市 淡路ゆり子

やさしさが嘘を言わせる見舞客
地球儀を廻してさがす水呑み場
どの指も傷に耐えてる母の指

倉吉市

野中御前

底無しの壺にバツカス住んでいる

無位無冠この世の別れ藁草履
又しても許してしまう薬指

和歌山市

天満三千代

雨あがり春の匂いの陽が跳ねる

ワンマンと思えぬ細い目の笑顔

午後からは私の時間野良着脱ぐ

和歌山市

寺田裕美

緊張がぶつんと切れた春の風邪

十着でいいさ十人走ったら

採れたての素顔朝市活気づく

和歌山市

後藤正子

雨の日の猫が思案をする小窓

いつまでも母が頼りのお針箱

風呂敷に包んでくれたおもしろいやり

和歌山市

玉井豊太

鯉のぼりお日さま出れば休まれぬ

耐えている今は息子の持ち駒で

混浴に浮く長髪の喉仏

米子市

田中亜弥

真白な手でおおかみが嘘をつく

北風に手元が狂う気のあせり

思い余り一目散に走り出す

米子市

光井玲子

真夜中に鉛筆一本尖らせる

歳月が我慢に勲章くれました

水油亡母の移り香忘れない

豊中市

上田登志実

葦の芽が日ごとに伸びる散歩道

転勤で喜ぶ家庭泣く家庭

子は私塾母はカルチャー忙しい

豊中市

奥田満女

妻の居る窓は明るく春の夜

この校の歴史のように椎大樹

春風の土手院長も患者らも

高知県

小澤幸泉

卒業生M君の自殺

友の逝く胸の扉を閉じたまま

結局は話題をつくり枯れてゆく

長男とまだまだ話す夜が過ぎ

高知県

曾我部裕

まっとうに生きて何かが物足らぬ

目くじらを立てたら恐いかと思ひ

金持てばとにかく人に吞ます人

倉敷市

小幡里風

部屋毎に花活けてあり妻は留守

再会のスタイル少し派手にする

啓蟄の寒さへ二の足踏んで虫

妻入院一緒に歩ける日は何時か
妻病後妻の指図で炊事する
仙台市 川村映輝

自信あり相手の動きよく見える
綾瀬市 大山と金

地震から逃れられぬと住んでいる
生きていてよかつた死にたいこともある
中国の養母の許に帰ります

吸いすぎのガンより家計簿が恐い
新宮市 川上溪水

知識には無縁の本がよく売れる
岡山市 行吉照路

還暦に万歩計と手をつなぎ
ふりむけばライバルしかとついて来る
宝塚市 丸山よし津

自画像に髭がついてて嗤い出す
動く歩道大阪人のせっかちさ
宇部市 平田実男

振り向くと傷つく事も見てしまふ
毎日がきれいに幕を引く稽古
靴ひもを結ぶ男へ敵が見え

草取りが苦になる土地をうらやまれ
ありし日の父に似て来た皮下脂肪
枚方市 二宮山久

里帰り手打うどんにある温み

再会へ心の動揺かくせない
自由におよぐひもは妻がもち

従いてゆく気になつて嫁に親しまれ
春の顔見せに雀が庭へ来る
交野市 山本テルミ

ばあちゃんががばうて共に叱られる
弥生の校門矢絰に袴
町田市 竹内紫鍔

ビルの谷間で叫ぶ焼芋
フアンレターの舞い込む長寿
福岡県 横地雅風

社交には疎く定年妻と子と
手紙持ち歩いてポストの日が遠い
芦屋市 竹中綾珠

万物を愛すとは嘘蛇嫌い
抗日の中人の命の尊けれ
箕面市 坪田紅葉

養父母のご恩忘れぬ血の絆
庭に立ち梅の香りの風を待つ
寝屋川市 堀江光子

病い足かばいながら日が暮れる
淋しいがこの方がましと一人住む
いつまでも夢をみているシクラメン

仲人口わが妻ながら舌をまき
奥さんに声かけとけば大丈夫
留守番とさとした犬のさびしい眼

留守番とさとした犬のさびしい眼

堺市 柿花 紀美女

木枯しへ葉袋が増えて行く

小走りも出来なくなった気のあせり

犬死んで少女一日無口なり

羽咋市 三宅 ろ亭

花の宴身赴任ら肩を組む

入学のスナップ大学の門に立ち

寄り切りは土俵の上だけでない

諫早市 原田メイ シュン

左遷左遷俺はローカル線に似る

老いて尚自慢は浮気の同窓会

貸し傘をさして帰る倦怠期

神戸市 山片 紀雄

土地掘って昔と語る奈良の丘

新調の装い春を翺びたがる

服一つ作ってからが高くつき

弘前市 田中 叶

柿の木があり因縁の深い家

少年の日よへりコプターのピラが降る

子供等に貧乏というおクスリを

出雲市 石倉 芙佐子

人形に座り心地の悪い椅子

人形が貰われていく古い家

いい人の不幸を背負うて流し雛

浜田市 佐々木 裕

白百合も覚めれば高慢ちきな花

ステップを踏んで不倫の肩を抱く
故里があるから砂漠に居て住める

和泉市 西岡 洛醉

定着の背筋が痛い宮仕え

雑兵のひつぎは貸借無い軽さ

実年の平和五臓に酒がしみ

羽曳野市 田中 隆二

そこまでは許してあげる春の雨

沈丁花妻も私もよく眠る

ペランダの鉢にも狂い咲きがある

姫路市 松浦 輝子

色眼鏡かけたお方とつき合えぬ

富士額櫛巻似合った亡姉思う

小説を地で行くような友を持つ

貝塚市 行天 千代

あっさりとは別れなはれとゲスト言い

女一人静かに生きて薄化粧

白酒も一人で淋し雛の宵

西宮市 津山 冬子

ひとり居のくらし羨む他人の目

花だより受話器の声に誘われる

古都税を仁王あきれた目で睨み

川西市 松本 ただし

分銅の上り下りで来た夫婦

脱サラの道がローマへ続かない

底冷えに朝刊入ったらしい音

皺の数鏡もやはり疲れたか
たそがれて来たが翔びたい夢をもち
飽食の教師励ましなどはせぬ

境港市 細木歳栄
岡山県 二宗吟平

中島生々庵師を悼みて(二句)

名鑑の遺影へしばし手を合わせ
先生のうき草の句を口ずさみ
隠居部屋孫の飾りがここかしこ

倉吉市 広本文子

読んで読んで覚えてしまふ母の手紙
手短な言葉つぎたす弥生風
鮮やかに貧亡くしが当てられる

吹田市 茂見よ志子

マンネリに陥る女の台所
夢のない男が口説く酒の席
陽春に靴のよごれがめだつ朝

吹田市 園田文子

湖の愛を告げてる渡り鳥
曲芸のアシカの目には嘘がない

守口市 稲葉星斗

万一の損を保険でカバーする
あこがれの合格通知を親とみる

大阪市 北山悟郎

日溜りに此処にも一人ボスが居る
生きのびて検査次々ひっかかる

第18回 東洋樹川柳賞贈呈川柳大会

第18回東洋樹川柳賞 田口麦彦氏
日時 昭和61年5月11日(日) 10時半開場
会場 神戸市立福祉センター5階
婦人会館

神戸市中央区橋通3丁目4-1

(湊川神社西門前)国鉄神戸駅、地下鉄
高速神戸駅下車北へ5分

会費 千五百円(記念品・昼食呈)
兼題 飽食 (当日発表)

夫婦 林 瑞枝選

変わる 長谷川紫光選

脇役 山本 翠公選

耳 中尾 藻介選

夜 橋本衛門七選

光る 寺尾 俊平選

矢 小松原爽介選

特別課題(一句)塩 藤田 紫石選

講演 席題なし・各題2句・締切12時
「十七音で何を耕すか」 田口 麦彦

懇親宴 三千円(当日受付)

主催 時の川柳社

自選集

市場没食子

生々庵先生悼(二句)

書・画・川柳・多趣味でプロ級惜しい人
リハビリの効果もむなし計のたより
僕の句集の序文も書いてもろた仲
退院の日も点滴をして帰り
尿量を気にして茶を呑みコーヒ呑み

八木千代

春からの計へうすすみのいろは文字
歳時記を洗って冬をまぎらわす
樹の瘤に声をひそめている昔
読みのこしていたのは夏の物語
風すこし止み桃が咲く桜咲く

小出智子

晩年の夢を薄墨色で描く
せつせと鍋を磨くたのしみだけはある
墓の前甘えところが少しある
墓参りすませてどつと草臥れる
もう何も急ぐことはない亀夫婦

月原宵明

生々庵名誉会長ご逝去(一句)

探梅の佳人がひとり還らない
十円の釣り忘れない銀狐
猪口才と思えど総理答弁し
豊作を国も農夫もよろこばず
裏窓のわびしさ見せている団地

金井文秋

雛壇を眺めて妻の忌を思う
もしもの時に要るかも知れぬ名刺持つ
ファミコンがないので孫が来てくれぬ
減税のポーズに騙されてはならぬ
情熱が無事な男にしておかぬ

尼緑之助

ぼつねんと猫も見ている春の雪
飲み過ぎの足を舗装に裁かれる
カクテルの油断に逃げた青い鳥
寒暖の連れが急いで春の音
どっこいしょ庭の四月が呼んでいる

春の夜を霞乃晶子の歌哀し
伝わらぬ愛をグラスの底におく
負けて来て又叱られる男の子
本名は何と呼ぶのか知らぬ柳友
柳友の計報相次ぐ春寒し

エメラルド毀れ易さも尊ばれ
選民の思想おごりのかけり持つ
貝拾い遠い遠い日を思う
焼き捨てた文が心で炭になる
嫁という言葉が苦い娘親

悲しみを和ませ少し雨が降る
夫婦箸たがいの打算気にしない
新聞を読んでる妻が憎らしい
夢のある夫婦で額を買いかえる
谷底をのぞいて小便したくなる
振り上げた拳へ咳が止まらない
退職金銀行さんに攻められる
浪人を抜ける鉛筆とがらせる
アリバイのない合鍵を一つ持つ
塾へ行く鉛筆母に削らせる

ひそり咲くさくらも尼も美しい

藤村 女

川口 弘生

正本 水客

小林 由多香

黒川 紫香

王様が笑うお国は平和です
罪のない顔で寝ているお父さん
五月晴れ勉強部屋も開け放つ
五人目の敵とは握手して別れ

椅子の白さが男の明日を責めたがる

孟宗のはしりも古い友がいる

転轍器みたいに訣れ話する

軽い財布でちょこんと妻の椅子に
騙し絵であろうと夫婦信じ合い

忘却の彼方から未練が舞い戻り
ひたすらに照れている惚れている

上品も過ぎると白い目で見られ
枯山水しばし浮世を忘れさせ

もう一度燃えたし若水ぐつと呑む

ささやかな気くばり出来る部屋がある

気まぐれな男が知ってる安い酒

夕暮れの春風いじめなどは無い

ふるさとの大阪弁のまま生きる

善人の善意が近頃うとまれる

落魄の人は他国で月を見る

家康が好きになれない生一本

しあわせな風船御所の庭へ落ち

市川 鈴魚
(鱗魚改め)

本田 恵二朗

児島 与呂志

工藤 甲吉

窓際で源氏鶏太の本を読み
悪党は盗んだ金でクジを当て

阿 萬 萬 的

第十七回日展を見て

室生路の雨は音なき色ばかり
雨後の画に一条の滝光つてい
秋を惜しむ色へはつきり枝の先
黒が基調で描く廃船のある港
城のある村へ名もなき白い花

大 矢 十 郎

恩赦などないローンの長い刑
八方美人祝儀袋の束を買う
万一と言いいにくい事を言い
家計苦しめてゆきます両替機
パチンコのネオンは労働者が灯す

野 村 太 茂 津

嘴を入れるな旅のプラン描く
全て委してどこか一本抜けている
生理的に合わぬが存在価値がある
そんな絵はとも画けない嫉妬かも
愧じることも多く愚かな口拭う

長 野 文 庫

切り札をかくして笑顔見せている
愛の鞭とは都合良き自己弁護
世はさまざまわれ領域をはみ出さず
柳の芽光りの精が艶を出す

猜疑心買物籠を覗き込み

山 内 静 水

お使いへ妻の財布の鈴が鳴る
雰囲気へ終始笑わぬのが一人
ワープロの投句一見佳句に見え
また一人一人大正も遠くなる
父の歳はるかに古希のケーキ切る

藤 井 明 朗

春ひらひら札所めぐりの夫婦笠
いくたびの迷いの道を抜けて喜寿
人生の流れに丸く石を積む
幸不幸ころろの中に棲んでいる
祝在位六十年にわたしは喜寿祝

水 粉 千 翁

生きのびるくらしのいくさいとおしむ
合掌に仰ぐ冬木立の新芽
まごころを花のしずくにわかち合い
冬愛す蓄浅春譜を奏で
めぐり来る日のうれしさよ花匂う

米 澤 暁 明

につこにこ嘘を見抜いた母の顔
メモの○あれ何だっけ何だっけ
いたわって重荷わけあう老い二人
幸せか失うものが何もない
水泡に帰した努力をまだ続け

延原句沙弥

東野 大八

請求書上様とありほくのこと 句沙弥

― 贈出して踊っているとは妻知らず ―

― 聴診器女の肌に残し ―

こんな風味のあるユーモア川柳をものしている「ふあうすと」の延原句沙弥は、「川柳雑誌」の須崎豆秋、「番傘」の高橋散一とならべ、ユーモア川柳三羽鳥と称した人がある。惜しいことにこの三羽鳥はみな故人だ。

「自分のことをいうので、いささか面映いだが、ふあうすと」のユーモア作家句沙弥：ということをよくいわれる。いわれども別に何とも思わなかったのであるが、ふあうすとの人とはかなりではなく、他の吟社の人からもそんな批評を聞くこともあるし、それが二度や三度ではないので、ちょっと考えてみる気になった。(略)

先日ある会合の席で、ふあうすとのある先輩が、自分を紹介してくれた言葉に

「この人はふあうすとにおけるユーモア作家です。しかし、この人の句には強いてユーモラスに作ろうとする跡が消えていないのが欠点です」という意味の一言があった。(略)

正にその通りである。さすがにと思つて、

自分はその言葉に文句なしにシャツポを脱いだ次第である。自分が人生に徹した、天性天来のユーモリストであるならば、巧まずしてユーモラスな句が生み出せるはずであり、出来上った句に作為の跡の見えないということは、心から湧き出たままではなく、それに小手先の細工が加えられているという証左であらう。(略)

「どうだこれでもおかしくないか」「これでも笑えないか」とスタンドプレーを演じて

人氣を博そうというふうな芝居気は毛頭ないつもりだが、ただ、人情の底を流れる笑いの中に、川柳のふるさとはあると思つている自分としては、何んとかして作り笑いでない笑顔、巧まざるユーモアの句をものして、寂しければ寂しいだけ、苦しければ苦ししいだけにこの人生を明るく、朗かに生きぬきたい念願に燃えていることは間違いないのである。ハッキリいえば自分はもつと笑いたい」「ふあうすと」蝸牛語「延原句沙弥・抄録」

少々長い引用だが、ユーモア作家と称されている句沙弥本人の弁なので採用した。

句沙弥の本名は延原靖。明治30年10月29日兵庫県の生れで、神戸新聞役員。むかし、神戸新聞社のサロンでこの人と顔を合わせたと、句沙弥というのは生理的なあのクシャミからの発想なのですか、ときいたところ

「仏門で剃髪早々の修業未熟の小僧さんを沙弥と申します。この言葉を句の未熟者にかけて句沙弥とヒネっているわけです」との説明をきいた。

「句沙弥は家庭的にあまり恵まれた人ではなかったと思われる。養子であつた。四男は他所へやつた。51歳の昭和23年、十九歳の二男浩介(川柳雅号波島かすみ)に先立たれてゐる。そして自分自身、食道憩室ならびに

食道狭窄症という不治の難病を持っている。

いかに生きべきかは、当然然宗教にすがりつく。

(略)川柳人で故食満南北は僧籍を持っていた。上田芝有もまたそうであった。しかし彼等から宗教的教養を聞いたことはなかった。句沙弥もそうであった。彼が仏教的素養をどれ程身につけていたか知る由もなかった。(略)

しかし川柳に対しては一見識をもっていた。昭和31年に発表された「川柳口語弁」の如きは堂々たる力強い主張である。また「心中のものを写すことは、人間に徹して初めてなし得ることである」とは作家精進の結果、把握し得た川柳に対する信念である、さらに越後の良寛が川柳を作っていたらと仮定して「定めし川柳家臭のない、気どらない、しかも滋味溢れる人間川柳の数々であったと思われる」とは彼の川柳に対する理念を示す言葉であろう。滋味あふれる人間川柳こそ、彼の求めるところであったのである(「川柳平安」延原句沙弥篇・堀口堯人)

句沙弥はラジオ神戸の川柳選者のほか「ふあうすと」雲雀集の選者をつとめる傍ら「謡曲行脚」を昭和40年頃連載して好評だった。この二頁もののコラムの人気の拠りどころはたとえば「鼓滝」が有馬温泉が舞台の謡曲なのだが、これを解説したあと、有馬温泉の現

況批判をユーモラスに一席弁じるところに由来していたようだ。なおこのコラムは神戸新聞旧刊からの転載であった。

句沙弥はこの謡曲趣味のほか、俳人丈草研究は一家言をもっていたことで彼を識る人々の間でもよく知られていた。

丈草といえは「蕉風の骨髄」を得たと称される蕉門の巨匠なのだが、一冊の選集も残していない。丈草は坊さんでありながら誦経はまめやかでなかったし、吟席はさばる一方、このため病弱故のものぐさ癖を売りものにしていた。丈草の句は閑寂そのものだが、時にはユーモアもとび出し、滑稽句もしきりに詠んでいる。

「丈草はせんじつめると遊俳以上の遊俳なんだ。遊俳には芸術に縁のないのが普通だが、この人ばかりはこの世の常の姿から超越している。どうもただの物さしでははかり切れそうもない。こういう無欲、淡泊、そして物に執着しない性といったものは病弱だけでは割切れる話ではないんだ。いわば「無依の道心」という境地といおうか、私にはこうした丈草の姿がたまらなく羨ましい」

これは句沙弥が筆者に語った神戸新聞サロンのにおける丈草だんぎの結びであった。句沙弥が丈草に抱く親近感、句沙弥自らの環境

や人となりに由来するようだ。

「顔や形は今さらどうにもならぬ。醜女なら醜女なりに、知性に磨きをかけて光らせるより他はない。心に輝きが増せば、姿態の醜さなどは問題ではなくなる。つまりいい川柳を作ることだ。白粉を塗ったり紅をさしたりして上っ面だけをゴマ化してもダメである。宿命の顔と姿はどうにもならぬ」(川柳句沙弥集)

「作者が見つけ、つかみ、感じとったその心持ちに共鳴できても、その一句としての表現に、わたしとしてはあきたらぬ句があつて落したものが多し。着想が大切か、表現技巧が大事かと正面を切ると問題がむづかしくなるが、十七音字という短詩型であればあるだけに、句の姿はなおざりにできないと思つ」(「ふあうすと」雲雀集選後評)

ユーモア作家句沙弥の人となりは、その作品を離れるとなかなか一筋縄ではない深い味をもった作家といえる。良寛や丈草研究のうん蓄の然らしめる一面からきてもいいよう。

——麻酔さめて切られの句沙弥とはなりぬ——
達者な医者がヤレたべろヤレ歩け
句沙弥の痛烈なこの体験句は、ユーモアを

超えた迫力がある。昭和34年7月27日歿。享年六十一。靖節院句沙弥鏡樓居士。

★次号は「今井鴨平」

俳風柳多留廿六篇研究 (二十五丁)

八木 敬一・鈴木 黄・石田 晋一
南 得二・小野 真孝・本多 正範
石田 成佳・大屋 六郎・多田 光

故 岡田 甫

414 あんどの柱かくしハ茶漬見せ

八木 当時、江戸の街には「茶漬見世」がた
くさんあったようだ。確かな資料は見出し得
なかったが、おそらくその店の柱には「茶漬
見世」とか「〇〇屋」とか書いた行燈がか
けてあったのだろう。

石田晋 茶漬見世の看板となるべきものは行
燈で、それはいつも柱にとりつけてあるの意
ではないか。

南 本句の行燈は看板の軒行燈でなく、屋内
の柱に取り付けた照明のためものと思われ
ます。

多田 なぜ特に「茶漬見世」としたのか、他
の職種の見世では掛け方が違っていたのかと
思うが。

岡田 ソバ屋などは、地面におきました。風
で倒れぬよう、石などを下に入れてあったも
の。

415 才蔵の向ふへ木蔵ならふ也

八木 「才蔵」は三河万歳で太夫の相手をす
る道化役。「木蔵」はまだ色気づかぬこと。
蔵蔵の句作。

万歳の太夫と才蔵の向う側へおぼこな娘が
並ぶ。へんな事を言われて困るのだが、「こ

わいもの見たさ」の心境か。

南 賛。但し「木蔵」は礎稿の説明より、ま
だ幼稚な、「へんなこと」を「へんなこと」に
思わない、男女のことについては、木仏・金
仏同然の何も知らない、平気で父親と男湯へ
も行く女の子と思いますが。

引はいておこすむすめは木ぞう也

六・18

多田 賛。南さんの説くらしい年齢と思つて
いた。「嫁」や「下女」は逃げてしまふのに
この連中はまだわからないのでおもしろがっ
て見ている。

岡田 同右。

416 食キに餅嫌ふハ雪の料理也

八木「雪の料理」からフグをこわがつていやがる句と思う。フグ鍋の終りに餅を入れることを匂わせているか。

南「河豚と餅」は食い合わせの一。諺「食に餅を嫌ふ」の字義通り、河豚と餅とは食い合わせで、「雪の料理」、つまり河豚料理で餅は嫌われるとの意か。

多田「やはり礎稿のままでと思います。」

さて愚痴なやからだとふぐやめになり

一〇・42

岡田同。

417 いゝ子の振をしてかゝア忒分にする

八木「おどり子」の句であらう。「母」または「かゝア」と称する年輩の女がついていて二分取る。

ころんだら金をひろへと母おしへ

五五・12

南「礎稿の「かゝあ」は付添いの母親等のことの意にもれますが、「かゝあ」は踊り子或は芸子自身の事かと思っていました。

むすめともいわれか、さんともいわれ

傍一・22

本多「「かゝあ」は南氏説のように踊り子自身でしょう。」

多田同。

ふり袖を着ぬと三十女なり

安五・満2

というかかあであらう。

岡田同。

418 月ッはくに餅屋ハ団扇遣ひ也

八木「暮れもせまって、餅屋はうちわを使っている。お供えなど作るため、早く冷やす必要上からであらう。冬だというのにうちわを使うというおかしさ。」

鈴木「賛。我家の近所の米屋は大きな扇風機をブンブン廻している。」

多田「賛。岡田同。」

419 姫菜アかわつしやりませに道を聞

八木「「ヨメナ」買わつしやりませ」と呼んで売り歩く女の子に道を聞く。ヨメナは、正月食用に売りにきた。

石田晋「これは、野掛けなどの田舎道での尋ねる景をいつたものではないか。」

小野「野掛け説賛。」

石田成「右同。」

近き道を聞いてつばなを買て遣り

多田「私も野掛けと思っている。」

岡田「同前。野掛けの江戸人めあての百姓女に道を聞く。」

420 由兵衛を口の酢くなるほど養る

八木「由兵衛は「梅屋洪浮名色揚」の梅の由兵衛。句は、梅「酢」の縁語仕立てである。」

口をすくさせて梅若から別れ

傍三・43

と同様な技巧である。

多田「賛。岡田同。」

421 ヤレつくなくと火縄ふり廻し

八木「野掛けの句。『川柳年中行事』の頭注に「袖に付くなど乞食を叱る」とある。」

南「「ヤレつくなく」は、乞食でもいいわけですが、それより野掛けの類句の多いところから、つばな売りの子供、それもはなつたらしの子供といった所。

本多「賛。野掛け説。」

多田「同。『つくな』は「そばに寄るな」という意か。連れにふざけて言っているのだとも取れる。江戸市中ではこんなことはできない。」

岡田同。

明元札2

水煙抄

黒川紫香選

藤井寺市 赤木和子

振り向けば冬の火花の烈しかり
胡椒効かせて迷いをふつきろう
浮雲と地の果てまでの流転かな
指先が忘れぬ電話番号よ
同じ黄色でも菜の花とひまわりと

高槻市 河瀬芳子

高ぶりを鎮めるみかんの筋をとる
王朝の崩れる音をしかと聴く
いさかひを見詰める孫の瞳に負ける
虐められっ子が潰して通る蟻の列
痛む歯へ親の代から今治水

八尾市 高杉千歩

風かおるサロインステーキ二枚買う
浅知恵が又も邪魔する金鳳花
冥府にも友達の輪の二つ三つ
引き算に飽いた瞳へ五月鯉
心細い親にだんだんなりそうな

今治市 野村京子

薄化粧最後の紅は恋のため
風向きに踊り疲れたアドバルン
冬の蠅死んだ真似して人を恋う
雪の日の手に持ついちご赤すぎる
背信の女の傘に雪重く

佐賀県 寺中三枝子

春風のタクトへ眠り誘われる
君を恋う未練を嗤う鹿おどし
深追いはだめよ影絵のような恋
暮らし向き問えば手を振るだけの友
ダビンチが好きな少女と翔ばうかな

尼崎市長 福田礼子

逢える日の空は果てまで透きとおる
ねぎらいが上手になった妻の箸
妥協してしばらく続く胃の痛み
明日がありきれいに落とす靴の泥
犬の声聞こえて山の道終る

大阪市 清水 康 恵

風の街寒い噂がついて来る

終止符を打っておんなはもう泣かぬ

いい話聞いて来たのは向う岸

一枚のハガキドラマのように来る

自慢することばを選っている窓辺

西宮市 紀 市 郁 栄

女と逢う時間があればそれでよい

首になる噂はとうに知れている

放心のうちに告別式が済み

マドンナの絵の中にいて病んでいる

お静かにいま亀の子が生まれます

岡山市 千 原 理 恵

情熱家で軽い会話を好まない

愛一途信じて春を待つ少女

逢うてからゆっくり別れ考える

小さな嘘女心に春霞

サインひとつで紙の重さを計られる

久留米市 鶴 久 百万両

春はここから鎮魂のサクラ舞う

野武士めく父の日課に隙がない

よく笑う嫁に老後のこと託す

廉太郎偲び古城の詩を吟ず

61年3月10日 83歳にて父逝く

弥陀おわす黄泉に召されて地に還る

米子市 川 上 より子

その件はサイダー割りでさわやかに
子を慕う譜は手箱に押し花に

ついたちの月を慕っている子猫

人形に変身あなたを待ってみる

我慢壺に小さな穴をあけている

名古屋市 藤 井 高 子

風みどり今日のストレス連れて去に

還暦に若い孔雀の羽根もらう

掌で払う邪念その掌につきまとい

アルバムに笑みを残して君は逝に

ルノアールの絵にいて楽し町の湯屋

富山市 舟 渡 杏 花

仏ごころ綱へ小ぢやな穴ひとつ

サラブレットの鼻に止った蠅の自負

ジャズ調の木魚で祖母をよろこばす

阿呆の面つけて駿馬に隙がない

クシャミ一つ椿の首は落ちました

竹原市 信 本 博 子

筋一本通した後の孤独感

大雪が春へけじめをつけに来た

ピーポの音遙かなりばたん雪

相性がいいのも後の我慢かも

春なのに未練な冬が舞い狂う

熊本県 大 川 幸 子

言い訳へもう唇がからからで

六割の怠け心が支配する

背ボタン一寸甘えた声を出す
生活のスタイル嫁が変えてゆく
嫁ぐ娘へ堪忍袋をくくりつけ

熊本市 宇野昭代

糸尻を結び損ねた針の悔い

万一の保険へ打算が先走り

平凡な一日でたしまい風呂

忘れ傘ポツンと無人駅ホーム

偶然に見つけた四つ葉のクローバー

熊本市 永田俊子

雨靴を逆さに干して憂さ捨てて

ふと兆す浮気をポツケの鍵に聞く

しがらみを冬着と捨てて町に出る

夜の窓で別のわたしがにらんでる

ケセラセラなどと言ってるだまし舟

長岡京市 木本如洲

星光る街を走ってばかりいる

似顔画になるとのんきな父の齢

坂の街おとこに欲しい風の音

とばけた絵たくさんもって病んでいる

父の膝貧乏ゆすりが直らない

東予市 小山悠泉

合格点迷わずやれる嫁の出来

子の嫁に欲しいナースの行き届き

愛という言葉女をもろくする

両の手に余る師の恩忘れまい

孫の誕生日忘れ娘に叱られる

和歌山市 桜井千秀

奥日光静寂だけの旅でよし

ゆっくりと話したい人あり雨の窓

方便の嘘もとがめる五月晴れ

角封筒厚さへ思いの程を込め

ユーモアも十人十色に使い分け

大津市 安田志津

風呂の沸き春到来を思わせる

国賓の妃と春を待ちわびる

もう許す胸算用で靴をはく

言い勝って後味悪い朝の膳

さりげない別れにしたい春の雪

草津市 久保和友

鳩がいる寺に孫と祖母の対話充つ

両替は新札にする計がつづく

伎芸天を見ていて背なの闇に馴れ

一茶の墓を見に鈍行に乗りかえる

猿といっしょにはいれと露天風呂の冬

羽曳野市 吉川寿美

平凡に黄昏てゆく飯茶碗

はんなりと小皿に春の彩を盛る

歳月に押し流されて来た木馬

手の届く処に妻でいる安堵

京都市 松川芳子

コマーシャル社長らしからぬ顔も出し

鏡見ぬ日の女病んでいる

さりげない言葉をよっている別れ
人並と思うブライドだけは持ち

高槻市 笠嶋 恵美子

仲よきは美しきかな十姉妹

桜前線妻蝶になり風になり

忘却の彼方へ飛ばすブーメラン

倅せにはほをつねってみたくなる

西宮市 松本 一郎

娑婆っ気がまだまだあつて寺巡る

職業欄無職に馴れて旅に居る

家計簿にその他の支出多すぎる

足らざるは互いに認め老夫婦

吹田市 井上 照子

ねこやなぎ春春はるの温い風

照坊主ゆれるしかない軒の下

古傷が心配になるなたね梅雨

雨だれにふと口ずさむ恋の歌

兵庫県 脇田 米朝

喧嘩して妻に子供を持ってかれ

未だまだと喜寿逆立ちをして見せる

なり振りはかまわず地球の皮をむき

停年になつてもローンがつきまとい

熊本市 高野 宵草

お喋りをせぬ編棒の肩が凝り

母親を女性と気付くニキビが出

わたしにも都合で小犬よ拾えない
孫抱いて照る日曇る日つかれきり

熊本市 北川 一進

当分は借家で暮らす貯金高

座布団を外し用向きだけの役

少しだけ本音もきかず電話口

禁猟区平和に生きる森の声

大阪市 上田 柳影

ほめことは遠い昔に聞いただけ

コップ酒運命線は信じない

羽田発一つの恋が今終る

晩年の大吉信じ屋台引く

尼崎市 丹下 玉子

ストレスが溜ると矢鱈に電話かけ

結局は他人血は水よりうすい

身仕度は手軽に済まし旅馴れる

爪を噛む癖が孤独な夜にする

尼崎市 児玉 歌子

酒の害今日は説かない祝い酒

弱い者同士が乗った泥の舟

托鉢の僧侶が見せた裾の泥

花嫁の父が静かな支度部屋

岡山市 黒住 美穂子

片想い微笑みだけを呉れてゆく

紅梅に誘われ今朝の試歩ふやす

哀しき事みくじの吉が消してくれ

明日逢える夜の灯りはそつと消す

島根県 小田川 智重子

デザートを胃薬にしてくれませんか

ふと気づく靴の裾から春になり

落ち着けぬ筈だよ衝動買いの服

騒音が止むとうるさかったのに気づき

桜井市 前山 美恵子

一年生ランドセルにも慣れてきた五月

自分より先の患者が気にかかり

春風と共に誘いの手が伸びる

コケコッコー素敵な朝にしてほしい

広島県 田村 新造

あでやかに季節狂わす水着ショー

瀬戸に住み雪の怖さをまだ知らず

天日乾し出雲の里に和紙映える

牡蠣を打つ手先しびれる雪の朝

吹田市 栗谷 春子

ともかくも住めば都とお茶を入れ

えこひいき猫はとつくに感じて

無理言うて後はさびしい春炬燵

ふと夜半写真の整理したくなり

守口市 結城 君子

啓蟄へ気になり出した鉢のいろ

ビードロの虜となったガラス展

脱サラのような顔して来る野犬

白木蓮こよなく愛すこの小径

豆靴が有る玄関に笑い声

怖がりの犬で遠吠ばかりする

屑籠に捨てたブローチ母が着け

留守番へ持ち帰りたい旅の膳

燃えつきぬ余生もあつて地図広げ

極楽に行ける地図なら高く買う

にせ風邪を体温計に見破られ

悲しい日亡父を慕って墓なでる

ちっぱけな傷に一日振り廻され

マイペース崩して家中軋みかけ

反抗期終えた息子のたくましき

雪と鴨が住んでる湖北好き

フアミコンを教えてやろかと孫の声

青色の好きな男は気が弱い

苦勞して育てた息子に叱られる

柵の枝で鯛がにらんでる

一言が過ぎて二の矢に攻められる

また拗ねているのか炬燵出ない妻

居酒屋で素知らぬ振りの友も飲む

友人の妻の人柄追う弔辞

堺市 小西 小雪

鳥取県 横山 房子

大阪府 山田 妙子

大阪市 山田 妙子

大阪市 山田 妙子

大阪市 山田 妙子

大阪市 山田 妙子

大阪市 山田 妙子

大阪市 山田 妙子

大阪市 山田 妙子

大阪市 山田 妙子

大阪市 山田 妙子

大阪市 山田 妙子

大阪市 山田 妙子

大阪市 山田 妙子

大阪市 山田 妙子

大阪市 山田 妙子

大阪市 山田 妙子

大阪市 山田 妙子

大阪市 山田 妙子

大阪市 山田 妙子

大阪市 山田 妙子

大阪市 山田 妙子

大阪市 山田 妙子

大阪市 山田 妙子

正直に涙流して見るドラマ

付添いの母に風邪までくれてやり

手招いてこみ合う席へ割り込ませ

窓開けて空気を交えた春日和

京都市

木村 たけし

似顔画の鬼なら蛇を逃がすだろう

長生きの夫婦が喜劇の街にする

対決の椅子古傷を忘れない

料理天国庶民に遠い皿の味

高槻市

川島 諷云児

禁煙は口先だけの得手勝手

毒舌のなかに親身がある小言

羨望の割に余生も楽でなし

弱音吐く男の瞳定まらず

貝塚市

池田 寿美子

ブランコを我がものにしてみどり風

露天風呂皆いい顔になっている

ユーモアと解して命健やかに

いろいろな事ぶつかってや々と春

堺市

桜沢 あかり

お隣の芝生はいつも陽が当り

他人の唄きく耳たしかだが音痴

言いつの鍋をかけたおろしたり

夕焼けに包まれ保育所母を待ち

鶴折って折って独りの夜を刻む

兵庫県

東浦 砥代

明日に咲く彩を女は考える

知らん顔してもおれない適齢期

妥協した目にうつすらと見る涙

守口市

森川 まさお

暖かくなって手順が狂いだす

常用の漢方薬を医者が賞め

修理する趣味が結構高くつき

御所人形思いもよらず足太し

鳥取県

土橋 はるお

春一番夫婦げんかを飛ばされる

ビショ濡れの本がポストの上にある

病室の窓から風を揚げさせる

ポケットベルの鳴っている人とすれちがう

尼崎市

鈴木 良征

鈍臭い男を騙す四月馬鹿

雪になっても酒の肴を買いにやる

猫撫で声に牧師も聖書読みちがえ

お彼岸のひと日ふた日は雨になる

岡山市

山本 玉恵

通リゃんせ二人の道はまだ長い

素晴らしい出会いになって歩も軽い

だまし絵のつぎは女のふところに

頂点が見えて上手に妥協する

羽曳野市

麻野 幽玄

野心まだ捨てずネクタイ赤を締め

いい年をしてと笑われそうな夢

そんな事百も承知をアドバイス
散らかした部屋なのに皆寄って来る

富田林市 田 原 久 子

鶴折って届かぬ想い白い指
天をつくビルの上にも赤鳥居
死ぬ前に逢うて詫びたい女がいる
離婚成立十三日の金曜日

岡山県 小 林 妻 子

くされ縁なぞと言わせるのはお酒
パチンコ屋とても無心な大人たち
人間がゼニの匂いに寄ってくる
手さぐりで子に残すもの捜してる

鳥取県 羽 津 川 公 乃

さわやかな音でリングを丸かじり
ビル谷間人間不信つのらせる
笑顔から良いことらしい手話と読む
高すぎた儲け話の後遺症

大阪市 藤 森 小 雅 子

おでん一つ拵んで話ながくなる
カレンダーに四月馬鹿とは書いてない
善人が選ぶと円い風になる
Nを指す磁石に尖る冬の地図

米子市 門 脇 晶 子

花道を作ってあげる土ならす
本読みが終らぬ中に日が暮れる
蟻地獄ビルの谷間に見つけたよ

高すぎた靴でつまづく春の午後

富田林市 片 岡 智 恵 子

砂に水しみ込むような安堵感
負い目無いつものの妻の不逞ぶてし
緊張が解けて靴紐ゆるみ出し
露天風呂お国なまりへうちとける

唐津市 浜 本 ち よ

亡き母に逢うた欲び露のとう
耐え忍ぶだけを教えた堅い父
世界とのかかわりありて日本生き
群青のもずくに海の香り買う

竹原市 石 原 淑 子

子宝にタジャレの好きな子が混り
単身赴任ホームドラマに憧れる
ふる里を捨ててふる里に救われて
鈍行で北海道一周若さだな

和歌山市 森 三 枝 子

助手席の夫はいねむりばかりする
スピーチが長くてビールがまずくなる
ネクタイが踊る新入社員です
あれこれと迷うて妻の小旅行

唐津市 相 葉 あ き

一言が多くて敵をつくりすぎ
顔出したおかげ損する羽目になり
頑張ってみたが限度の笹の雪

出雲市 小 玉 満 江

砂だんご未練があるけどママが呼ぶ
一安心すれば背中をこづかれる
髪型を替えて春の街に出る

兵庫県 森脇和子

辻までを送り慕情を深くする
写経する窓辺にいつか春の雪
立ち離れに思い出残る里の居間

川西市 野村静雄

喝采を浴びた昔へ軽く酔う
手品師と指切りをした日の不安
年毎の不漁に蟹がうまくなる

米子市 小村てい子

泣き笑い転ぶ涙を掌に受ける
人形と語り尽くして眠くなる
筆まめな男あちこち旅も好き

兵庫県 奥野テル

こぼれ種大地に芽ぶく春の音
おせっかいな小母ちゃんが住む路地の裏
善人のがまぐち何時もやせている

青森県 福士トキ

末っ子の特権すぐに泣いて勝ち
赤いポストがわたしのレター待っている
爪切っただけで体が軽くなる

広島市 望月はるひこ

理屈ではどうしようもない遊び好き
泣いていた顔をなんだと覗き込む

浮き袋かくして泥の舟に乗る

愛媛県 宮尾みのり

サイフォンで女ひとりの部屋が満ち
大部屋で眠ったふりで聴く噂
肉親に見せぬ涙を友にみせ

尼崎市 野瀬昌子

「嫁求む」プラカードでも立てようか
夜歩きはしませんテレビ待っている
枯れたはずの婆さん三人もめている

岡山県 杉本伊久栄

恋一つ夜汽車の窓に捨てて立ち
いらだちを花一輪に癒される
玉子買う列に並んだ日曜日

鳥取県 太田幸枝

孫抱いて血のぬくもりの通い合い
突然の友の訃報へ手相みる
縄のれん覗き演歌にさらわれる

高知市 北川竹萌

福豆が掌に納まらぬ程の歳
年金にあわす生活も二人して
改造の部屋を喜ぶ妻の声

尼崎市 吉永伊三郎

女房に昼あんだんの顔を向け
年金日昼めし食べに妻と出る
孫描くとてもきれいな青い空

鳴門市 八木芳水

直したい癖を子供に真似られる
釣書へちよつと上のせする背丈
追伸にやつと本心のぞかせる

竹原市 岩本笑子

主婦業の日給計算してみたし
お花見へ今年も話だけの主婦
春一番女のスカートばかり吹く

唐津市 米倉彩女

百選の名水あつて春の客

雨の日も運動靴の好きな孫
お隣に受験の娘がいて気を遣い

大洲市 西山えつ美

腕あげてからファミコンにあきがくる
自転車も道へはみでるほどの客
力ぬいて書いたつもりの字がかたい

尼崎市 森安夢之助

お袋の味恋しゆうて帰る里
まあ聞いて聞いてと長い立話
野心ある釘は真つ直ぐに入らない

青森県 荒田つる

縋りつくクモにためらう庭簾
何げない顔で情報嗅ぎまわり
農耕の牛馬写真でしか知らず

大阪市 秋田茂

今日一日は子にだまされて見てやろう
滅び行くものに花あり茶白山

戸を開けていつも待ってる母の家

高槻市 芦田静江

歯の触り気付くブラシの新しき

思春期の息子の鍵が見当らず
こぶし咲く山で拾った淡い恋

尼崎市 古川幸次郎

よその奥さんきれいに見える倦怠期
矢印を追う足元が乱れだす
嘘でない言葉を残し星となる

島根県 森山英子

握手した温み残して友が逝き
美術商らしい指輪をひけらかし
終りからページをめくるくせがつき

大阪市 井上白峰

大正の足音まだまだリズムカル
平凡で日記に余白の日が続く
注射より痛い注意を医者がする

唐津市 山口高明

パパと言う呼名になって構われず
終章を飾る遺書なら書かずおく
鉄棒の入った部屋で写経する

呉市 蔵重成人

変人の仲間変人よってくる
桜咲くまでは笑えぬ受験の灯
傷心を日記に書いて旅にいる

鳥取県 乾隆風

夜桜の絵を描いている車椅子
農政の話になって酔いが覚め
番犬の鼻低うても用は足り

西宮市 秋元 てる

一人暮らし一人で笑うほかはない
世にあらば古稀よ夫の軍服重し
姑から盗んだ知恵で賞められる

尼崎市 尾宮 弘治

叱らない母の悲しい目が怖い
話題ふと切れて空気が怖くなり
献血の順番を待つ市場籠

大阪市 野村 八重

みそ汁の熱さに倅せ思ふ朝
梅林に着物の客がよく似合い
損得で出来ぬ友情あたたかく

吹田市 西岡 豊

ひと駒はカットしておく旅ドラマ
見栄張った約束ごとがつきまとう
リハーサル重ね目線の舞扇

弘前市 真喜内 實

離れ咲く梅の一つが祖母の花
背番号付けると萌えるりんごの樹
早起きで時の流れに勝つ手立て

青森県 波 ただお

上京もカバンの中にカゼ薬
路のとう春の顔して覗いてる

長旅の夫迎える風呂を焚く

八尾市 鷺見 章

テキストの通りが嫌なフライパン
散歩道今朝は花なき辻地蔵
たこ焼も出て二の丸は梅見頃

河内長野市 大西 文次

食べさせてもらっていても世帯主
エスカレーター走って昇る用もない
喜寿近くやっと歩幅の合う夫婦

尼崎市 木下 義嗣

二十年針を動かす古時計
三歳児自作の歌をよく歌う
春日和空に色あり花映える

尻崎市 的場 十四郎

居酒屋に口説き上手な客がいる
年金暮らしオープン戦を待つながさ
ひそひそは廊下で交わし入る部屋

堺市 宮本 かりん

八十四ふんばっている母の背な
歯車がかみ合うて来た実年期
痴話げんかくもりガラスにバカと書き

岡山市 中嶋 千恵子

耳よりな話に動く浮気虫
無口とは何処にも書いてない釣書
転勤の一字で廻る家の中

茨木市 堀 良江

表札がはにかんでいる新世帯
肩寄せた若い二人の後を行く
娘が嫁つて夫婦と猫になりました

唐津市 筒井 朴 竜

ファミコンへ孫を奪られた爺の童話
余寒まだ顔だす土筆伸びなやむ

留守役へ土産梅ヶ枝餅と決め

今治市 月 原 つくし

一人住む女素顔をさらさない
雨しきり男の足が遠ざかる
笠取れば女が匂うへんろ旅

益田市 里 本 たかし

目覚ましが進ませてある若い部屋
告げ口を納豆食べる時にされ
孫が留守ノートに線を引いておく

大阪市 島 路 太 郎

エビで鯛釣つて玄海島日和
学校へ親を安心させにゆく
信仰をすすめて帰る見舞客

岡山県 後 安 ふさえ

捨石のスクラム崩さぬ老夫婦
み菩薩の顔で白寿の翁逝き
言い負けておいてやろうよ妻だから

八戸市 島 田 昭 治

家二軒建てた友あり妻が褒め
雪かきの後の一服の旨いこと

電話口喧嘩のような元氣者

愛媛県 八 塚 三五島

薄色の花が生きてる貰い水
身の程を知ってる腕を組んでいる
やすらぎの川辺柳の芽も緑

豊中市 一 瀬 福 一

主婦の目に撒き餌のようなチラシくる
叱られて枕へもどる病み上り
かぶりつききれいな足の裏も見え

西宮市 山 田 喜代子

日本ですなんて英文字ばかりです
同窓会白髪染めの話も出
梅一輪咲いたと我が家の朝ニユース

弘前市 齋 藤 勘

出稼ぎが帰り白鳥落ち着かず
すぐ帰るつもりへお茶が熱過ぎる
褒めようが上手で貰うのも上手

大阪市 今 西 静 子

集団就職胸の名札にある決意
三通話笑つてばかり娘の電話
美しい人の柩は見ないことにする

京都市 小 林 英 子

逢うた日は心の弾むことばかり
打水に真心こめる京の宿
熱っぽく女将の平生聞く小部屋

島根県 喜 島 ノ ブ

先に行く影が細った遠明り

春の陽の温もり屋根の猫に聞く

母ちゃんが軸でくるくる廻る独楽

鳥取県 田村 きみ子

風糸伸ばすと緑の風がくる

五月晴れルンルン鯉も泳いでる

いい気分口紅つけて街へ出る

鳥取県 西川 和子

諸肌を脱いで対決する女

切れそうだからもつれたままにして置こう

このもつれ月日が解いてくれるでしょう

山口県 高崎 雀声

犠牲者が出てきて陸橋やつと出来

寿命には追いつけそうにない福祉

春一番粗大ゴミだけでもてあまし

青森県 木村 喜峰

卒業式親の暗着が目立ちすぎ

パソコンを覚える前にでる新種

申告を電話で指示する出稼者

寝屋川市 立床 晴風

阿呆らしい事やが孫に使われる

吊皮に負けた疲れがぶら下がり

湧き水を土下座の形で飲む登山

京都市 森川 春子

肩書のついた名刺を貰う春

おいしいと聞いた猷立またつくる

花写真しおり作りて送られる

大阪市 川原 章久

風花に足音忙し橋の上

止められて薬ですよと飲む梅酒

四畳半住めば都と故郷便り

新発田市 上鈴木 春枝

命名へ期待を込める父母祖父母

矛先が向いてそろっと輪を抜ける

義理果たす文へ四角い字を並べ

豊中市 辻川 慶子

好きな曲流れて茶房長くいる

ティータム旅の話が弾み出す

初雛を娘と飾る夢を見る

岡山市 矢内 寿恵子

雪原を悟り顔して寺詣り

温室を出れば北風まともなり

悲しみの深さの中で向きを変え

尼崎市 小熊 江美

電話口代理の者でと言いのがれ

受験子にしてやれる事神詣り

針穴は慣れで知ってる母の腕

尼崎市 佐藤 美代子

理路整然と説明されたので迷う

人の倍時間の欲しい障害者

杉の声聞える家で花粉症

岡山市 戸田 種子

お見合いの席で酒量を確かめる

ポールベンだけが知ってる文の中

旧友が虚栄のかたまり書いて来る

唐津市 浜 本 治 幸

マネキンのように娘はもう更衣

エンジンの音だけ聞いてポチが鳴く

定年を境にリズム一つずれ

鳥取県 鈴 木 ふみ子

廃坑に貫くレール亡夫が敷き

ふり向けばつづら折りなる人生で

人生の十字路亡母に尋ねかけ

富田林市 松 本 今日子

明日の日を約束出来ぬロボットで

出し抜けの話は吉報だけでよい

もうすでに答は出ていたプロポーズ

米子市 大 田 みさと

掴むより抱いてやりたい青い鳥

車いす押す夫よりも乗る辛さ

春生れたから最後まで花で飾りたい

鳥取県 津 村 八重子

春一番山の緑がよみがえる

計算に早い男でうとまれる

澄んだ目を信じ出来心を許す

豊中市 小 畑 よし子

半分は捨てる薬を溜めている

母と娘の母へ縁談話くる

末席で意見は持たぬお人好し

静岡県 青 柳 金 吾

大好きかポチの吠えない初対面

澄んだ目の孫の約束やぶれない

言い勝って眠れぬ夜の自己嫌悪

大阪市 亀 井 円 女

勇み足ちよつと血の気が多過ぎて

子等遠く振向きもせず巣立ち行く

親子の夢もいつか結び目解けてる

十和田市 阿 部 進

子育てを保育所まかせ共稼ぎ

カラオケでストレス発散して帰る

開発が村の緑を消している

大阪市 横 山 為 子

波風も立てぬ湖面に小石投げ

懷を風が吹き抜け春遠し

堪忍の袋縫いぬいお人好し

旭川市 朝 倉 大 柏

手に余る石をつかんでいる怒り

振り向いても一度踏める道でなし

他人の傷聞いて痛みをやわらげる

大阪市 稲 本 凡 子

平凡な余生にとける彩を選ぶ

空白の日の日記は胸に書く

姿見を見るのが恐い程に肥え

泉南市 坂 根 流 水

法善寺髷の関取りちらほらと
なるほどとお相撲さんをただ見あげ
老兄も亡くなり故里消えてゆき

和歌山市 森 敏子

お向いの客の出入りをそつと知り
アドバルーン烏ぐるつととんでいき
ありがとうございましたときれいな瞳

岡山県 後安 江山

花鋏花と生活して華に生き

底辺を一途に生きて老い平和
倅せを包む湯舟の温さ

今治市 渡邊 伊津志

反抗を眼に語らせて貝になり
退職をして竹箒良く似合い
絵便りは不意の優しい訪問者

泉佐野市 大工 静子

古里にもう見当らぬ松ボックリ

芹生えた小溝セメンで敷きつめて
便繁し共に老醜見せぬまま

堺市 山本 半銭

赴任地が遠くて母の胃が重い
釣り書に書かない趣味をたとえ持ち

鳥取市 武田 帆雀

逆ろうているから危険な橋に出る
碁には勝つ唄には負ける間柄

奈良県 山村 有佳
病室のベッドの数だけドラマあり
バス停で手を振る夫に年を知る

岡山県 松本 元江

花便り花の話題で黄昏れる
水ゆるむ心もゆるむ青の川

茨木市 井上 盛雄

姿見のハイドと時ににらみ合う
松明の火の粉に春を呼ぶ力

島根県 難波 節江

娘へ電話今日は用件だけで置く
花便り旅の誘いへ乗って春

和歌山県 田中 隆積

女ひとり今は男がひとり赴く
寒牡丹ちよつとは優しくしようよな

田辺市 染道 佳明

梅咲けば道真の詩口ずさむ
先生もキックボールの日曜日

出雲市 竹治 ちかし

子の長所認めて聞く親の夢
今一つ無になりきれぬイワシ雲

今治市 山田 宝保

合戦の跡とは聞いた荒野原
使われぬままで合鍵忘れられ

大阪市 榊本 路児

教わつたようには抜けぬ鮎の骨
駅員にポストの所在きくも旅

新潟県 高野不二

金も貯まらず定年が来てしまひ
年金貰う象牙の印が大きすぎ

西宮市 飯森泰世

はずむ声きけばランドセル送りたい
コーヒーのミルクが画く私の絵

奈良県 和田萬里

湯かげんはいかがですかと薪の風呂
猫と蝶好きですねんと集めてる

大阪市 渡部さと美

そのことは忘れましようよ花吹雪
嫁がない女で小さな花好み

泉南市 中井敦子

モナリザの笑み真似てみる昼下り
雑草も精いっぱいの花をもち

八尾市 松下蕉露

実印を使うことない身が寂し
ドーナツ化市内の母校消えてゆく

出雲市 河原恵美子

表向きよい一日だとしておく
あの角を曲れば見える明日の彩

島根県 堀江百代

へらず口たたいて皆を煙にまき

雪消えて化粧直しの春の彩

高松市 竹川憲一

新築の主より雀が先に住み
雪掻きのシーンに済まなく雪で飲み

鳥取県 乾喜与志

日の丸を振られて行つただけなのに
いただいた生命に余生などはない

島根県 福岡芳枝

冬眠の蛙起こしてごぼう抜き
母の手がまたひび割れたもどり寒

出雲市 小白金房子

陽の温み貰つて団地ふとんほす
洗濯の渦にとかす今日の汗

富田林市 大澤三四子

だし抜けの誘いを受けて若返り
温もりがじかに伝わる土人形

大阪市 新井川青舟

タレントと握手してからファンになり
あなたの無器用な手を信じよう

大阪市 田中節子

スチュワーデスがドア閉めてプロペラ機飛上る
旅に逢えば別れはギャルとも手を振って

大阪市 高森文子

意欲出し過ぎて歯車食い違い
焼芋も中流気分でカーに乗り

鳥取県 福田 あや子
堪忍袋結び直して円く住む
リハビリに勝手な助手は許されぬ

八尾市 椎尾 公子
敬老日念押してみよう喜寿ですか
ジャンケンに負けじとグーに息をかけ

大阪市 宮下 とし
植木市見るだけなのに愛想よく
合格の孫と中華を久し振りに

岡山県 福原 悦子
逢いに行く靴の軽さよ春日和
道草を食った日もある今日の幸

島根県 菅田 かつ子
せっかちな土筆淡雪またかぶり
カクテルにしたら程よい味になり

岡山県 伏見 すみれ
体裁はどうでもサンマ焼く煙
ごきげんの父だと分る浪花節

富田林市 新開 千代女
人形に自分のなやみ聞かせても
先生も欠席してはやり風邪

大阪市 喜多 佐津乃
春一番足音聞いてる沈丁花
裏庭に何処から来たの亀一匹

愛媛県 石手 武

花束へ押しの一手で愛のメモ
お茶に花売約済みのくすり指

岡山県 平田 たけよ
ふれ合いがうれしい今日は趣味の会
手相ではどうも長生きするらしい

京都市 山脇 正之
あたたかくなると治るとナース言う
口あけて止むなく歯科医の風邪貰う

大阪市 末永 芙久枝
おだやかな春の日射しを受ける花
口下手の冗談人をおこらせて

吹田市 山田 里子
お茶席はこの辺だったとブルドーザー
部屋探し大学どこと聞く家主

富田林市 友碇 雅子
欠席の友へこまごま長電話
つかみ取り手の小さくて悔しがり

倉吉市 田中 八太郎
松の枝そして池賞め無心いう
貧乏がいつしか声を小さくし

河内長野市 植村 喜代
槍ヶ岳あれから眠った登山靴
お葬式暫く逢わぬ顔に逢い

島根県 岩田 三和
村の子よみんな集まれつくし摘み

わしづかみ天までとどけ清め塩

岡山県

牧野秀香

手編してくれたショールの暖かさ

パスポートなくても鳥は行きき出来

島根県

園山世似

はがきより安い便りを赤電話

去年植えた梅がポツンと蕾つけ

大阪府

堀口欣一

花冷えのここは阪神甲子園

リビングショップとはつまり荒物屋

兵庫県

市川亀男

雪の寺猫の足跡だけがあり

スキー場派手な服ほどよく転び

守口市

若林市郎

啓蟄や楽しみ増える散歩道

ばあさんとかぶとの下見初節句

島根県

坂本雪路

実年が鏡の中のにらめっこ

陽あたりへ向けて花鉢移動する

榎原市

西本保夫

本心を打ち明けられて弱くなる

せっかちな気持ち番犬に見抜かれる

米子市

金山夕子

花鉢花屋の前で動けない

自分の影を掴んで渡る吊橋だ

草やきにつくしの頭皆やかれ
腹へってキツネうどんにむせ返り

岡山県

富坂志重

和歌山市

三谷周三

盆栽の枝針金で無理に曲げ
失恋の名残りか笑い上戸酔う

泉佐野市

真崎浪速子

打つ力信じベンチが飲む固唾
初孫が物を言います歩きます

兵庫県

山崎敏子

雪おろし実年者が見直され
幼な子は百円玉の方が好き

米子市

宮本佳女男

健康の自信過剰が命取り
合掌に園児素直な心見せ

大和郡山市

岡田寿美礼

娘より来るとの電話心踊り
寒くても春の陽ざしに心和み

藤井寺市

福元みのる

愚痴不満ついでに流す街の風呂
古都税で荒れみほとけも眠られず

藤井寺市

菊地繁男

スト馴れは一泊旅行の足取りで
無礼講は課長いつしか消えている

大阪府

橋本悦子

山合いのいで湯の宿に情あり
損得の枠の外から皮算用

大阪市 平井露芳

故生々庵先生

塔の上さらばさらばと雲にのり

伊勢鳥羽の旅

引き潮に全身見せる夫婦岩

大阪市 富岡温子

老眼鏡掛けて掃除の昼下り

あ、あれは死んだバアちゃんの悪いくせ

和歌山県 北山凡太

ゴキブリと間違え叩く柿の種

信心を仕事に歩く老いの日々

新宮市 船越正

イジメツ子塾には真面目親しらず

マスクかけ車内清掃お昼時

兵庫県 野々口ゆう也

春だのに芽吹かぬ古木にわれをみる

子は明日の親は昨日の虹を画き

岡山県 笹井小安芸

見出しでは最もらしいブーム本

マルコスの連根穴がつぶされる

静岡県 丹波定次

お綺麗の一言欲しい厚化粧

腕まくり頑張る親父しわが増え

「出雲」松江考古学会に参加して

八重たつ神も吹雪に築地松

銅剣に矛等揃った出雲朝

豊中市 額田明吉

大雪であちこちいたんで損をする

ゲートボール明るく楽しく頑張って

兵庫県 伊沢午郎

それぞれに皆頑張ってるこの世かな

世は正にお料理全盛飽食か

広島市 花田繁子

早く来い皆で咲きます春一番

損得の計算はやい浪速っ子

大阪市 朝田晃代

家計簿の合わせぬ時にはうそもつけ

そんなことうそと言いつつ信じこみ

兵庫県 伊沢末子

メルヘンの世界に遊べる曾孫欲し

起きて来ぬ息子に聞えるよう吐息

兵庫県 伊沢とし江

ジュニアの部

4月には心ウキウキ三年生

思い出は心の中へとかぎかけて

枚方市 二宮摂子

ウウ寒い家に帰るとあたたかい

大わらいコントを見ているお父さん

枚方市 二宮正彦

愛染帖

橘高薫風選

山笑う里では桃の花笑う

島根県 榑原秀子

A型でないのが一人の親子

島根県 榑原秀子

コーヒーと煎茶二人で別々に

名古屋 藤井高子

寸分を違えず干して主婦の自負

近江八幡市 前川千賀子

ぼうぼうに耐えた甲羅よ父の背よ

早春の赤い花には裏切られ

女が先に狂って男狂えない

守口市 森川まさお

弱気になった男の膝に猫が乗り

甲斐性がなくてきれいな文字を書き

寝屋川市 堀江光子

棒読みをされるメモ書く宮仕え

本を手についといテレビ見てしまい

高槻市 河瀬芳子

みる物のすべて炎えてるゴッホ展

紅梅の小枝粗末な夕餉ゆえ

川西市 野村静雄

戦争の話に酔って騒がしい

後悔を分ってくれぬ男来る

島根県 堀江正朗

目玉ない方はどつちか迷うとき

ごほうびに飴玉一つ孫なみか

卒業証書俺には呉れるな我が妻よ

鳥取県 清水一保

実年という名へ少し燃え直し

捏ねるほど餅はルンルン白の中

声かけてやりたい鏡の中の奴

茨木市 井上盛雄

島根県 松本文子

喪があける大地のリズム聞きながら

父よりも重く見られて脱ぐ背広

三浪に紙屑の舞う街を行く

島根県 板垣夢酔

傷心の男湯舟を寝棺にし

紙の皿まだまごとは終らない

松江市 竹内寿美子

ロボットが水やり造花の花咲かす

尼崎市 春城武庫坊

御無沙汰と掌に書き握手せん

弘前市 波多野五楽庵

コンピューター人間様が従いて行く

和泉市 西岡洛酔

春闘のやま場満開すこし除け

今治市 月原宵明

春の水こぼれて温む不動尊

岸和田市 芳地狸村

屈辱が足の裏から這いあがる

藤井寺市 赤木和子

母の忌の春は散る花ばかりなり

和歌山市 西山幸

回忌膳亡姑につながる糸の端

羽曳野市 吉川寿美

父老いて母老いて海しすかなり

鳥取県 新家完司

レコードを回してしばし雛の酒

米子市 八木千代

尼崎市 春城年代

白鳥へ夕日金粉ふりかける
青森市 工藤甲吉
白鳥は北へ羽ばたきおおらかに
白鳥は白く母なる国赤く
大阪市 小出智子
アルバムに貼るとはにかむ癖がある
和歌山市 神平狂虎
今更と思うてならぬ墨を摺る
決闘に行くのに本は離せない
沈まない船は怖くて近寄れぬ
寝屋川市 岸野あやめ
うれしににつけ悲しにつけ着物
人に皆弱点のあるなつかしさ
笠岡市 木山遠二
寝たきりへ突然の人来て呉れる
襖開いて聞こえる琴は春の曲
富田林市 岩田美代
眠りからさめてもやっぱり不器用で
三つ指をついて五月の風を受く
倉吉市 野中御前
マジシャンへ五百羅漢の高笑い

雪が舞うお高祖頭巾の祖母と舞う

西宮市

草刈 墮駄

量子論大阪弁で聴く講義

島根県

小砂 白汀

バズル解け蝸牛にわかに引返す

奈良市

平松 かすみ

悪筆のことなど言わずアンケート

米子市

岡 日枝子

市街地図ロミオも点の中に住む

広島県

田村 新造

男祭りさらし一本巻いて揉む

米子市

小西 雄々

実年の鎧が重くなる夕陽

吹田市

栗谷 春子

少な目の御飯はごめん路の色

西宮市

朝山 千世子

老いらくの受身の恋に春めぐる

吹田市

後藤 火鳥

落ち着かず雪降り積る後の雨

鳥取県

林 瑞枝

キャツキャツとお福の眉は点となる

岡山県

清水 悠貴女

季語にない位置で少女は花になる

米子市

小村 てい子

ひかえめな言葉に花は添えてある

高槻市

笠嶋 恵美子

渡るまで振り向かないで別れ橋

茨木市

堀 良江

文机に雛にもうった桃の花

島根県

西村 早苗

袋の破れからおんなの吐息がもれ

少年の指さす星はよく光る

島根県

土橋 螢

ドミノ倒しの真中で反旗振る

名古屋

越村 枯梢

波立ちをしずめてしまふ温いめし

大阪市

渡辺 さと美

春愁やゲートボールを薦められ

伊丹市

榎谷 寿馬

造船の灯が消え島が沈みそつ

今治市

越智 一水

眼鏡まで外し深々無礼託び

藤井寺市

福元 稔

図書室の童話今でも追って来る

米子市

菅井 とも子

ロボットに嬉し涙を教えとく

西宮市

奥田 みつ子

老斑に思いの巡る庭桜

平田市

久家 代仕男

剣よりも強く鋭い細いペン

八戸市

島田 昭治

着せ替えてまた着せ替えて孫人形

岡山県

松本 元江

めしの碑を起点にめぐる植木市

大阪市

島路 太郎

百姓のロマン息子に言い聞かせ

十和田市

阿部 進

玄界の怒濤も砕く潮はとけ

唐津市

筒井 朴竜

遠い日の心の傷が見えますか

大阪市

江城 修史

乾

鳥取県

隆風

菩提樹の大きな傘へ謝恩会

和歌山市

後藤 正子

素直さは誰に似ている子猫たち

高石市

浅野 房子

うな重が冷えてしまつて客帰る

富田林市

藤田 泰子

あと三年経てば柿の実も稔る

大阪市

松尾 柳右子

油こす私も浄化するよう

大阪市

市場 没食子

バレンタインのチョコを付添さんがくれ

豊中市

田中正坊

禁煙のすすめ煙草の値が上がる

和歌山市

三宅 一郎

義理チョコに温もりもあり笑いあり

和歌山市

福本 英子

還らない亡母へ今年も芹の艶

堺市

高橋 千万子

隅つこの噂私へ来た視線

鳥取県

福田 あや子

天辺から笑いこころげる春一番

大阪市

榎本 路児

仁術はおろか算術さえ出来ず

高知県

曾我部 裕

きんかんが一つ転んでいる道路

米子市

青戸 田鶴

手にふれると毀れてしまつてガラスの絵

兵庫県

野々口 ゆう也

古典雛飾りし部屋の音古び

大阪市

山田 妙子

泣き顔を見せてはならぬ子が四人

大阪市

山田 妙子

母の死に妻の涙をいとおしむ
鳥取県 林 露 杖

驕る手で書いたサインの読めぬ文字
唐津市 久保 正 敏

お芝居へ人肌ほどの夢を待ち
唐津市 仁部 四 郎

幸せが綴った過去の不倖せ
岡山県 矢内 寿恵子

行きくれて開けてはならぬ玉手箱
堺市 本田 草 生

首を振る虎置いてある寡婦の室
岡山県 伏見 すみれ

招待を受けて背広が光りだす
和歌山県 田 中 隆 積

ごますり器嫁へ素直に廻り出し
唐津市 米倉 彩 女

バレンタインにシルバー眼鏡など貰い
唐津市 田口 虹 汀

千恵子抄はらりと過去がこぼれ落ち
竹原市 信本 博 子

ライバルの紫色に染まりそま
岡山県 小林 妻 子

見た目には昭和一桁花盛り
倉敷市 藤井 春 日

桃の花老いの小部屋の雛まつり
貝塚市 天行 千 代

怒ってはならぬと丸い膝小僧
吹田市 矢野 佳 雲

お恍けに齒痒くなった腹の虫
吹田市 西岡 豊

岡山県 土居 耕 花

御堂筋田舎の父がホツとする
広島市 望月 はるひこ

花はまだ税の季節を過ぎてから
豊中市 一瀬 福 一

春雨に生憎酒がきれて
岡山県 土井 八重子

喜寿の夫賀状の字まで踊りだす
米子市 茂理 高代

この皿の割れた理由がまだ解けぬ
和歌山県 三谷 周 三

水割を重ね失恋春さかり
和歌山県 亀井 円 女

香港に行った積りで慕情聞く
大阪市 寺 中 三枝子

花ごよみ繰れば初夏には抱ける孫
佐賀県 北川 とみ子

思い切り投げれば返る母の詩
兵庫県 上江洲 勝 子

佗び住居我が人生を自画自賛
岡山市 川端 柳 子

里帰り昔ばなしの眠り姫
岡山市 井上 柳五郎

目減りする年金かかえ老いきびし
岡山市 金山 夕 子

我慢からコバルト色の目に変る
米子市 今西 静 子

唄よりもお歳へという鐘が鳴り
愛媛県 石手 武

美女が居て鬼で張り切るかくれんぼ
西条市 片上 明 水

春まって若さの残る白を着る
西条市 片上 明 水

お湯割りを一気に何があつたのか
和歌山県 山川 克 子

就職を祝い娘がくれた紅
和歌山県 森 敏 子

聞き上手話し上手で慕われる
豊中市 上田 登志美

風連れて帰る夜中の一人部屋
和歌山県 山口 三千子

入院の傷の痛みに始発聞く
唐津市 野田 旭 恒

夕暮れに仏の顔が近づいた
米子市 門脇 晶 子

子宝にまだ恵まれず旅が好き
岸和田市 原 さよ子

投句先 千560 豊中市中桜塚三丁目13-15
* 橋高薫風苑(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題 「プレゼント」 選者 橋高薫風

締切 5月10日

投句先 大阪市東区馬場町3-43 NHK

大阪放送局「さわやか広場」係

発表 5月25日(日)ラジオ第一放送

午前11時5分から

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

尼 緑之助

生まれると死に場所の無い核兵器

工藤 甲吉

反核の声は全世界に広がって、当然作品にも現われる。この句の冷厳な詠嘆は出色ものと敬服。地球上の人類、必竟動物、理抜きに豹変する性を持っている。一応は反核の声に遠慮面（づら）を見せているが、核兵器魔絶の魂胆は捨てそつもない。死に場所がないとは冷厳なお見通し、動物社会への怒り。

神様が賽銭箱の中で寝る

土居 耕花

神様を侮辱したようで御神威には遠慮申し上げるが、パイプ役の人間臭さが鼻について仕方がないこの頃、深くは詮索無用、ユーモアト風刺をいただく。

二次会へ付録のようにして行き

有働 芳仙

翌朝になると昨夜の二次会があほらしくなってくるが多い。二次会にも多種多用で付録だと思ったのは一夜明けてからのこと、

主役だったかも知れない。人間には許容されふん切りの悪さを溜めた灰皿で

林野 魁光

やたらに吸殻を積み重ねながら、決断に至らない。そう大問題でもないのに、迷いが続けば我ながら嫌になる。灰皿に叱られている男の溜息が聞こえてくる。下五が弱くひびくが、この句にはプラスしている。

ざれごとの言葉に迷うチヨコレット

西山 幸

二月某日チヨコレットが全国に飛び交うのが年々増加するそう。ヤングばかりの特権が、儀礼化もまじり、老年層にも蔓延しつつあるようだ。結構な時代。さて贈るとなるとどんな言葉を添えていいのか、ピンクがかった遊びにも苦心が必要。

藤色のネグリジエ着よう白い部屋

石倉 美佐子

物みな白つづく見える病院の一室であろう。快方に向ったか、単調な療養生活にも、夢が許される頃、藤色のネグリジエですつと春に座つてみたい。やわらかいムードが広がって行く。主人公の顔にも春がふんわり増してくる状況描写があざやか。

燃やしても燃えぬ落葉に似た私

高橋 千万子

掃き寄せて火を点けた落葉だが、湿気があつてか燃え上がらない。嫌にくすぶる。ああ私によく似ているな、まだ火種は充分残っているのに、しばし落葉の山を見ている老婦人

の姿が目には浮かぶ。素直な感懐で共感充分。老人には老人の句が生れるのは当然で、力まない方がよいと常に思っている筆者だが、やはり老人らしい句は淋しい。この句には飾りや力みがないのが尊い。かくあるべしとは思っているが。

地吹雪の町へ鳥も来てくれず

波多野 五楽庵

猛吹雪の町には人かげも見かけぬ。商売は勿論、寒む寒むとした荒涼の町はわびし過ぎる。近頃鳥がわけのわからぬままに現れる作品を多く見受けるが、この句の場合、鳥が決定打のように主役を果している。本年の豪雪は災禍を各地に残した。東北地方は特にひどかったようで、この句も実感から生れたもので迫力がある。

顔色を見ながら北の島返せ

金川 満春

何千年、何百年、何十年以前にも歴史を大きく変えた時は暴力が中軸にあった。いくら正しい理論をかざして「北の島返せ」と叫んでも、応答はむなし。顔色を見ながら叫び続けても反応はない。といって諦めるといのではないが、厚い壁とは悲しい。

ニコニコした坊主に出逢う春彼岸

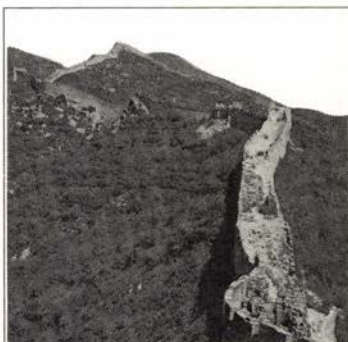
岩 本 雀踊子

坊主呼ばわりは些か失礼だが、ニコニコ顔の坊主に出逢った春彼岸、元氣もいい春めいた万象は和めいてうれしい。おもしろい空気がうれしい。彼岸のお天気は、坊さんを点景にはほえましい。

■中国吟行の旅への誘い ②

万里の長城

東野 大八



北京郊外で好きなのは八達嶺で見る万里の長城である。ここが今日、万里の長城の遺構の最もよく残っているところとされている。

北京からは二時間のドライブであるが、北京と八達嶺の間には見事な舗装道路が、段落ある平原を横切って走っている。北京を出て三十分ほどで、のびやかな沙河郷の部落を過ぎ、沙河の石橋を渡る。

沙河郷をすぎる頃から前方はるか遠くの平原の果てに、突兀たる山が見えてくる。田野の中のドライブは続き、さらに三十分ほどすると、山はしだいに近くなり、樹木一本もない黄褐色の山肌がはつきり見えてくる。

山間部のドライブ四十分ほどで居庸関を過

ぎる。むかし北狄^{びてい}防衛の要衝として知られた古関で、この辺りの集落は、この古関にふさわしく、ただひたすら古びて静かなたたずまいである。

居庸関をすぎると間もなく、右手の赤い岩山の背に長城の城壁が見えてくる。遠くから見ると、山の背に鎖でも這わせたようである——つぎつぎに山は現われ、どの山の背もその鎖は這っている。鎖は蜿蜒^{えんえん}と山の背を縫っているのであらうが、一見すると勝手気儘に、それぞれ向きたい方に置かれているように見える。小さい砦^{とりで}とか望楼^{ぼうろう}とかいうか、そうした建物が、鎖のところに置かれてある。

やがて間もなくその長い鎖の一点である八達嶺の長城へ到着、くるまを降りて長城へ上っていく。今日ではここに観光客のための休息室もできあがり、長城へ登る階段も立派に造られてある。(中略)

城壁に立つての思いは、いつも同じである。それはこの城壁がここを長い鎖の中の一点として、東は山海関、西は嘉峪関から敦煌まで延びているという。ちよつと想像できないような事実であった。実にところどころに望楼を持つ巨大なこの鎖は、渤海北岸に起り、河北、山西を貫き、陝西、蒙古の境を過ぎ、甘肅省まで蜿蜒と長駆しているのである。

私が長城に立つて心打たれるのは、歴史でもなければ、ここを通過した長い時間でもない。長城というもののとてつもなく大きい図体の張りであった。いったいこのどこでかいものを最初に考えた人間は誰であったらうか。

(講談社刊「中国の旅」井上靖『抄録』)

万里の長城といえば、たちどころに秦の始皇帝の名を思い浮かべるが、実は正史をたどると、紀元前三六九年というのが正確な築城の起源なのである。すなわち春秋時代の齊にはじまり、幾星霜を経て現在の姿に落ちつい

たのは、明代も末（一六六〇）なのである。

長蛇のうねりにも似て重畳たる山肌をはい上り、嶺より嶺へ峡谷を下り河川をまたいで果てなく連る長城の雄大な姿は、ヨーロッパ人が月より見える唯一の建造物と賛えるのも道理で、訪れる遊子等しくその偉容とすばらしい眺望に感嘆の声をあげるのである。

全長一口に二七〇〇・といわれているが、

二重三重になった部分や、起伏その他を加えれば尤に五〇〇〇・に達するものとみられている。万里の長城の呼称は、始皇帝以後とされ「城塹万里」の語が「史記」にもみえる。

漢代の一里は約四一六メートルだから、中国の里程ではおよそ一万華里に近い。随って万里の長城というのは中国式誇張とはいいい切れまい。

ともあれ齊・魏・趙・燕・秦・隋の興亡をめぐる匈奴との長大な歴史のドラマを織りなす万里の長城は、いいかえればそれは権力と慟哭の墓標であるといつても過言ではない。

若き日の筆者は、八達嶺を兵衣を纏ってさまよったが、凄じい山頂の風の中で、しみじみと歴史の悲哀といった想いに捉われた。

千乗、万騎動き

馬にみずから長城の窟

秋は塞外の雲に昏れ

霧は関山の月を暗らす

（楊燭作「飯馬長城窟」）

山海関から五・ばかりの岩の上にささやかな廟があり、そこにこんな対聯がある。

秦皇安在哉 万里長城築怨

姜女未亡也 千秋片石銘貞

宋末の丞相文天祥の筆になる孟姜女の追悼碑文である。始皇帝が長城構築をはじめると付近の諸国から男手は悉く強請徴発された。

この苦役に最愛の夫を奪われた孟姜女は、手製の寒衣を届けるべく工事場を訪れたが、夫は既に酷使の末病死と仲間にかきされ、思わず慟哭した彼女の涙に、城塞は忽ち崩れ落ちて彼女を人柱にして埋め込んでしまった。（京劇「哭長城」その他）

国土防衛という権力の美名によって罪なき数知れぬ民衆が難工事の酷使にさらされ人柱となり、長城造成の鬼と化した怨念の凄じさは伝説、逸話、詩歌を織りなす枚挙に暇なしの有様であった。王昌齡の「出塞詩」李白の「戰城南」等は、戦争の悲惨さと民衆の呪咀をえぐり出したリアルな反戦歌だが、孟姜女の哀話はその象徴的な一故事に過ぎない。

観光北京の目玉である万里の長城は、長城最東端の山海関にはじまるが、明代に長城の修築にともない山海衝を置き、堅牢な関城を作った。これが山海関と呼ばれた起源だ。明はここに大兵を配置し、勃興する満州族の侵略に備えた。天下第一関の名はここに生れたが、守将呉三桂の降伏によって清の大軍は北京にだれ込んだ。この入関により明朝は滅び清王朝が出現した。民庸関を抜けると道が八道に別れたところから八達嶺の名が生れたと「長安各話」にあるが、ここは北京八景の随一といわれている。

思えば日中戦争における華北・蒙疆作戦の口火は、この八達嶺の峻嶒の争奪にはじまった。南口、民庸関、古北口作戦がそれで、この作戦で偉名を残したのが池上勲隊であった。昭和十年この新戦場で空陸呼応の大演習に私は司令部通信隊の一兵卒としてこの地を馳せ回った。さきの作戦により砲火で破壊された八達嶺の長城は、その時、瘦馬の背のように歩けば崩れ落ちる一大難所であった。この時、雲から出て雲にのる野菊の花の華麗な妖美さは今も私の脛から消えないでいる。

○長城に匈奴にかわる日章旗 大八の句は憲兵隊に始末書をとられた句である。

鳥羽《答志島》 海族のタカラジマ



旬の味覚を存分に…
潮騒の香りでおもてなし。



鳥羽唯一のフィールドアスレチック。



海水浴、釣り、ウインドサーフィン…
プライベートビーチで、ちょっとリッチに。



仲間と自然の中で楽しむバーベキュー。



幹事さん
ラクラクのご宴会
バックからご家族・
少人数さまのプライベート
プランまで、各コース
をご用意いたして
おります。

- 料金のごあんない
- ◆大漁コース…13,000円
 - ◆潮騒コース…10,000円
 - ◆松籟コース…8,000円

※1泊2食、税・サ込です。※休前日は2,000円増です。
※12月31日～1月4日 4月28日～5月5日 7月20日～8月25日は除く

交通のごあんない

- 大阪ナンバより鳥羽(近鉄特急)……………2時間
- 名古屋より鳥羽(近鉄特急)……………1時間40分
- 伊良湖より伊勢湾フェリー……………60分
- 大阪よりお車で西名阪～伊勢自動車道を経て一約3時間
(専用駐車場あり)

施設のごあんない

- 全館冷暖房完備 ●大・中・小宴会場、ラウンジ、展望大浴場、
アスレチック、プライベートビーチ、キャンプ場

とっておきのパーソナルアイランド

リゾートホテル



サンビーチ 鳥羽

伊勢志摩国立公園(鳥羽・志志島)

三重県鳥羽市桃取町字平石1591番地
鳥羽郵便局私書箱16号

お申込みご予約は●大阪案内所 ☎06(226)0931 ●ホテル ☎0599(37)3315

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

田中正坊

いたって柳歴の浅い私が、人様の句をあけつらうことに戸まどいを感じましたが、「実作」と「鑑賞」とはまた別と考えなおしてペンをとりました。

さあどうぞ心に鍵は掛けてなし

赤木和子

水煙抄のページを開いたら真つ先にこの句が目にとびこんできた。なによりも夫と子を愛しながら、他人にも心をひらく和子さんの明るい人柄がにじみ出ている。

いづくへ構想を練る庭師の目

小山悠泉

一仕事おわって煙草に火をつける庭師。しかし、目は庭に釘づけになったままだ。頭の中では、あの石は少し右へ、この辺りに植込みをとでも。ひたすら仕事に生きる男の句。

初孫の煙煙権は認めよう

羽津川公乃

さて一服と煙草に手を伸ばし、「ああ、そ

うだ。うちには孫がいるんだった」とあわてて引つこめる。可愛い赤ん坊のために、部屋の空気をにごすまいとする思いやりに賛成。孫に似た子供の歳をすぐに訊く

紀市郁栄

また、孫の句で恐縮。このような体験は、世のおじいちゃん、おばあちゃんには誰方でもされているはずだし、電車やバスの中などでしばしば見かける情景ですな。

離乳食があさん先に口があき

宮本かりん

これも私の好きな軽いスケッチふうの句。先日母娘の家でそっくりのシーンを見た。育児に一所けんめいの若いお母さん、がんばってください。

正論を言う言い方が気に入らず

高野不二

君の言っていることは、確かに正しいかも知れない。だが、物には言い方というものがあるだろう。べつに気むすかし屋でなくともこういう思いのすることがよくある。

年金を十二で割って読む寒さ

東浦砥代

毎年四月、年金が改定され、七月ごろに通知書が届く。七ケタの数字も月数で計算すれば、現役時代の月給の何分の一にしかあたらない。われら年金生活者の哀歎。

ひと昔前の記憶で迷う街

石手武

大都市の様相は、年一年と変化していく。確かにこのあたりだったなあとと思うのだが、

見かけぬビルが建つていたりして古い記憶は混乱し、同じ所をウロウロすることも。美しく老いる手だてを女坂

河瀬芳子

誰しも老醜はさらけ出したくない。まして女の身は。そこで服装や化粧にも、若い時とはまた違った工夫がいる。外見とともに、内面の美しさにも心を配らねばと思う。

合槌を打てば女房得意がり

井上白峰

妻は誰よりも夫に話を聞いてほしい。うるさいなと心で思っても、フンフンとつなずいて聞いてあげるのが夫の愛情だろう。円満な夫婦のはほえましい姿がよく表われている。労わりの歩幅が温いフルムーン

矢内寿恵子

静かな公園をそぞろ歩きする老夫婦。どちらかがたたくと、片方も立ちどまって歩幅をそろえる。もう急がない人生、ゆつくりといたわり合って一日一日をたいせつに。

野次馬を満足させて全焼す

高崎雀声

他所の火事は、大きければ大きいほど面白い。焼け出された人のことを考えるのは後の話。せつかく駆けつけたのにボヤですめば、なあんだというのが人情だろう。

かざおきば家族以外はひ・み・つ

二宮撰子

学校から帰ってくると、お母さんは留守。ぐるりを見回しながら、そつと鍵を取り出す。撰子ちゃんの様子が目に浮かぶようです。

◆同人アンケート

私のグルメ手帖

担当・榎谷 寿馬

〃おくんち〃の目玉料理

唐津市 久保 正敏

当地には毎年十一月三日から五日までの三日間、市の氏神様のお祭り「唐津くんち」があります。そのおくんち料理が旧唐津市内の旧家、豪商の間では現在もお連綿と続いている豪華で珍らしい自慢の料理です。おくんちの目玉料理は何といっても「アラ」という

大きな魚の姿煮つけでございます。この煮つけの方法を旧家の料理人に特別お願いして訊いてきましたが、これは秘伝に近いものなのです。

十キロ級の「アラ」を煮つけるのに別荘特製の鉄又は銅の鍋に藁又は「スノコ」を敷いてその上に鰓から内臓を取り出した「アラ」を頭と尾を交互に二尾並べて、ダシ汁二升に水を加え初めのうちはうす味から六時間程煮込み、それから醤油七升、みりん一升、砂糖五キロ、酒二升を混ぜ合せたダシ汁を柄杓でまんべんなく一昼夜かけ続けます。最後に「アラ」の艶を失わないために、ミリン一升をかけて仕上げます。所要時間は三十時間、十キロの「アラ」の体長は一、二メートル程です。

老舗Y家では四十キロ級の「アラ」六尾に必要な材料は次の通りと聞きました。醤油百二十六ℓ、ミリン十三ℓ、砂糖三十キロ、水飴二十キロ、酒十五ℓ、水五十四ℓ、所要日数一〇日間にかかるそうです。それぞれ家伝秘伝があるようです。費用の点については正確には申せませんが一般家庭で収入の三カ月分を三日間で費消するために俗に三月倒れと言われる所似です。

次に我が家のグルメですが、家内に相談し

て我が家風の「鰻・鯖の胡麻あえ」の作り方をお知らせ致します。鮮度の良い大鯖の片身又は中鰻三尾を三枚におろし、皮を剥いて一センチの厚さに切ります。次に胡麻をなますのように刻み薄塩をしておきます。胡麻をすり潰し砂糖と醤油に混ぜその中にさらした玉ネギと先程の魚と胡麻を入れてよく混ぜ合わせると出来上ります。魚嫌いな人でも甘味を加減することによって美味しく食べて頂けるのが「ミソ」です。

我が家の自慢一品料理

岡山県 嘉数 兆代賀

邑久町という農村、私達は自家製のものを自慢に料理しています。春には何といっても歯切れのよい切り干大根のハリハリ漬けです。お揚げと煮るのもよろしいが、これは又一味変った漬け物、是非味わってみて下さい。

＜材料＞

切り干し大根二〇〇g

生姜一かけ

赤トウガラシ二本

みかんの皮干したもの少々

昆布一〇〇g

サトウ大匙二杯

酒大匙二杯

醤油カップ 3/5

酢カップ一杯

だし汁カップ 1/2 塩少々

〈作り方〉

一、切り干し大根は水で堅めにもどし水気をきつく絞る。生姜は皮をむいて千切りにする。
二、みかんの皮も水につけてもどし千切りにし材料全部合せてひと煮立ちする。冷めたら昆布を千切りにして汁ごと①に加え、ときどき混ぜて味をなじませる。野ぜり山椒等入れて風味を添える。
微妙にして淡泊な味を味わって下さい。

私は食べる人

竹原市 山内 静水

昔昔は、食べることをするのが大好きで、ドラマのおしんちゃんに近い暮しぶりだったの、飯焚は一年生の頃すでに、煮メや醤油飯は五、六年生頃にはちゃんと。支那事变で、はちよと落着くと十八番の巻寿司をよく作

り、戦友に喜ばれたものである。現役五年でやとと復員、嫁はんを貰ったものの共稼ぎ、夕飯仕度は殆んど私、そんな甘い生活もたつた三月で赤紙一枚で引裂かれ、着いたところはラバウル。三年半の間に皆さんがやっぱりと思われた炊事軍曹は一年たらず。そして帰還、当分は食べる、掃除もよくしたものであるが、何時の間にやら最近はおっぱら食べる人に専念して、テーマに相反する文になったことをお詫びして責任の一端をと思います。皆さん、ごめんなさい。

うどん

新宮市 大矢 十郎

料理に一番大切なもの、それは愛情である。わが家のグルメ手帖から美味しい「うどん」の作り方をご紹介しよう。

うどんの味、それはやっぱり、うどんその物の味である。しかし経験と時間を要する。オリジナルうどんはこの際割愛して、市販の玉うどんを用いたそのつけ方を説明しよう。先ず、うどんを箆に入れ沸騰中の湯に浸して二、三分間茹でながらよくほぐす。そこで箆

食は命なり

香川県 三井 酔夢

を上げそれを床に叩きつけるほど思いきり振って湯を切る。これが愛情である。これを素早くどんぶりに入れる。すると熱いうどんの表面が急速に乾いてくる。その乾いた所へ熱あつの下地をたっぷり注ぐ、そのため下地がうどんに沁み入って、一すべのうどんを口にした時、ああ美味しい、という舌ざわりが湯気の中で感じられる。解るかな。

瀬戸内のピンピンはねる魚が食べられる幸に恵まれ、包丁さばきは素人ながら、さしみ、薄造りにする位は日常茶飯事、焼いてよし、煮てよし、揚げてよしと、結構充実した台所のあけ暮れである。野山の幸にしてもしかり四季折々の新鮮な旬の材料が身近に有り、露のとう、つくし、芹、わらび、ぜんまい等「踏青節」をまねて年中行事はまず早春の摘み草から始まる。

讃岐といえば、手打ちうどん、しょうゆ豆、そうめんと、郷土色豊かな工夫をこらしたわが家の味自慢も多い。

最近、食は命なりに洗脳され、アルカリ性食品に関心を深めている。天然酢をふんだんに使うこと、自家製梅干を料理にとり入れることを研究中。①旬のものを使う。②色とりどり（海草、緑黄色野菜）③盛り付け美④タイミング。⑤腹八分。以上が私の心得。土筆めし恋しいとある娘の便り

秋祭りと「祭りずし」

倉敷市 小野 克枝

わが家の自慢料理といえ、なぜか日本料理のおすし、煮込みごはん（五目御飯のこと）煮しめ、ということになります。岡山の「祭りずし」は駅弁で有名ですが、備前の「喰いまつり」と言われるように私の郷土、玉島^{たまじま}島の氏神様の秋のお祭り（乙島まつり）にも親族知人友人を招待して祭りずしは勿論、おこわ（お赤飯）お刺身、焼き魚、天ぷら、煮しめ、お吸いもの等でおもてなしをする習慣があります。

「乙島まつり」は約七百年の歴史があり、日本三体のひとつといわれる御神輿と、千歳楽、奴、鬼、獅子、御船等が氏子若衆の掛声

のつて町内をねり歩いたあと、五万人の観客とばんはりの灯り見守る中、一八五の石段を左右に蛇行しながら、暮れなずむ神殿へと進みゆくさまは壯観の一語に尽きます。由緒ある戸島神社の十三代目宮司・桑野武彦（雅号林鶴）さんと奥様の澄子さんは、川柳たしま社のおしどり作家でいらっしやいます。私の作るおすしは、姑さんの味と実家の味がミックスしてでき上っているようです。

ゆりわ（すし桶のこと）に予め作ってあるすし飯の中に小さく刻んで煮付けた人蔘、牛蒡、蓮根、筍、干瓢、高野豆腐を混ぜ合わせその上に瀬戸内の地魚、鯛、さわら、ままかりの酢づけと、穴子、海老、鳥賊、松茸、椎茸、さや豌豆、焼きのり、錦糸卵、紅生姜を彩りよく盛りつけてでき上ります。豪華絢爛見た目も美しく飾りつけるのが特徴です。

亡母の匂い

高知県 赤川 菊野

私の住む土佐の名物郷土料理と言えばなんと言っても山海の珍味を盛り合せた皿鉢料理、それに鯉のタタキです。土佐では正月神祭に

は、どこの家庭でも皿鉢料理でお客さんをもてなします。

それぞれの家に自慢の味があり、お客さんをお招きするのも楽しみの一つです。

皿鉢料理の中で私の好物は鯖の姿すしです。亡母の匂いが一番残っているように思えて。

台所仕事は好きな私ですが、わが家の一品料理と言われても私には料理と名の付くようなものは何も出来ませんが、強いて言えば亡母から教わった野菜料理の幾つかです。その中で得意と言えは煮つころがし位のもです。たまに料理の本を手横文字の料理を作ってみますが、やはり私には煮つころがしが一番合っているみたいです。

鯖の姿煮し

島根県 堀江 芳子

川柳の料理法なら「音読で字の説明せずとも耳にはつきり入る句」の一言に尽きます。

味に敏感な正朗には昔風にコトコト手間をかけた物ばかりで記憶に残る彩どりを添え気を使います。祖母から母、私へと教えられた一つに鯖の姿煮し。塩鯖の押し加減で艶と味

を見分けます(合せ目を開くと良否が分り冷凍したもの不可)。三枚に下ろし腹身を削り

小骨を抜きサツと水洗い、布巾で水分を取り皮を剥ぎ、鯖の要領で酢に浸す。米は三十分前に洗い昆布10cm位を入れ合わせ酢で炊きこむ。冷めたら巻簀に皮の方を下にご飯を乗せ、姿に添って形良く締めながら五cm厚みに竹の皮か葉蘭にきつちり包み二箇所くくりつけ半日程置く。美しい艶と臭みのない味は魚嫌いの私も合います。三cm位いの大きさに切り春なら菜の花の浅漬け、生椎茸の焼物など季節の香りと彩を添えます。正朗も大好きで遠い私の故郷の味は心を離しません。

かなしき後遺症

岸和田市 宮園 射月芳

今迄の記憶では、茗荷以外に嫌いな食物はない。好きな物は新鮮な魚、出来れば上等の分厚いビフテキであり、余り手のこんだものは好まない。フランスとかイタリアとかの外国料理、それに食べきれない程の山盛りの料理というのは総じて苦手である。生の物が野に近い物が好きで、食の面では原始人が野

蛮人に近く、おおよそグルメ等とは縁遠い事である。

鰯の目刺しとさつま芋で育ち、米の飯は30回嚙んで飲み込むよう教えられた。小学生の時に日支事変、次いで大東亜戦争、国民学校第一期卒業、中学一年生より下宿、学徒動員という名で囚人同然、食べるといえば腹を充たしてくるものなら何でも良かった。

そんな後遺症からか贅沢な料理にはかなりの抵抗がある。今や飽食の時代、スーパーにも食料品は山と積まれ、レストランでは棄てるのに困る程の残飯、昔は一粒の米でも大切にといったのに、その内みんな目が潰れるのではないかと思っている。

私にとって一番の御馳走はやはり腹が減っている時と、楽しい雰囲気である。

自慢ほどでもない一品

堺市 河内 月子

近頃は四季の無い食べ物が多くて子供達に季節感を教えるのに少々苦勞しています。次の一品は四季を問わず頂けるのでとても重宝しています。題して「ささ身の和え物」と言うの

でしようか。分量は約三、四人前ですが次の通りです。ささ身四枚、生椎茸中位五枚、きゅうり中二本は皮を少しむいて板ずりしておく。レモン汁ゴマ大さじ三杯醤油大さじ一杯、おろし大根大さじ五杯位。ささみは白い筋をとって醤油少々でからませて三十分冷蔵庫へとり出して網にのせて椎茸と共に余り焦がさぬように焼く。少し冷めてからささ身は裂いてボールへ入れレモン汁を混ぜておく。次に椎茸、きゅうりを細切りにしてボールへ加えおろし大根を少し絞ってから加え、ゴマ醤油、化学調味料少々でよく混ぜ合わせて出来上り。レモン醤油、ゴマ等はお好みに合せて増減して下さい。

あつ、お銚子を一本と誰かが催促していますよ。

今回、雅号の「鱗」を「鈴」と改めました。以前同様、ご風交
お願い致します。

〒502 岐阜市且島西町二丁目

市川 鈴 魚

(鱗魚改め)

電話 三一一〇二八三

えの木姫

草刈 墮駄

昨年十月入院した時はかなりの重症で絶対に近い安静を命じられた。約二週間天井を向いたまま酸素を吸い続けた。

やがて症状も落着いて廊下の散歩を許されたころ、すれ違う若い女の人がよく挨拶する。誰であるか見当がつかない。後で判ったのだが、看護婦が勤務交替のときの私服姿であった。病室ではいつも口を利いているのだが、顔で憶えず白衣と一体で親しくしていたのである。私の病棟の一階下、四階に八十幾つの老人がいた。吝嗇で妻に財布を渡さずいつも自分の枕もと、すぐ眼と手の届くところに置いていた。その大切な財布が或る日ない。

「お父さん財布どうしたの」

「えの木姫が持って行った」

そう答えたそうだ。家内からの伝聞である。病院に盗難があるのは事実らしい。入院すると必ず婦長が注意する。

「えの木姫」と呼ぶかきり女性だろう。本当に女性が忍びこんだかは怪しい。自分で隠す

場所を変え、ぼけて忘れたのではないか。それにしても、えの木姫とは何んだろう。よほどこの老人の心の底深く棲息しているに違いない。無くなった財布はその後出てこなかったのか、恐らく後刻どこかで見付かったものと推測していた。だが二、三日すると私服が二人来ていたと知り盗難は事実であった。

襖に就いて少し調べてみた。その果実は食べられるとある。初耳であった。また昔、一里塚にして東海道に襖を植えた。誹風柳多留に、「落武者は襖を植えぬ道をにげ」とあるとあった。しかし「えの木姫」はそんな無粋なものでなく、この老人の若いころ懸想した娘の邸内に立派な襖が枝を張っていた。私はそう想像している。片思いの恋人がこの老人の胸に生き続けていたのであろう。或は身分違いであつたか。



川柳塔社常任理事会(4月1日)

出席者 栗・形水・薫風・紫香・太茂津・敏文秋・萬的・重人・凡九郎・天笑・白漢子・杜的・庸佑・寿馬・笛生・武庫坊・正坊・智子・史好

《議事並に報告事項》

近畿文字放送作品募集

題 「風」 3句

締切 5月10日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい

〒540 大阪市東区谷町2丁目36

大手前ウサミビル3階

近畿文字放送 川柳係

▽藤島茶六氏の叙勲祝賀川柳大会(3月30日)に栗主幹夫妻、太茂津、鬼遊、メ女が出席。

その報告が栗主幹よりあり。

▽文化庁では広く国民一般の各種の文化活動を全国的な規模で発表する場として国民文化祭(仮称)を61年度から開催、川柳も参加することに、文化庁担当者との話し合いの模様を栗主幹から報告。

▽高知県川柳大会、鳥取県川柳大会に出席した紫香より報告あり。

▽中国吟行の旅、正式スケジュールを四月中に決定する(正坊報告) (S)

■5月の常任理事会は1日(木)

番傘わかくさ川柳会創立40周年
片岡湖風句集「ともしび」発刊

記念川柳大会

とき 昭和61年5月18日(日)10時開場
ところ 大阪府中小企業文化会館

地下鉄「谷町九丁目」下車⑤番出口
谷町筋南へ徒歩7分東入る

講演 「上方芸能」編集長 木津川 計氏
句集鑑賞 安井 久子氏
宿題 「救う」 加藤 翠谷選
「芯」 保木 寿選
「続く」 田向 秀史選
「湖」 森中恵美子選
「近所」 梶川雄次郎選
「鶴」 片岡つとむ選
「めし」 橘高 薫風選
「信頼」 奥田 白虎選

事前投句 各題2句・締切12時
「灯」 片岡 湖風選
(締切りました)

会費 三千円(句集・昼食呈)
パーティ 四千円(申込制・締切)

主催 番傘わかくさ川柳会

合同句集「風」

出版記念川柳大会

日時 昭和61年6月15日(日)10時開会
会場 なにわ別館

★事前投句 出欠不問・締切5月15日
松江市北松江 松江温泉

投句先 千683米子市米原一三〇六一
住田三銘 大会存宛(二、五〇円)
題と選者 「花」時実新子／「明るい」
柴田午朗／「朝」天根夢草／
「仏」山根泉人／「風」金
築雨亭(謝選)

★当日出句 締切11時・出席者のみ
題と選者 「笑う」室田千尋／「生き
る」高杉鬼遊／「流れる」
津川紫叟／「飾る」園田恵
美子／「声」但見石花菜

当日会費二、〇〇〇円(懇親宴・大会報)
〈合同句集出句者〉三銘・千代・荒介・
瑞枝・千秋・健次・乃里子・かずお・楓
佐吉・久枝・寿美子・雪子・操子・主詩
朗・美智子・ミツコ・馨子・嘉寿子・一
笑・昭二・ひさお・博子・雨学

主催 川柳研究「風の会」

第58回 奈良県川柳大会

日時 昭和61年6月22日(日)11時
会場 吉野郡下市町下市温泉あきつ荘

電話〇七四七五二・三四〇四・三四〇五
近鉄吉野線下市口駅下車、温泉行バ
ス30分
奈良バス奈良―下市線終点(1時間
40分)

課題と選者

白 鶴本むねお
夜明け 川端真一郎
母 村上 満子
こらえる 鳴沢 高
リズム 高橋あさ子
雲 落合惣太郎
くすり 松本 多加
釘 岩本雀踊子

席題 各題2句 締切12時半

◇欠席投句三百円(20日必着)
◇準備の都合上6月15日までに左記へ
確報下さい。

連絡所 吉野郡下市町今在家

藤田起佐子まで

会費 二千五百円(入浴・昼食呈)

電話〇七四七五二・一八三二
主催 奈良県川柳連盟

初歩教室

題 — 技 —

阿 萬 萬 的

今月の課題「技ワザ」を枝と勘違いされ
た方がおられましたが、その中から技として
とれるものを先ず

枝ぶりに余生をかける盆の松
祖父の枝喜び受けて梅が咲く
盆栽をためつすがめつ悦に入る
（盆栽に松の個性を生かす技）

母の瞳から見れば枝の儘で良い
（母の目から見れば未熟な技でいい）

どの枝もからんでみたい萬紅葉
（どの枝にもからんで萬のにくい技）

花鉄妻は未練のない小枝
（無難作の中に技ある花鉄）

難段に一枝梅をそえて見る
（難段に一枝そえる母の知恵）

親方が枝打ちくれた職の道
宙飛んで枝打つ木樵の放れ技

松の枝雪重そうにたえている
（ある技を教える雪に耐える技）

さて本番の技の部にはいますが、先ずス

サワ子
一 耕

たかし

高 代

山 久

登美子

豊 太

やすお

千代女

ボーツ。

栄光は技と根気の積木です

下五積木は何れは崩れるものですから積み
重ねとしてみました。

銀盤で胡蝶のように技變つ

得意技拍手を待っている余裕

土俵際技をかけ合い燃えつくし

投げ技の力士の顔があどけなく

身のしまりいい技見せる千代の富士

（肩の肉いい技見せる千代の富士）

足技も見事少年ボール追っ

技ありをとられてからの捨身技

人文字の冷たさ一糸乱れていぬ

（人文字の技伝統の応援歌）

家計を掌る妻にもやりくりと世渡りの特技

があります。

妻の美技夫の影をうすくする

（妻にまかせた世渡りの技恙なく）

胸算用特技があつて賢い上手

赤字家計無から生み出す技磨く

（やりくりの技を主人は見えてくれず）

だが女にはこんな技もありました。

痴漢にも婦警に技のある強み

（技のある婦警に自信のある歩幅）

女の技男操るチョコの日

（女の技かバレンタインのチョコレット）

泣き落とし女が一本とれる技

身に付けた技へおんなは強くなり
技無用女はすぐに脱ぎたがる

晃 世

よし津

て る

麻 黄

達 子

せい子

久 子

義 男

たかし

兼治郎

太 郎

京 子

実 男

八重子

白 峰

寿 子

章 久

恋捨てたらしい女の技訝える
技にもいろいろありました。

麻雀の技プロ級の大学生

（麻雀の技ならプロの大学生）

パチンコも技の一つに入れたもめ

（パチンコの技もめつきり老いた日々）

客が逃げたのでは、釘師を雇ったかいがな

いのではないですかねえ。

ごね得の詭弁の技が冴えている

（ごね得の詭弁も技のうちにしろく）

寝技出来ぬば政治家になれず

寝技だけ取柄とするのも社交術

（寝技だけ取柄とするのも社交術）

聞き上手これも世渡り技のうち

聞き上手昔の恋をのぞかれる

（聞き上手可愛い中に「ボス」がいる）

（ゆうぎ会可愛い中にもボスがい）

技術の進歩は我々年寄を置いてけぼりにし
ますね。

技術者も時代が変る運不運

年老いて頭と技の根比べ

技術革新乗り遅れまい老夫婦

ロボットがあつさりやつてのけた技

合理化に今年期の技がロボットへ

（年期の技が今年ロボットに移されて）

だが、こんな句もありました。

文明の技術過信が招く災

（技術過信スベースシャトルに落し穴）

克 子

倫 子

悦 子

太 郎

姿 洋

やすお

凡 太

姿 洋

て る

八重子

正 之

ツヤ子

弧 舟

春 枝

金 吾

公 一

公 一

技術屋とはかくお金に無頓着のようですね。
技術屋で通し世間にうとく居る 義男
技術屋の亡父うとく居る 輝月
努力努力そのみでした写真見る 久子
（努力努力の技はお金に無頓着）
技術だけ負けぬが財布軽すぎる 周三
（最高の技術お金のこと言わす）
老後技の無い身の淋しさ、だが平凡な中に
喜びはあるものです。

眼をとじてしみじみ思ふ技のなさ カネ
身についた技はなくても健康で 房子
技もなく平凡に生き悔いはなし 昭治
技術持つ身に職安の椅子固く 白李
技術持つじやなく、技術が無いからでは。
だが、健康なお年寄の句もあります。
父のないう家族支えた針と糸 里子
ちぎり絵の技が身につく采けもせず 喜代志
（ちぎり絵の余技が何かと役に立ち）
はあちゃんか母校で教える薬細工 里子
とつときの技も孫等に見破られ 円女
この技に徹して老いを若く生き よし津
（老いと采け防ぐに俳画でも習い）
定年まで積み重ねた技をまた生かす 保夫
技といえは名人芸は平凡な中にも生れます。
小鉄の技 見事なだんこ細工 繁男
（しんこ細工見事に小鉄使う技）
シェフの腕ソースの味は技を秘めて 寿美子
（シェフの腕ソースの味に技を秘め）
ひとつずつ無口な師から盗む技 春枝

技を練る職人芸の技を練る 隆積
（皺だらけの手を見せ芸のこと言わす）
泣いても笑う演技が性となり 金吾
笑っても泣いても演技になる二人 房子
下五の二人を寛美と置きかえてみたら。
猿之助四次元の演技さえ 明吉
（四次元の演技にいとむ猿之助）
こつこつとスランプ感じぬ名人芸 保夫
（スランプなど感じぬ名人芸の味）
陶工の技窯の火に燃えつくす 白李
技よりも心で刻む仏像師 繁男
実技より理論の好きな老師範 みのる
素人に受け身の技を習いおり 通子
（素人に受け身の技を教えられ）
衰えぬ技高齢の有段者 倫子
父の峰越して行きたい技みがく 実
人間国宝舞台が狭い舞扇 公一
技に溺れると思わぬ落し穴があるもの。
小技でも思わぬ落し穴があり 正之
先手とする技を身につけ負け知らず 芳水
（先手とする技にもあった落し穴）
技巧よりたくまぬ技の美しさ ツヤ子
（たくまぬ技です塩輪の眼がきれい）
技にもいろいろありまして。 新造
技のある魚針から餌を抜く 落ちこぼれの子は目立ない特技秘め 弧舟
（魚にも技ありうまく餌をとる）
（目立ない特技持ってた落ちこぼれ）
まず花を眺め技術は後回し 周三

（前衛派の技術へ解らぬままに立ち）
技磨くために日本語まず覚え 新造
技術よりお金を積んだ茶の免許 博子
戸障子を足で開けるも技のうち 通子
刻まれた拙き技の道祖神 章久
（道祖神の拙き刻みが親しまれ）
石投げて男は背で演技する 実男
（THE・END男は背で演技する）

（刑事コロンボコートの皺にある演技）
サカスの小象可愛い技を見せ 明吉
演技さす猿にきびしい鞭がある かつみ
程遠い技に堪え抜く舞台裏 静江
透し彫古墳の馬具に目を見張り 勝美
着せ替えの技で春呼ぶ着物ショー 博子

題「公園」 5月10日締切（7月号発表）

「船」 6月10日締切（8月号発表）
宛先 千598 泉佐野市中庄一〇八一九九 阿萬萬的

全日本川柳大会（6月8日）前日の
観光コースが変りました

行先 別府ーマリンパレスー高崎山ー
血の池・海地獄ー鶴見園ランドホテル

頑張る

藤田 軒太楼 選

受験の灯だけを残して灯が消える 明水
頑張った受験へ古都の桜咲く 悠泉
頑張った一姫二太郎三姉子 螢
頑張った軍手一日がみちている 山久
頑張って戦後を生きた子沢山河瀬芳子
目標へ寒夜の窓の灯が消えず 多駄子
額かぬ親へ仲人通いつめ 高明
頑張った今日の夕日が美しい あき
頑張った歴史を石に刻む筆 虹汀
頑張りがブツンと切れた聖女像 正敏
頑張るぞ！入学すれば遊ぶんだ 三和
斗酒辞せず頑張る子 七面山
頑張っているなど父の眼が確か 可住
頑張ってカップ片手にVサイン 亀男
ふり出して頑張る背なへ愛の鞭 森和子
受験子の徹夜に合す毛糸玉 寿恵子
頑張りも薄れて老いの春炬燵 紀美女
頑張って来いよと新婚見送られ 里風
逆境を頑張り通した夫婦坂 輝月
頑張って若さに負けた苦い酒 ちかし
闘病の頑張り命の泉湧く サツ子
頑張れと一言添えたのし袋 佳雲

底辺で頑張り続けた父の靴 玉恵
リハビリへ頑張る患者目に痛し 春日
頑張りを老いの一徹杖とする 裕
一筋に打込むものがあって耐え 弘朗
頑張ってみても蛙の子は蛙 素身郎
災害へめげず頑張るブルの音 みどり
頑張って築いた夢のマイホーム 元江
頑張りを見せてる夫婦独楽の芯 雀踊子
頑張りの余生へ春陽笑いかけ 克枝
頑張れと孫の机上に花一輪 多賀子
頑張ってスリット持った日の悪夢 幸一
頑張れとスタミナ食に叱咤され どんたく
産声に今母となる底ちから 洛醉
頑張った腕で家紋を塗り変える 雄々
鉢巻をすれば頑張る気が起こり 本蔭棒
完走のビリが絵になる大拍手 優
頑張っています自殺などしない 規不風
頑張りへ白いテープが待っている 忠三
ターミナル頑張る朝が吐き出され 重人
終章へ頑張る彩を溶く絵皿 文平
過疎の老い頑張る汗に鍍光る ゆう也
頑張りが火中の栗を拾いあて 代仕男
還暦へ鬼で頑張る椅子が無い 朴竜
春闘へ労使双方折れていず 軸

ムード

大原葉香 選

絵心はないがムードが好きな画廊 よし津
船の汽笛で別れのムードになる旅路 たず子
やわらかいムードの裏にある不安 ちかし
ベチャクチャといつもムードのない女 克子
パチンコのムードに軍艦マーチ合い 兼治郎
ジュースで乾杯酒のムードの中にいる 元江
家族みな暗いムードになる入試 理恵
改憲のムードはなくて平和ボケ 雀声
ムード作りの上手い小鳥に妬いている さと美
春宵のムードに冒険したくなる 螢
ムードには縁のない北と長電話 紀雄
潮騒が遠のきムードに酔う二人 美寿々
ムード派にむつかしい名の酒がある 和友
いいムードだった見合いがまとまらず 芳水
ムード派と言われた父の背のまろみ 虹汀
アングルを変えてもムードのない女 正敏
中流のムードで妻と旅に出る 可住
妻の床花のムードにしてあげる ゆう也
民話聞く昔むかしになるムード 豊
古里のムードいろりの火がぬく いつを
ムード派の夫で宴会案じられ サワ子
茶房のムードの中にあるしじま 雀踊子

下町のムード前垂れの人に会う
七色のムードで女化身する
クラス会友のジョークが座を沸かす
ムードに酔い高いボトルをキープする
口説かれるムードを作る遠廻り
三次会武装を解いているムード
静かなムード夫婦が組むワルツ
歳の差がムードの外に一人居る
盛上がるムードへ音痴まわり番
或る日ふとオームにムード盗まれる
ムードには弱く狸に化かされる
弔いのムード鴉が盛り上げる
還暦のムードへ母の受ける猪口
温かいムードに馴れた籠の鳥
カチカチの頭でムードにすぐに酔う

佳

つけ替えた仮面でムード楽しませ
ざわめきも楽し幕間のプログラム
ムードに酔うて無口な母をしゃべらせる
グラス二つムードにひそと炎えている
ジャスミンでムードを出した夜の部屋

雄々 四郎 すみれ 砥代 輝月

最高のムード自分を見失う

白李

点滅のムードに弱い男の背

智恵子

カクテルの赤いムードに揺れている

森脇和子

軸

ムードには酔えない影が一つある

損

中原 諷人 選

弱虫がまた損をする風に会う
損したって構いはしない芸に生く
パンコこの損は茶漬けでとりかえず
出血という看板の字にも慣れ
バーゲンの買わねば損というまなこ
半額の値札で損はしてないぞ
役目柄損の上塗り酒を買い
損な役買ってタバコの長い灰
損をして笑う余裕が君にある

静子 隆積 可住 明水 白李 重人 ゆう也 四郎 鶴汀

三文の損 春眠もいらいもんだ
見落しの損ソロパンがはじき出す
欠損に父も無口の髭がのび
天職と割り切り損に耐えている
損ばかりしながら蒔いた花の種
損をした話を今だから笑い
掛け損の保険うれしい父達者
損承知音頭とつる祭好き

三枝子 赤木和子 砥代 克枝 兼治郎 京子 佳雲 弘朗 實島

損ばかりしていますのと惚れている
生き残るための握手だ損はない
のつべりの損恐ろしい目鼻付く
損は損 止まり木はもう棄てました
やり損じやさしく許す期待感

三島 五島

損損とのどの渴きを訴える
再起する拳に損をにぎりしめ
凡妻の凡夫の損をあきらめる
死に損と思つてならぬ九段坂
シナリオにない損をして迷う鳩
損なんぞかかわり知らぬりんごの芽
廻り道 花の香りに乗り遅れ
ふんわりと損もとばけた社交術
下積の損な立場で束となる
八起して損とりもどす旗をあげ
一銭も損はしないと言う男
その日の損は夫婦茶碗に割って呑む
算盤に損の珠ない母性愛
ドライフラワー損を承知の火をもやす
一本の損も吊るさぬ女の部屋

文平 洛醉 耕花 正敏 雄々 實 泰世 悦子 さと美 みどり 七面山 はるお 木魚 雄々 日枝子

佳

人のため損は承知と雉子が鳴く
損の種蒔いて他人に慕われる
損してもこだまは返す母の山
大風呂敷につつんで損を捨てにく
損をした解を善人自笑する

章久 豊 ちかし 日枝子 雀踊子

損知りつ 驕る大樹の影をよけ

ゆう也

人類の大損失と泣く弔辞

本蔭棒

損のカケラを波打ち際で選り分ける

はるお

軸

とても綺麗な月だから射損じる

柳界展望

集録・板尾岳人

雅号記載・締切5月10日

投句料千円

投句先〒915武生市松森町34

川柳韻社

★第2回誌上川柳大会

兼題「力」2句吐

選者〓佐藤良子・小松梢風

今野一城・片方栄坊・中林

瞭象・菅原一宇・ちば東北

子・新藤孝太郎・仁田耕一

以上9名による共選

参加料千円 〓切6月5日

投句先980仙台市大町二丁目

一の二〇 仁田方

川柳宮城野社・誌上大会係

★へきずな〓100号記念・川

柳誌上大会

◎兼題「木」樹でも可

〓切6月15日2句吐

選者〓齊藤大雄・藤島茶六

渡辺運夫・野口初枝・去来

川巨城・時美新子・齊藤正

一・池田可宵・藤田きよし

園田逢春

参加料千円 締切6月15日

投句先874大分県別府市東莊

園町四丁目二組

川柳きずな編集局宛

★寺尾俊平句集「葦川」発

刊記念川柳大会

日・7月13日(日)9時開場

所・岡山ロイヤルホテル

柘馬40分在野学/石田柘馬

疵(傷・創) 藤川 良子選

諸君 小島 蘭幸選

濤(波・浪) 海地 大破選

夏よ (当日決定)

白い風景 渡辺 千代選

燭 八木 和尾選

蒼天 酒谷 愛郷選

權 森中恵美子選

各題2句・締切11時半

会費千五百円懇親会五千元

★京都塔の会春の吟行句会

日・5月18日(日)

所・梅宮大社門前AM11時

会費四千元(昼食含む)

申込み4月30日迄申込み先

601京都市南区西九条開ヶ町

41-1松川杜のまでtelにて

も可〓075-6811-5

067

兼題〓札・結ぶ・口笛

▽同人消息△

★藤島茶六日本川柳協合理

事長の叙勲祝賀会が3月30

日東京半蔵門会館に於て280

名の出席を得て開催された。

堀口塊人遺句集

「つくも帖」

故人が還暦を記念して作られた和装の自筆句集を、このたび塊人七回忌を記念して発刊。塊人六十一句、未亡人富未女三十八句が掲載されている。

ご希望の方は左記へ(頒価千円)

〒533 大阪市東淀川区豊新一一〇一

清水 健司

本社より西尾栗主幹をはじめ野村太茂津・高杉鬼遊・藤村メ女の諸氏が参会、祝福された。

★東野大八氏は3月30日米子市での鳥取県川柳大会で「これからの川柳」と題して講演をされたが、前日鳥取市の故森田茗人、河村日満両氏の仏前に合掌、冥福を祈られた。大会後、美保の関を観光、帰途二夫妻で高野山に参詣、河内長野市の南天苑で薫風・岳人・泰子・美緒氏らと歓談された。

★同人春城年代さんは60年

★同人松原寿子さんは、とさせん準賞を受賞。5月11日の東洋樹賞贈呈川柳大会で表彰される。受賞作品は「みどりへみどりへ転がる謎の自由など」。

★毎日とつとり柳壇年度賞

に次の作品が秀句。佳句に入選された。

政岡日枝子

▽お便り△

■生々庵先生の悲しいお報せを聞いて、しばし啞然としてしまいました。川柳塔

(林 瑞枝)

吐くぞ 渡辺 晋句 3月号の一ページの十二単

■青森もやつと春が来まし

かりっかりと胡桃のよう 層に人生の無常を感じさせ

た。市街地はほとんど雪が

新同人紹介

雪によるもので測候所はま

新開 千代女

だ積雪が60糎ありました。

片岡 智恵子

しかし4月15日からは十和田へはバスが開通し月末は

松本 今日子

弘前の桜が咲きます。

原 仙波

■皆様方からはげましのお便りでいち早く火災の恐怖

▽訂正△

(八木 千代)

■4月号16P7行目「酒ぐ

句の「退職した日から時計が狂い出す」の作者は浦辺

第10回 全日本川柳大会

日時 昭和61年6月8日(日)午前10時開場
場所 大分県別府市南立石二四一七

鶴見園グランドホテル

宿題 第一部(事前投句5月10日締切)
島 藤原時化緒 選
勝つ 仲川たけし 選
開く 内藤 凡柳 選

投句先 千五四二大阪市南区谷町七丁目一ノ三九
新谷町第二ビル二〇六号

宿題 第二部(当日出句・締切12時)
振替口座 大阪七三三五七五
日本川柳協会大会係
TEL (〇六) 七六八二二六二二

宿題 第一部(当日出句・締切12時)
生さる 野村太茂津 選
著 黒田 高司 選

道 齊藤 大雄 選
各部各題共二句、未発表作品に限る
池田 可宵 選
当日出席者の会費二、五〇〇円(昼食
記念品代共)

表彰 文部大臣奨励賞、川柳大賞は大会賞受
賞作品の中より後日、日川協理事全員
の選考により決定される。

中島生々庵追悼

本社 四月句会

四月七日(月) 午後六時

メンズフアッションセンター

前日の春めいた陽気も一転、冬に逆戻り。そういえばお通夜の日も激しい風雨であつた。生々庵先生のきびしい一面が改めて憶い起された。

黙禱の後、故人生前声をカセットで偲ぶ。NHK川柳座談会の一コマである。栗主幹のおはなしも今日はやしめりがち。さいごに中島小石奥様が「病臥中常に心にかけていたのは川柳塔の行末のこと。今日の隆盛に定めし安心してゐたと思ふ。これからも益々発展されることを亡き主人ともどもお願いしたい」と挨拶された。

席題の披露が終わったところで60年度各地柳壇賞(田中正坊氏)の表彰が行われた。呼名賞は稲葉冬葉、松尾柳右子、遠山可住の三氏。月間賞は長谷川春蘭氏が獲得。

(進行)天笑 (受付)冬葉・月子

(記録)射月芳・健司・山久

出席者―笛生・武庫坊・冬葉・敏・葉子・

紀雄・天笑・月子・千代三・幸・太茂津・きみ・作二郎・千寿子・寿馬・水客・紫香・杜的・白溪子・凡九郎・春蘭・登志代・美智子正坊・重人・郁榮・三男・英子・メ女・いわゑ・はつ絵・みつ子・山久・美代子・恭太・文秋・信治・史好・洋敏・射月芳・小路・頂留子・あいき・吐来・吸江・英千子・喜風・度・東雲・鬼遊・蕉露・章久・悦郎・眉水・形水・狸村・三十四・隆二・池田寿美子・柳影・金太・満津子・道子・勝美・トメ子・規不風・栗・庸佑・柳宏子・藤子・智子・薫風・泰子・萬的・柳伸・柳右子・可住・愛論・憲祐・安藤寿美子・古啓・健司・楓楽・寿美・与呂志・岳人・雀踊子・一二三・博泉・寿子

席題「酔う」

亀山恭太選

陶酔をさせてブルーブル美術館
マルクスに酔った日もある青春譜
とうとうと自分に酔っている弁士
褒め言葉に酔って財布を空にする
花に酔い眠り羅漢のあとけなき
娘を盗られ何んの祝いぞ酔いづれ
送り出すまでの酔いだと知ってるが
はよ酔ってしまわなこわい人が居る
零開気に酔っている罌に落ちている
ほろ酔いの女は嘘を美しく
うれしい日子持ちしやも酔っている
いつものが酔って今年も花が済み

寿美 楓楽 頂留子 みつ子 勝美 章久 天笑 射月芳 武庫坊 可住

行きつけの店で矢張り酔うと決め
酔眼でしっかり勘定書を割る
千鳥足となりの大に吠えられる
花見酒酔々さんがふと浮ぶ
少し酔ったとこでビタリと決まる筆
花見酒酔うてはおれぬ敵の中
風向きが悪そうになり酔いがさめ
二次会でお役ご免の幹事酔う
酒造家に生まれて酒の糟に酔う
もう酔った酔ったとはすタイミン
春や春下戸にすまない花が咲く
酔うてくる男にあげる肘鉄砲
二日酔いつづく男はバカである
こんなこと少し酔わんと言えすか
最後まで酔わぬつもり床柱
酔ったふりして手練手管を見ていよう
二日酔い時計が遅れてはくれぬ
断酒会酔うたしくじり語り合い
終りまで聴いてくれない酔っている
酔う前に聞きたかったとすねられる
晩年の酔いさみしさを深くする
動物園の花見にんげん酔っている
酔いさます庭へもついて来る女
酔い少し腕でも組んでみましようか
小瓶で酔うてると小金貯めている
したたかに酔うても持論だけまげぬ
自信家でいつも自分に酔っている
うどん屋で名刺を二枚呉れた客
鬼の首とった日酔いがすぐまわる

愛論 安藤寿美子 岳人 あいき 可住 美代子 吸江 白溪子 冬葉 愛論 憲祐 智子 文秋 白溪子 幸 郁栄 文秋 悦郎 天笑 智子 作一郎 紫香 泰子 英子 信治 楓楽 岳人 楓楽

酔いしれて哀しい鬼を眠らせる
通夜の酒遣影がくしやみする話

席題「天」

遠山可住選

お天道さまが見てる真つ直ぐ歩かねば
緑踏む素足になごむ春の天

ハレーすい星でも飛びそふな露天風呂

天井で買った株券持てあまし

天分を引き出す腕の沓えを見せ

天の一画すでに予約は出来ている

天恵を味方に父祖の田を守る

限られた天を眺める井の蛙

桂浜竜馬は天へ語りかけ

お天道様は見捨てはしないこぼれ種

その金に手をふれるなど天の声

天を仰いで幸せになと気付く

天命を信じて深くなる眠り

子はいつか親と異なる天地持つ

雷が少し苦手を楽な天家

春の天気は花を妬んでいるのだな

晴天の空へふところ淋しすぎ

あせらずにゆつくり来いと天の声

ローン終わると天国が見えてくる

天職と思えと暮しは厳しすぎ

天運とすぐ諦める泣き黒子

天を欺く穴をせつせと掘っている

天敵がいるから調和とれている

雑木林の天は親しみやすい空

夕焼けは天のお化粧かも知れず

はつ絵
恭太

喜み

悦郎

恭太

三男

庸佑

智子

憲祐

三男

三十四

信治

章久

智子

郁榮

楓榮

月子

幸

愛論

紫香

幸

悦郎

千代三

一二三

美代子

藤子

白漢子

天に神いらしひばり逢いにゆく
天候は気にしていいないハネムーン

晴天へ勇氣が二倍湧いてくる

天佑を信じた頃の旗を振る

物干場いっぱいにある妻の天

天と地の違いは後で判りかけ

天才に遠くうちの子よく食べる

噴水の穂先が躍る春の天

天からのさすかりものだ低い鼻

夏の天女の肌は熟れている

有頂天になつて人へ眼をそらす

天ぶらの揚つた頃に恋も冷め

天と地の間で石を積んでいる

天真爛漫きのうも今日も恋をする

この虫も天のゆるしを得て生きる

運の良い男で天が味方する

兼題「楽」

金井文秋選

齒に衣を着せぬ女で楽な天家

定年になつて楽しい散歩道

神はとけ人間楽にはしてくれぬ

病院へ行く楽しみが一つ出来

一ト時の楽しさ白髪染めながら

一生を楽の出来ないローン負う

夫にはすまぬが楽しいことが出来

指切りで少女楽しい別れるする

楽々と生きてるように蝶が舞う

二度の職気分が楽で肥えはじめ

赤門を楽に潜つてゆく家系

度
柳右子

登志代

水客

智子

月子

重人

作二郎

三十四

冬葉

水客

寿馬

幸

水客

安藤寿美子

可住

可住

鬼遊

凡九郎

可住

可住

笛生

寿馬

杜的

安藤寿美子

白漢子

芳子

ライバルへ白旗出して楽になる
楽な天家善人の顔捨てていず

楽をして儲ける様に宗旨がえ

楽隠居出来ぬ氣質で若々し

楽しんで彼の小指をもて遊ぶ

今に楽させてあげると腰嚙じる

楽園は我が家にある夫婦酒

楽ばかりして初産あわてさせ

安楽死したくてまめに生きてます

楽でない暮らしだけれど花は活け

とりどりの靴が溢れて楽しい日

ライバルは楽々跳んだように見え

苦と楽を足して夫婦の味が出来

寝ることが楽しみという父の皺

気苦労が絶えぬ隠居が楽に見え

独身の気楽は飲めるだけ稼ぐ

年金の枠で楽しい夢を見る

楽な天家妻の苦労は知っていた

生きているのが極楽酒うまし

気楽には翔べぬ運命の千羽鶴

中島家ご遺族より

お供養として

金一封拝受致しました。

川柳塔社

形水

水客

天笑

弘生

紫香

柳右子

武庫坊

月子

月子

楓榮

登志代

射月芳

隆二

吸江

萬的

千寿子

章久

柳宏子

吸江

英子

不器用な善人楽しみ一つだけにする
 楽隠居どころか嫁さんまだねんね
 ばやいても結果は同じと楽天家
 一ランク下げると楽に戦える
 へボ将棋負ける方もよく笑う
 楽天家特急券を買いわすれ
 ケチでよし楽に儲けた金やない
 楽天家同士で休肝日を忘れ
 悟れない頭氣楽に生きている
 楽な仕事ですが儲けも知れてます

兼題「芝居」

阿萬萬的選

与呂志 あいき 紀雄 太茂津 憲祐 岳人 恭太 年代 可住 文秋

早とちりひとり芝居でくたびれる
 辨慶の睨みの奥は燃えている
 ドサ廻り泣かす子役を一人連れ
 村芝居日焼けのお夏清十郎
 看板女優も乳のみ児がいるドサ廻り
 最後には正義が勝った紙芝居
 芝居から帰った妻がよく喋る
 科白のない芝居をととき妻とする
 満腹になると芝居にあきてくる
 一芝居打った疲れが胃に溜る
 人情の残る里縫う旅芝居
 お芝居を見逃してやる場時計
 この町の古さを見せる芝居小屋
 湯の宿に芝居のような臘月
 役者馬鹿黒い噂へ顔を出し
 傷つけぬための芝居の筋を書く
 中幕を合図に芝居から逃げる

射月芳 池田寿美子 メ女 月子 寿子 博子 智子 雀踊子 洋敏 吸江 正坊 吐来 紫香 藤子 一二三 満津子 冬葉

花嫁が芝居がかった色直し
 春なのに芝居どおりに行かぬ恋
 独り芝居自分の馬鹿さ見てしまい
 雨戸繰り一人芝居の幕を開け
 中ほどで筋が違った夫婦劇
 若者が里に芝居の芽を育て
 出不精の母をつれ出す芝居うつ
 病院へ口裏合わしている芝居
 芝居柄が入って老優の腰かとのび
 お芝居が上手になって母を見る
 柳一本お吉が泣いている芝居
 襲名の重荷へあとけない子役
 ガスタンク一人芝居がうますぎる
 夜の部の子役二度程あくびする
 土産屋に猿芝居さす京の寺
 政治家の芝居やさかと聞いておけ
 歌舞伎座の帰り芝居に触れず食へ
 ぜんざいを食って別れた芝居好き
 芝居気を買われて自信取り戻す
 他人から見れば喜劇の痴話喧嘩
 子にもらう中座の午後の指定席
 おとばけも芝居も妻が頼もしい
 補聴器の感度を上げて泣く芝居
 本当の涙を費う村芝居

敏 柳右子 文秋 正坊 吐来 喜風 武庫坊 柳宏子 美代子 英千子 寿馬 美智子 信治 憲祐 可住 冬葉 紫香 水客 幸一 笛生 きみ 重人 萬的

兼題「生」

大坂形水選

囀りの窓から今日を生かされる
 美しく生きたと思う花あかり
 保護色の淋しさ纏い生き残る

きみ 美智子 古啓

いずも創立60周年

記念川柳大会

日時 昭和61年5月25日(日) 11時
 会場 出雲市商工会館(商工会議所)
 出雲市駅から徒歩20分。
 バス同駅10時発松江温泉行に乗り、
 郵便局前下車

お話 兼題 実年 黒川 紫香
 目標 西尾 栞選
 確実 野村太茂津選
 腹実 小林由多香選
 バランス 柴田 午朗選
 初夏 八木 千代選
 各題2句 津川 紫助選
 席題 12時締切
 11時半締切

◇投句用紙適宜 5月22日までに左
 記へ(投句料五百円)
 〒693 出雲市松寄下町二八四
 古岡きみえ方川柳大会係
 振替松江六一四七一八番

会費 三千五百円
 (会報・昼食・祝宴費共)

主催 いずも川柳会

コップの水に差した桜が生きてくる
 慎ましく生きてる母のもめん針
 生と死のはざまで揺れる小さい胸
 少しだけワルにならねば生きられぬ
 桜の下に立つと女は蘇生する
 春の雲谷内六郎生きている
 生活が荒れてみながら遠ざかり
 生涯を額の言葉に生きている
 生かされと夫婦で挽いている屋台
 生かされる限りは核を憎みきる
 どう進もうとも生かされるはれぬ
 生きている五欲煩悩それも良し
 透き通る水の生命を犯される
 仇討ちは生きているので続けよう
 生かされている自惚れの靴を履く
 生きている限り戦の物語
 一筆でよし富士山が生きている
 ピラミッドの先で先生の目が生きている
 生ミルク若いパワーが走りだす
 束の間を生きてまあるいしゃばん玉
 自画像を真っ赤に塗って生きている
 人生をキャンパスとして生きてゆく
 生か抜いた苦勞に解放感がある
 沈黙の中で生きづく寒卵
 冬の蚊よ俺もどっこい生きている
 淡々と生きる寝釈迦が見えてくる
 病院が満員生きているむずかしさ
 生き延びて噂の種を寄せつけず
 転覆の船底生のノック聞く

英壬子 藤子 金太 雀踊子 一二三 鬼遊 月子 寿馬 三男 天笑 泰子 古啓 岳人 吐来 小路 杜的 規不風 郁榮 憲祐 柳伸 天笑 悦郎 泰子 史好 度 笛生 寿子 信治

野良犬も生きるぐらいは生かされる
 朝起きてお粥が好きで生きている
 生き馬の目を抜く人が座禪する
 生き様が五百羅漢の顔にある
 花になる赤い絵具は生き残る
 プランコでゴンドラの唄生きている
 生き恥のひとりに花が散つてくる
 湯がたぎる人の生死にかかわらず
 年金手帳の重みを抱いて生きている
 中流の真似ごとをして生きている
 どん欲に生きて仏の顔つくる
 生々流転春はあくびを噛み殺す
 生きがいを知る老兵の靴が鳴る

兼題「母と子」 橘高薫風選

鬼遊 岳人 紀雄 章久 古啓 新造 作二郎 水客 一二三 憲祐 失名 作二郎 形水 一三 洋敏 寿美 英子 春蘭 トメ子 太茂津 弘生 柳右子 敏 章久 洋敏 健司

カタカナで母ちゃんおりますように
 再婚と思えぬ母と子の会話
 子に生きたそれだけで母心満つ
 母の愚痴子供が聴ける齢になり
 この母にしてこの子あり立志伝
 よもぎ摘む母と子がいる父の視野
 母と子を結ぶと俺は第三者
 母と子の合せ鏡がちよとずれ
 母と子の指切り見てたお月様
 母と子のうしろで男の靴を履く
 母さん居ればひとりでも遊んでる
 子に両手つかせて母も涙する
 母は子に生涯縄を綱いづつけ
 母と子に政治冷たいものと知り
 雪の日の言葉となった母子家庭
 聖母には遠いが話わかる母
 子に持たす荷物は母の愛だろ
 母一人子一人部屋灯を分ち
 母乳やる悲母親音の貌をして
 受験番号見つけた母子撮される
 叛く子が不憫でならぬ母の指
 母さんはいえらと言わぬ車椅子
 母と帰る花かんむりの王女さま
 孝行の真似ごと母を笑わせる
 母子像に平和と題がついている
 絵馬に見た母の折りと子の決意
 憎しみを慈愛も絆鬼子母神

(清記・楓葉)

頂留子 白溪子 蕉露 文秋 泰子 可住 美代子 隆二 可住 満津子 愛論 藤子 鬼遊 楓葉 幸 吸江 金太 栗 雀踊子 小路 小絵 水客 みつ子 春蘭 蕉風

坂道の上下り刺の花

原因は派手な夫婦の使い過ぎ
作業着が素通り出来ぬ赤ちようちん

坂道を登り切った海に出る

楽しみを芽を押さえてる北の風

坂道の曲がりて止まる万歩計

夢を絵にする坂が急になる

盛酒を派手に見せる菊の花

窓際の椅子に一番陽が当る

実年の鎧が重くなる夕陽

春が来るのが楽しみな壺の中

春の陽を最初にもらう大ぶくり

派手好みの女が画いた設計図

焼け石を抱いた女が陽だまりに

表札を磨けば春の陽が当たる

坂道の途中の夢はでっかいぞ

変人に逢える句会が楽しみだ

百枚の皿より派手に光る指

石を投げれば大学出に当る

金色の旗をあしたは陽にかざす

陽の当る部屋でドミノを崩せない

逝くときは派手な辞世を詠んでやる

約束の日に限って派手に雪が降る

東大阪川柳同好会

ブランデーグラスに写す過去の女

親交も越えてはならぬ奥座敷

日本の酒を吸っては地鎮祭

あいりんの夜を慰めるコップ酒

祝い酒母もちよびり頬を染め

発車ベルやり取りに出す一合瓶

宮水が銘酒醸す灘五郷

寿朗

碧水

喜美子

ゆり子

秋人

康子

観洋

みなと

次男

雄々

明々

とお

秋女

御前

やえ

文子

完司

瑞枝

石花菜

千代

荒介

独歩

苦句

齊藤三十四報

公久

章一

慶三

柳影

覺然坊

頂留子

勝美

杜氏の腕待つ灘郷の酒の味

晩酌の日本酒暮しも板につき

三味線の音色に日本酒が落ける

オットットチョコクでお迎え申します

居酒屋のオデンを煮えてる日本酒

たかが梅酒と侮って二日酔

食中毒輕いのは梅酒で治り

夏の下痢祖母の梅酒に救われる

年輪の味まろやかなり梅酒飲む

五十組纏め上げたが自慢です

カクテルの甘いひびきに酔う女

舶来の見栄が高価にする洋酒

春風に選抜ワツと声あがる

尼崎いくしま川柳会

角野かず子報

こしひかり十年経って艶が増し

移り香を惜しみて枕干さすおく

低い枕で桃源境の夢を見る

剃りあとの青さ女を傾かせ

母の手に触れて落ちつく水枕

二次会流れてまかす同窓会

日日好石のぬくみと陽のぬくみ

剃りあとの青い男の糸とんぼ

叱れたら逃げておいでと孫に言い

強情な意地を通した日の枕

道連れが妙に嫌った昼の月

マンホールから首が出て雪が降る

柵の枝で鰯がにらんでる

流れ藻の枕は故郷の夢を見る

青い目の孫もいますとこだわらず

ファミコンへ親が熱中する夜長

喜風

悦郎

文秋

凡九郎

雀踊子

愛論

綾珠

弘生

春蘭

山久

右近

美子

雅風

三十四

美代子

みち子

玉子

定人

礼子

山久

水声

正一

伊三郎

かすみ

歌子

牧郎

保蔵

春子

年代

佳秋

さまよえばあ一杯のコップ酒

人妻に真昼の嘘がきりだせぬ

男の子五人育てた母の皿

青空へ母の祈りを描いている

米とぐ手小さく見えた寒の入り

青インクこぼして手紙進まない

生きている限り飽かぬはお米だけ

なんとなくアクビのもれる終い風呂

白桃の傷みを知らぬままに売れ

音痴にも思い出があり好きな歌

粗品貰うて帰りに布団買わされる

バレンタイン板チョコ一つ孫がくれ

良い人に巡り会ったが人の妻

割れた皿独り言して継いでいる

米糠で磨くと姑が譲らない

老いの日のうれしさ明日の米を買う

岸和田川柳会

妻の仕度でテレビドラマ一つ見る

ばあちゃんもおしゃれしている春うらら

背伸びしてその足許を見失い

飲む程に意気投合の屋台店

寝込まれた嫁に戸惑う台所

産室の一声父になる自覚

雑踏へ声が届かず見失い

ねむそうなマイクの声でサオー竹

妻と来た雪の津和野と雨の萩

大雪に浮気がばれた旅の宿

飲むもよし眺めるもよし雪月花

延着は雪を被ってすべり込み

落ちついて一九は他人の火事

声変り自立の道は遠からず

静夢

郁榮

かず子

貞子

君子

ときお

すえ

文夫

良征

一郎

幸子

かね子

幸次郎

伊升

サトエ

はつ絵

武助報

富志子

さよ子

ひで

希久志

こう

佳生

春晴

勝一

弥村

射月

芳ゆづる

楽天

寿美子

淨財に寺金色に粧り

独身貴族にも憧れて適齡期

大正のロマン夢二の絵に貰う

血圧が感じ取つてた今朝の雪

川柳高知

かなしきは鏡の中の素顔かな

大病をして人間が丸くなり

耳たぶに冬を集めて朝を行く

柙におもつ差別の朝を出す

京みやげもらつて京の話聞く

氣に入つた絵本が誘う子の寢息

両眼で見るから欲が深くなる

五年先夢見て桃の苗木買う

買いたたく術も覚えて主婦守る

偽物を買つてだんだん眼が開き

バーゲンの買う氣を煽る時間切れ

淋しさをいやす買物高くなり

急行券買つてふるさと夢に見る

世渡りにたけた女の買ひ上手

むらくも川柳会

ロボット化姿のかわるひな祭り

好き嫌い言うてる中にトウが立ち

殻ぬいて蟬が大人になつてゆく

子を甘く育ててからの悔い疼く

苦勞して甘い辛いもの知りつくし

鬼の面脱いで祝儀の酒を酌み

嫌われぬように余生へ徳を積む

言う程に嫌でないらし夫婦仲

お世辞など言えぬ本氣の恋ごころ

脱いだ靴揃える孫をはめてやり

白酒にはんのり紅くひな祭り

川竹

松風報

三吉

とみ子

佳風

幸泉

房恵

春枝

功

竹萌

朱坊

弘生

節子

菊野

松風

曉耕

明報

明朗

よし子

秀子

千里

ヤス子

鶏生

みどり

孝華

林蔵

吉野

白光子

武助

甘平

操子

三吉

とみ子

佳風

幸泉

房恵

春枝

功

竹萌

朱坊

弘生

節子

菊野

松風

曉耕

明報

明朗

よし子

秀子

千里

ヤス子

鶏生

みどり

孝華

林蔵

吉野

定年を前に疲れた靴を脱ぐ

内裏様にあやかれ娘よひな祭り

お世辞でもはめてくれればいい気持

草餅を供えて祝つひな祭り

春の陽は母の温みに似て甘い

甘すぎる言葉にあった落し穴

孤児たちの夢は祖国の土を踏む

ワイワイと上る風にも夢がある

何はともあれ新春の夢をかけ

夢に見る父のやさしい後影

夢に出た亡父は僕より若かつた

夢ばかり追つて真実見失い

よい夢の続きが見たくまた眠る

今年こそ夢を抱いて六十年

子の夢は親を大きくかけ離れ

初夢は宇宙を飛んで目が覚める

夢にでも渡つてみたい虹の橋

貯金箱夢がいっぱい詰めてある

メルヘンへ誘う孫の絵夢の国

少年の夢途方もないことばかり

来年へ続くドラマに夢がある

酔っている酒二次会へ泳いでる

雪解けに車のぬれた傘の楯

卵酒娘がすすめる風邪の床

風邪ひくなこちらは雪と電話口

かこつて呼べば集る酒の友

熊本川柳会

有働

芳仙報

結論を出せば夫婦の灯が消える

末吉をしかと小枝に結びつけ

連作に疲れた畑の私語を聞く

ジャンプした夢で義足はよく眠り

和幸

竹乃

武衛

富子

正朗

芳子

昌子

雪路

巡歩

なつえ

清祥

克子

峰雪

よし美

三喜子

幸子

ふみ女

由郎

章子

蚊声

ゆき子

節江

寿

ふさえ

八重子

保子

百骨

康子

真吾

月洗

次々とオマケ取り出す叩き売り

B面の人気が売り上げ新記録

本誌より付録がでかい顔をする

減税を付録のように選挙前

花むこが付録に見える披露宴

二次会が付録のように行くと行く

川柳しんぐう

歳月がいつか尊い劇になる

観劇のあとしばらくの夢心地

悲喜劇があつて女は強くなる

栄転左遷春の交替劇をみる

夫婦喧嘩おろかな喜劇くり返す

メダリスト金銀銅の顔をする

火の車こなしした妻の金メダル

一線の兵にはメダルは届かない

胸で切るテープはメダルの音で切れ

栄光のメダル日毎に重くなり

疑いを持たせぬ話術詐欺師持つ

疑わずついて来るのは味方です

疑えばだんだん筋書き出来てくる

疑いを晴らす長い坂

疑えば底無し沼になる恐さ

済んでからこれぞと思う知恵浮び

まだ済まぬ義理で家計簿もめている

何となく上手な話で済ませる

北方領土へ解決済みというソ連

遅刻でも顔出し義理が一つ済み

川柳わかやま

春一番無口な山が喋りだす

春一番畑仕事にカツを入れ

春一番壁の白さが目立ちます

川上

溪水報

昌子

しげお

平和

幸

大輪

とよ子

三代

司

忠雄

金太

恵美子

紫香

まさ子

道子

達子

えつこ

利次

吉加

十郎

堀端

三男報

栄美子

隆積

方円

昭代

アヤ子

宵草

一乗

芳仙

昌子

しげお

平和

幸

大輪

とよ子

三代

司

忠雄

金太

恵美子

紫香

まさ子

道子

達子

えつこ

利次

吉加

十郎

堀端

三男報

栄美子

隆積

萬的

春一番コート脱いだり羽織ったり
春一番待つて時きたい種がある
春一番のような男が跳んで来る
非常識な下駄がきちんと置いてある
非常識でどこか淋しい海だった
雨やんで美德の傘が返らない
公園を犬のトイレとして平気
非常識な心中舞台上で美しい
常識を時々殺して生きてます
常識に妥協はしない天才児
非常識罷り通った政治駅
死ぬ死ぬというで死んでる非常識
非常識表は明るい大通り
招かれる傘の広さに甘えとく
春招く思慕ふくらます猫柳
お招きの衣袋に迷う小半日
招かれた女の暗着にある戦
春招く蝶が二匹で川を越え
父の忌を招くランプが見当らぬ
窓あけて暮く春を招きいれ
遠慮する母を招いて桜鯛
式場の蔭で招かぬ人が付つ
応接間に招きやんわり異動聞く
招かれて花の集いに酔っている
従いてゆかねばひとりぼっちの海になる
ひとりにはさせない愛の糸がある
子が杖を一本置いてみんな去り
輪の中でひとりぼっちの影という
我を張ってひとりで城が建ちますか
気がかりは柩を担ぐ子がひとり
生き残りゲームのひとりになる不安

英子 正子 太茂津 美智子 狂虎 忠雄 登志代 桂香 凡九郎 武雄 正博 道夫 づる子 稚代 柳宏子 白光子 雀誦子 紫香 郁榮 天彦 雅子 康勝 輝子 文蔵 幸 緑良 信秋 光代 豊太 芳朗 克子

ひとりでは来るとこでなし中之島
仏壇とテレビへ傾いているひとり
妥協せぬひとりの影の誇らしさ
一人乗り一人が降りる赤字線
豪邸に老婆がひとり残される
若き一滴ひとりの視野へ抱き続け
ひとりと言言えは心が決まるかも
ひとりになると金を数えている女
川柳化粧槽 植村客遊子報
抱きくせがつくと叱って抱き上げる
酔ったふりママは見抜いてはつとかれ
北風の坂を計算した歩み
盆栽の樹影確かな天地人
独り酒愚痴は魚の骨にさす
孫連れて歩けば土手の猫柳
寒椿の紅早春の夢を抱く
体調を騎手に伝える足のけり
欠席をした娘が噂の種にされ
国なまり聞いて親しい友となり
角もどれ何時の間にやら老いの坂
冴えわたる寒行の声小正月
折込みで今日のおかず考える
子の甘え叶えて嬉し古稀の母
仏壇へ留守を頼んで旅に稀る
三ヶ日TVに飽きて寝正月
ばあちゃんと言われ財布の紐ゆるむ
振り向けば明治男は後がない
麻雀の強さへ出世ついで来ず
川柳ささやま 脇田 米朝報
病院の窓から春がのぞき込む
妻病んで窓の灯りへ黙り込む

鬼遊 きみ 公子 守夫 照子 寿子 千寿子 三男 岳詩 大鷹 実男 葉香 越山 秋月 紅月 礎石 悲子 柏秋 みつこ サワ子 とし 輝月 和子 みね子 まさ子 永楽 客遊子 千代子 和子

絶食に果物籠の見舞客
したい事山積みにして床に伏す
病む人を案じ車のおそいこと
これ以上盛るとこぼれる母の愛
弔辞手を盛りのは泣き崩れ
雪もよし熱燭一本夕餉盛る
愛の詩齡を忘れて夢を盛り
喪が明けた朝の鳥居が近くなり
大鳥居二月の風に絵馬が鳴る
神主も鳥居の外で脱ぐ仮面
身を飾るタイヤの粒は小さくとも
着飾れば華麗な欲が追つかける
ふる里へ飾る錦の汗を積む

金之助 靖子 きし江 可住 米朝 文平 富美 ゆう也 やよい つや子 法斎 ひか平 越山 テル

佳句地10選 (前月号から)

田形美緒選

菜の花のそだけ音の無き世界 並鳴恵美子
福豆を取り合う程も福がなし 三四子
騙されていながら上手だなと思う 春子
笑うとき泣くとき和服にある袂 富久一
俺よりも上手に踊る影法師 文治
末っ子の度胸序列を狂わせる 園よし子
しぶちんの或る日おんなに奢ってる 水声
この先は飛び付く術しかない娃 愛子
急がねば次への恋が待っている 河原恵美子
正月はいいなと思うお年玉 鉄二郎

病名を伏せて話題のない見舞い

前歴を語る眉間の向こう傷

あの道もこの道もみな通ったけど

低姿勢で妻おくりだす申告日

広場にはみんなであうたう歌がある

連帯も孤独も溜めていたる広場

感情を素直に出して嫌われる

遮断機の前でタバコに火をつける

死を前にどうのこうのと言う遺産

あなたと逢う時は外す腕時計

気まぐれな夫が焼きいも買ってくる

万歩計広場をゆっくり歩いてる

雪がふる静かに過去を消すように

その範囲老父母にまかせた勝手者

肩の荷を下ろして帰る救急車

春はピンチ子供への遺書をどう思う

雪国は哀しいまでの白に逢う

川柳塔唐津支部

大還暦辞書に残して翁逝く

目標へ寒夜の窓の灯が消えず

雨降って女笑顔を取り戻す

止り木の灯りを消して主婦の貌

船呑んだ牙が綺麗な波の華

頂天に着かぬ推理のシャボン玉

手を抜けば血が止まらない斬られ役

博士号高島田まで伴に連れ

入試にもブービーながら滑り込み

天満宮お礼まいるの梅観酒

しまったと訣れて思うことばかり

川柳はびきの

田中 隆二報

亡き母の歳を追ひ越し初詣で

隅谷義一

文平

新造

博子

志津

千秀

百合子

靖子

枯梢

曲手

俊子

三枝子

善太郎

山久

隆積

歌子

作二郎

紫香

久保

正敏報

久仁於

多駄子

今子

邦子

高明

虹汀

四郎

旭恒

あき

朴竜

正敏

隅谷義一

初仕事去年の顔がみな揃い

年寄りが居るから餅を小さく切る

振り袖はいか焼く匂い掻きまぜる

寝不足の顔を朝餉の湯気が撫で

柏汁をすすする男の赤い鼻

カラオケのお世辞も言えぬ歌を聞く

買物はテレビで決った晩の菜

あれこれと迷って祝い金にする

父に似て律儀者だと母は言い

晴れ舞台終ると美人並となり

実年の恋の寄り道縄のれん

湯舟から日の出拝める素晴らしき

厄除けに背伸びしすぎぬ頼み事

栄転というが家計薄ピンク色

とり込みがあつて子等の気がかり

葬儀屋が只今マイクテスト中

神様にあらす行司の差し違え

生きがいなさとして磨くっている

高僧の色香で堕ちた八艘飛び

町会の文庫栄える古新聞

双六の上り六十で又延びる

保育器に愛がたしかに生きている

巣立つ子へ井戸の深さを教えとく

若返る本を読もうか春だから

ふるさとへ続くレールがちゃんざられ

欲を断つ禪のしびれがあるかぎり

変化球覚えて大人になるボール

父と子を結ぶボールが宙に舞う

決めグマのない人生で落ちこぼれ

跳ね返るボールを処生の範として

金貰った親切とんだ三枚目

石橋義一

蛙声

昭子

伴子

トミ子

多和子

清子

徳子

志洋

重樹

忠宏

美子

淑子

末一

満州子

喜代子

優

美代子

ケイ子

シメ子

司

みつる

隆

寿美

比沙胡

敏

胡村

弘子

吐来

昇

白水

石橋義一

三枚目気軽に声をかけられる

駆落ちの相手一座の三枚目

悲しさを顔に出せない三枚目

うたかたの恋を夢みる三枚目

三枚目一人居るので輪がなごむ

川柳藤井寺

赤木

和子報

つや

治美

須美

かな女

吸江

志洋

三郎

美代子

末一

作秀

与呂志

律子

本蔭棒

伴子

義一

哲正

みもの

うめ

秋園

たかし

清心

正人

ふみ

美佐

清子

花咲かす裏の苦労は知られない

それ苦手何もしないで逃げる人

三枚目気軽に声をかけられる

駆落ちの相手一座の三枚目

悲しさを顔に出せない三枚目

うたかたの恋を夢みる三枚目

三枚目一人居るので輪がなごむ

川柳藤井寺

赤木

和子報

つや

治美

須美

繁男

一屯

金太

葉子

隆二

和子報

つや

治美

須美

かな女

吸江

志洋

三郎

美代子

末一

作秀

与呂志

律子

本蔭棒

伴子

義一

哲正

みもの

うめ

秋園

たかし

清心

正人

ふみ

美佐

清子

花咲かす裏の苦労は知られない

それ苦手何もしないで逃げる人

お水取り米とぐ手にもやつと春
苦手など言っておられぬ今日の飯
幼な日の呼び名で交す同窓会
プランコがひとり揺れてる冬の音
喜寿ひとり雄々しく生ける初明り
お寒こ寒いよと街角石に折れ
喋ること苦手なババは落語すき
着実な伸びは軍備と税金と
咲いた咲いた噂の花のまつ盛り

菓の花句会

高杉

鬼遊報

円高が企業に喉に突きささる
和解した夜は仏の膝で寝る
ふところのカネが啖呵をきりたがる
無利息の金から義理が欠かせない
香典が重い好意に恐くなる
ふところをたまには子にも見せて置く
皆さんの意見引き出す叩き台
資金繰りたずねてくれるひとがいる
台降りて来たら私の背丈だけ
ふところに冷たい他人の金を抱き
痛いところ突かれたらしい捨てせりふ
齡と一寸の好意が身に染みる
ふところにないが故郷には山がある
和解せぬままに開いた梅の花
菜の花はきつと好意で咲いてくれ
雲行きがどうあろうともふところ手
釘一本打つに踏み台買つてくる
ふところにエース持つてゐる無表情
和解する言葉の刺はぬいてある
人生譜台本時どき書き替えて
和解する言葉湯豆腐動き出す

繁男 昭子 麻雄 和美 雅美 正枝 比呂志 和子 鬼遊報 幸生 武雄 曲手 弥生 柳宏子 柳伸 凡九郎 鬼遊 頂留子 勝美 射月芳 悦郎 美幸 春蘭 冬葉 章 雀踊子 シマ子 栗

打吹川柳会

奥谷 弘朗報

音楽は人の心をなごませる
音たてて食べない駄日本食
台所の音でわが家の朝となる
また事故かビーボー走る雪の中
海鳴に明日の天気を予測して
米を研ぐ音が明日へ望み盛り
こことはうらはらドアの閉まる音
お隣は何する人ぞ音でもめ
奈良朝の春の音聞くお水取り
神の橋渡る夜明けの下駄の音
パレードがすんで雑音落ちてくる
百点が帰つたらしい戸のひびき
春の音娘ざかりを確かめる
音立てす三猿守る老いの道
勢いに乗った太鼓に聞き惚れる
三カ月毎に年金温い音
一人寝に振子の音が語りかけ
骨壺を抱けば小さな音を立て
頂上へ音はとどかず闇を抱く

中西兼治郎報

亮二 三和 弘生 高代 梅朗 吉朗 道子 節子 善政 紫映 美智子 柳風 規仔 弘朗 康子 英治 佳女 雄々 文子 さと美 美津枝 君子 春子 為子 良江 宏子 綾子

白酒のおしやべりを聞く桃の花
情け枯れて桃も流れて来ない川
低金利寒いふところ尚寒し
ふところが温い男のおおらかさ
田も山も学もないので小あきない
桃の花よその娘はもうはたち

川柳泉尾

吉川

様々の賀状の虎を待つ炬燵
漁火の無事を祈つて冬の海
密室へファンヒーターは買うまいぞ
寄せ鍋をひとりですく風の音
迷つてもやがて抜け出る道がある
迷い鳥止まり木さがす冬の空
廃線のレールのはとり菊乱れ
トンネルを越えてレールは海へ行く
子離れの時期かレールが分かれてる
廃線のレールへ静かに雪が舞う
純行の妻のレールになじんでる
再婚のレールは過去を振り向かぬ
蹟いた数も風化の鶴と亀
平均に近い余命で年を越し
一粒の種が知つてる日の温み
張り替えた障子まぶし初明り
山茶花の障子に映えた花明り
廃案になつて嬉しい機密法
迷つてる心に甘言押しつける
福娘エビスの神も眼が迷う
明るさが取り柄で妻の団子鼻

Y・F・C川柳会

人見

光子 光子 兼治郎 登志実 鬼遊 寿美報 シメ子 三世 恭子 日出夫 満州子 多和子 淑子 弘子 伴子 文子 葉子 昭子 白代子 敏 道子 三千代 シマ子 義一 寿美 房州 泰州

遠足が乗り込んできた陽の匂い
ライバルの拍手で渡る丸木橋

橋開けて汽船を通す春の河
次々と孫の入学電話口

手術痕痛みが走る霜の朝

誓文に亡母とはずんだ心齋橋
旅たのしう似た話聞くもよし

サークル檸檬

田形

美緒報

マイベースだしぬかれても急がない
内裏離双子の真似もおもしろし

オマゴト人形の世話で親を知り
ぼろ人形離せず哀れ一人っ子

木偶人形べっぴんさんを選んで買う
久々にならぶ雌雄が頬を染め

手袋が人形に化けて売れて行く
胸疼く人形の私語もきいてやる

欠席の空耳楽し笑い声
鈴一つ人形一つ旅終る

尼崎 尾浜川柳会

春城武庫坊報

茶柱へ運勢を聞く朝の膳
大正が説いても昔の物語

節分に一人娘を奪われる
水泡の漫画なつかし今は古稀

朝からの手順くるわす今日も無事
弱い者同士が乗った泥の舟

大陸の泥に青春埋めたまま
針供養女らしさを取戻し

針箱が昔嘲をしてくれる
針の目が揃い逢者な母である

針持てば女は強い母になる
白髪がいつしか増えたしまい風呂

節子

たず子

よし津

モトエ

豊平次

紅葉

翠記

泰子

登美子

三四子

雅子

美代

智恵子

千代女

今日子

美緒

薫風

夢之助

江美

弘治

いわお

昌子

歌子

武庫坊

貞吉

すみ

礼子

十四郎

寅之助

縫い針とひとつそり暮らす母子手帖
子想屋のようにV2説いている

ため息へハッパをかける影法師
言わせたことがあるので酒を酌ぐ

卯の花句会

辻 白溪子報

割り箸の重みを知らぬ食べ残し
口で割る箸に夜なきの味がある

蟹すきの宿で箸か指になる
夫婦箸寡婦に想い出懸る

割箸に世帯預けて坂黙る
箸嚙んでそれから女黙りこみ

素うどんへ素直に割れる箸の音
もう故郷に戻る気はない夫婦箸

銀の箸老人ホームへ持ってゆく
塗り箸の先に夫婦が丸く居る

玉の輿乗る秘訣などありません
鬼退治秘訣は鬼より強くなる

秘訣などないけどまいる母の味
しあわせの秘訣は本に書いてない

もつれ糸はぐす秘訣をあたためる
仲のよい秘訣は妻に聞いてくれ

分らないところに秘訣住んでいる
一歩ずつ登山の秘訣は焦らない

円高に列島揺れる向い風
春一番心もはすむ向い風

葦の私語向い風にさかかわず
がむしやに男が生きた向い風

托鉢の誦経を乱す向い風
正直な男に何故か向い風

弱虫のどこへ逃げて向い風
弔辞読む声つもられた向い風

牧郎

良征

佳秋

紫香

淳朗

鼓城

和友

佐代子

静江

杜的

紫香

水客

正一

里男

秀男

栄

如洲

百合子

芳子

美枝子

眉水

井寒

高子

陽露子

一郎

風云児

求芽

曲ん手

白溪子

向い風影折れそうについて来る
向い風押して漕ぎ出す寡婦の船

向い風強しおんなの髪の毛の芯
火葬場の煙突がある向い風

腹具合ベビランチで丁度よし
ワンルーム鬼と仲よう豆を食べ

名を聞けば美人と思うゆり二号
ライバルの本音が覗く縄のれん

勝つまでは帰らぬ人に替を囲む
若松が枯れないままに捨てられる

離段に部屋を半分明け渡し
味噌汁に夕べの微笑浮かしく

なりふりを構うピエロの不眠症
まだ女春のフアッション考える

芝居果てただの女に戻ります
忘却は神のやさしい思召し

むつかしいことは言わないだまし舟
聴障川柳

稲田

婀娜つばい媚びに男の負け戦さ
うっちゃった筈が負けてた勇み足

大声の方がどうやら負けらしい
がま口も負けずに瘦せた夏の暮れ

抽選で落ちて負けてる星の数
戦争も核となったら皆負けや

ライバルに負けて発破的教育ママ
口下手なパパが負けてる口喧嘩

お隣に負けてなるかと大学へ
泣かされた姑さんの遺影像が持つ

マージャンに負けると酒が増えてくる
勝ち負けのない人の世に住みたくて

川柳やがわ

高田

博泉報

散歩

女

恵美子

作二郎

悦子

美津枝

春子

山久

春風

花代子

スミ子

明代

良太

八重野

年代

志津

鬼遊

豊作

承平

珍顔

和江

八恵子

鉄火

たみ

文古

みつる

案山子

三香

峯生

丹頂の鶴の羽ばたき新世帯
喜寿祝い反省してる無為徒食
隠し湯と聞き戦傷が疼き出す
子のためなら下げたことない頭だが
私鉄にはない国鉄の匂いする
福は外単身赴任の夫がいました
成人式酒も煙草もやめました
お地蔵さんの頭が好きなら赤トンボ
国鉄にまだまだ残る石頭
子を叱る自分の頭棚にあげ
子の入試かいがぶられてる頭
おし入れの闇ではほんでる人形
赤い服着てマンシヨンの老夫婦
未来から電話がかかるニューメデア
ケーキ置き孫は塾へ行ったまま
町長の頭で名所つくられる
少しだけ期待してゆく露天風呂
形よい頭は無くてみたくなり
国鉄の下積みだけに来る風
温泉へますたしめる非常口
温泉の街で買ひ足す紙おしめ
とりあえず半分下げておく頭
国鉄のルールしんど音をたて
覗いたら男がひとり露天風呂
温泉で結びなおしてる絆
飛驒の湯に女工哀史を聞かされる
人形の目が怖い日もある乱れ
ちよっとだけ主婦を忘れてお湯の街
環状線駅の色まで気を配り
温泉へ仮面を脱いだ顔揃う
湯の街で出来た内緒は見ぬふりで

松庄 波留吉 曲ん手 眉水 春水 創吾 速水 杜的 勝美 一菁 度 博紀 おさむ 新泉 菜月 藍子 まさお 君子 とし 章 あやめ 天山 かすみ 頂留子 静江 冬葉 一途 一笑 明代 シマ子

日記帖に毎日書いた頭文字
空っぽの頭で起きる日曜日
人形がある日反旗翻す
温泉を信じて新薬など買わぬ
湯の宿へ来ても暮しの見えかくれ
夜と昼の温泉芸者にある疲れ
ある秘密博多人形の裏に見る
混浴に見えない線が引いてある
紙人形泣き虫女がここにいる
取り越しの苦勞を笑う心電図
寒の水浴びて昼間は着ぶくれる
暖房完備ゴキブリ悠々冬を生き
頭数だけ缶ビールを買ッバスの旅
マッチャマチ雛人形も大阪弁
野次馬の中に私が写ってる
素晴らしい頭と刑務所で出会
若者の集いお寺のジャスダンス
結婚の理想から国鉄マンを消す
国鉄を私鉄に変えてちと歩く
駒つなぎ川柳会
くせものはいつもの顔をしてとほけ
離婚するほどではないが隙間風
蔭に居る正体不明の知恵袋
メルヘンの不思議素直に受け入れる
スタートのリズムが狂う七曲り
先ず秘書に顔色聞いて社長室
無視されているから隙間風になる
福袋おんなは夢をつめたがる
好きなことしてると不思議に疲れない
スタートは同期ゴールで消えた顔
顔色を見ずに育った子の素直

光子 博泉 亜成 英千子 光夫 晴風 亜也子 吉之助 磔 三千子 亜鈍 敬山 鬼遊 萬城 鼓城 小路 柳宏子 あいき 紫香 文秋 史好 柳宏子 庸佑 八重野 雅風 冬葉 寿美 頂留子 勝美 勝美

隙間から天を覗いてみるも良い
ゴミ袋に団地の嘘がつまっていた
夕焼けが不思議に心ほっとさせ
スタートはどうあれつづく茨道
欲捨ててから顔色も良くなつた
義理のある家に残してきた隙間
傷口がひろがる袋をしめておく
物心不思議な中で育ちゆき
スタートは三畳一間で温い日々
色街に住んで顔色ばかり見る
目に見えぬ隙間から神逃げてゆく
ストレスをためた袋の赤信号
種明し読むと何でもない手品
スタートのフアイトに遠い定期券
顔色を見ながら話す苦勞人
隙間だらけで美味くなる屋台酒
思春期の笑い袋は神が呉れ
解明の出来ぬ不思議が怖くなる
顔色だけはめて帰った見舞客
受験番号の隙間に冬の窓がある
どん底のスタート雑草の強さ持ち
不思議さを追えば迷いが深くなる
貸付の顔色を見る崖っぶち
冷え切った隙間を埋める泥詮具
種袋開けると春が喋り出す
誕生の不思議を語る花と蝶
いつのまに出来た隙間かすねている
フライングして保育器に放り込まれ
晩酌を増やし毛皮のはなしする
トンネルの隙間へ置こうにぎりめし

凡九郎 萬的 博子 真砂 恒明 健司 美代 幸治 柳影 美幸 浩一郎 美津枝 邦晴 英蘭 春蘭 千代三 曲ん手 笛生 壯之助 天笑 射月芳 凡子 信治 甘平 月子 善信 花仔 金太 外吉 白兔

香典の袋につめた軽い義理
私にも心当りのないはなし
エンジンには快調朝が動きだす
給料袋そのまま渡し瘦せている

川柳大阪

塩満

征服の山に男の唄があり
風の街男は靴を穿き直す

角立てす今年も丸い石になる
それなりに明日の虹は抱いている

道草も時にしようよ八十路まで
孤児の目に富士は母にもおやじにも

値上げには賛成した覚えがない
福祉切る予算に血圧が上がる

階段を上がると年がばれてくる
陣傘も委員の肩書持っており

一銭の金健在な手内職
タイトルの賭けた握手は燃え上がる

美しい女が背負う荷が重い
O・A化女性の地位が高くなり

古都税で仏も旗をふっている
三つ四つ委員かけ持つ軽い腰

しもやけも忘れ逆転したトライ
実行は委員が先と唄われ

しもやけの耳に愛のくちづけを

陽炎がみんな美人にしてくれる
子等の目に発見があり砂遊び

煙草屋の看板でしたその昔
おみくじを結ぶ梅の木植えてある

掌の砂と一緒に幸せ消えてゆく
ふり向けばさほどでもなし美人かな

田中勇

伊庭勇

文次

富久一

美房

敏

藤田

富柳会

柳

小路

柳

雀踊子

重人

重人

雀踊子

柳

小路

柳

雀踊子

重人

希久志

鉄心

金太

一介

みつる

醉舟

我勝

比呂志

与呂志

柳弘

司

本蔭棒

喜醉

一步

敏

藤田

泰子報

美房

富久一

莊次

文次

伊庭勇

田中勇

砂を噛む思い調停にある情け
梅干しの歴史は長し大役を
その昔ドラマも盛ったかけ茶碗
老梅に昔をしのぶ古戦場

悲しめば悲しく見える砂の貌
梅の香に断ち切れぬ過去とどまりて
砂浜で愛を語って春近し
梅の私語梅には梅にある憂い

こぼれ梅やさしき人の走馬燈
私にも茶碗にもためらい傷がある
道真になった気分分で梅を観る
春風に心変りをする砂丘

砂時計春一番に狂い出す
砂の私語風の気儘に逆らえず
美人薄命お前丈夫でよかったなあ
それで良い砂上の楼閣築きたい

砂浜で亡母が天女になって舞う
砂ぶろでとなり合せたくに詠り
春愁や私を泣かす砂ばかり

川柳ひらひ

行吉

とも白髪続けた愛と根性で
暖かくなったら退院出来と話し合う
長く待ち診察五分の医者通い
肩書を捨てた老医の手はたししか

それぞれ家庭に似た水子像
口下手の妻によく似て子も無口
カラフルな釦が語る子沢山
一周忌無口な父のひとり言

実年の哀しいジョークか赤を選ぶ
群青の一色胸にためている
寿命延び医療費アップという福祉

花子

静枝

今日子

千代女

富美子

文子

綾子

花梢

美代

森子

義雄

美緒

岳人

曲手

章久

美津子

優

ミツエ

泰子

照路報

花子

静枝

今日子

千代女

富美子

文子

綾子

花梢

美代

森子

義雄

美緒

岳人

曲手

章久

美津子

優

ミツエ

泰子

照路報

柏峯

栄翁

美代志

トモ子

年子

敏和

方巳

典子

愛

良一

饒舌の姑無口の嫁とうまが合い
結び目に母の顔あり宅急便
すれ違い釦一つのかけ違い
老いてなお赤のクレヨンよくちびる

追憶のアルバム夢もセピア色
めんどりが鳴くからいのち燃えつづけ
川柳をいのちの綱とくいしばり
インスタントの甘酒でよい妻と飲む

無口だが伝わるものが温かい
無口には話上手が良い相手
命がけ産むよりはかきはない平和
ひと言が男出世のいのち取り

虫の息まだソロバンが合わぬらし
オベ台のいのちに冷たいメス迫る
不審火の灰から鬼が顔を見せ
ほんとうは無口でなくてテレ屋かも

海からの風少年を鳥にする
海へ来て海とおしゃべりする無口
喪が明けた無口を孫が来てほぐす
わかあゆ川柳会

小砂

白汀報

奥の手はめつたに出さぬ年の功
奥の手を出したばかりにメッキ剥け
会長も頭取も酔えば化けの皮
頑固だが酔ったふりしてお手玉

奥の手で豊田商事にしてやられ
奥の手をしまひ忘れたあわて者
とりあえず建国記念休んどく
こんな夜は酔うてぐつすり眠りたい

奥の手を見せる料理で指を切り
白酒に酔うているのか右大臣
蜜に酔う蜂は槍など出しはせぬ

せつ子

やすえ

孝子

裕子

愛子

アヒル

風親

美佐保

かずを

寿子

千恵子

志寿子

幸江

柳五郎

草風

真備雄

照路

白汀報

翠星

秀穂

せつ子

やすえ

孝子

裕子

愛子

アヒル

風親

美佐保

かずを

寿子

千恵子

志寿子

幸江

柳五郎

草風

真備雄

照路

白汀報

翠星

秀穂

ヒデ子

聖子

世似

恵美子

三和

英子

かつ子

智重子

鈴江

新しい靴に手古摺るハイキング
この人がと思う奥の手筆さばき
あの顔を酔わせて見たい仁王様
観衆の拍手ビエロは酔いきれず
新業に負けるものかと飲みつつけ
巧言令色酔うて本性さらけ出し

南大阪川柳会

中川

滋雀報

脱サラを考えている朝のパン
飢えが聞こえますかパンに耳がない
善人のころがパンへゆれ動く
ほおばったパンと駆け出す朝の町
久し振るパンでなかった宿の朝
戦争の勝利夢みた糠のパン
給食のパンで育った嫁強し
一片のパンにもあつた生きる道
文明はパン未開国米が向く
サンドイッチ孫に作って飯にする
ドラマなら救いの神の出るピンチ
ピンチですポケットベルが飛んでくる
ピンチまたチャンスに変わる向い風
竹光のままでピンチを切り抜ける
毎日がピンチで気にもしてまへん
ピンチにはじつと力を貯える
ブレハブに陣頭指揮のデスク置く
ブレハブで見た星空はもえていた
ブレハブで妥協している仮校舎
ブレハブの屋根の軽さを嘆くまい
腰かけの気のブレハブで住み馴れる
ブレハブの事務所で咲いた青写真
ブレハブの壁には耳がたとある
ブレハブに移り新築待つっている

歳 栄 清 泉 笑 子 是 み 民 子 白 汀 雀 踊 子 雀 踊 子 白 兎 信 治 律 子 雅 風 喜 風 曲 手 晴 風 しんじ 綾 珠 庸 佑 小 雅 子 洋 子 智 子 凡 九 郎 千 里 恒 明 頂 留 子 勝 美 智 慧 子 文 秋 春 蘭 寿 美 冬 葉

ペンションの虜になったデスマスク
ペンションの山の掟に縛られる
ペンションの雪が汽笛をきいている
ペンションの窓に白馬の月灯り
削られた山でペンション泣いている
借景のいいペンションでいつも
太っ腹なポーズを隠れ蓑にする
さりげないポーズに愛がにじみでる
銅像のポーズは猫背が消えている
三幸川柳教室 桜井 千秀報
鬼払いの名のみの春でも掴みたい
病む家のひとときわ高き鬼は外
黄昏てかくれんぼの鬼ひとりばち
嫁が来てさすがの鬼も角が折れ
桃色のおっぱいが車の後を追う
汚された川へ流れる桃もない
菜の花の舞台でシテの桃が舞い
腕組みの中で勝算温められ
表面は負けて心に王手持つ
栄冠に敗者の美談かくれてる
わたしでも勝った競技は敵のミス
叩いて誇る背中にきつと隙がある
叩いても自販機コイン呑んだまま
小銭尽き受話機無情の音を立て
煙草やめ貯めた小銭でまた煙草
大声で二円の釣を追いかける
内助の功小銭を貯めた三つ揃え
コインランドリーに若い狐がある都会
十円が不足タクシー拾う羽目
ポケットにパチンコ玉ふれ小銭ふれ

悦 郎 滋 雀 慶 三 善 信 山 久 公 一 重 人 楓 樂 柳 伸 章 久 当代 千香子 文子 重次 由梨 千秀 桂香 百合子 三千子 隆行 千枝子 静 愛子 邦郎 保 忠昭 みね 靖子 あかね 智水庵

川柳塔柳箋

一冊 二百円
送料 二百四十円

豊中もくせい川柳会

田中 正坊報

月並の花が仏に挿してある
レンゲ摘む下校の赤いランドセル
沈丁花私の愚痴を聞いていた
フリージア岩波新書読む少女
春の雨ひそかに花を育ててる
道ばたの小さな花に春をみる
鬼の母が恋しい日暮れ時
かんざしも逆手に持てば鬼女の相
鬼塾に行つてしまったかくれんぼ
補聴器をつけると鬼の声がする
包丁の軽いリズムで朝が明け
シーソーの軽い方から泣きはじめ
軽妙にトンボ切るのが特技なり
核心を軽くタッチで衝いてくる
宴会へ軽く食事をして出かけ
手枕で軽く叩いて子を寝かす
減量をしたとて美女とは限らない
ええとこの子やしぶい茶飲んでる
上海へ思い出船で你好ニハオ
お水取すんでジョギング始動する
めずらしく日記書いてる春の雨
海を見たいと思う詩人が病んでいる
少年の声が届かぬ海の果て

きく子 よし子 正坊 満女 典子 寿美子 花村 富一 福久 山久 曲手 春子 洋子 房子 慶子 隆 博史 明吉 登志美 作女 紫香

5 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 及 び 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 ま つ え	10日(土) 午後1時半より 教室・虹・みどり	慈雲寺 松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
菜 の 花	10日(土) 夕 6 時より 花・煙・抜く・職	八尾西郷会館 近鉄大阪線八尾駅南西歩 5 分八尾神社境内 〒581 八尾市山本町 5-4-6 内海幸生
川 柳 わかやま	11日(日) 午後 1 時より 遠い・さわやか・大切・主役	紀の国会館 (県民文化会館西隣) 〒640 和歌山市鶴町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手 3 枚
西宮北口	12日(月) 午後 1 時より 道・予防・自由吟	西宮中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩 5 分 〒661 尼崎市武庫之荘 5-25-17 春城年代 句会費 500円 投句料 60円切手 4 枚
南海電鉄 川柳句会	15日(木) 夕 6 時より 客・家具・軽い	南海会館ビル内南海電鉄本社ビル地下食堂 〒542 大阪市南区難波 5 丁目 1 番60号 南海電気鉄道(株)不動産管理部管理課 広井季雄 句会費 無料 投句料 60円切手 1 枚
高槻川柳 サークル 卵 の 花	15日(木) 午後 1 時より 迎える・素顔・自由吟	高槻市民会館301号 阪急電車高槻下車 5 分 〒569 高槻市桜ヶ丘北町 3-19 辻 白浜子 句会費 500円 投句料 200円(60円切手 3 枚と20円切手 1 枚)
富 柳 会	15日(本) 午後 1 時より 溜める・必要・毒	富田林市中央公民館 〒584 富田林市寺池台 3-22-18 藤田泰子
川 柳 ねやがわ	18日(日) 午後 1 時より 連休・遊園地・交渉	寝屋川市立総合センター 4 階 寝屋川市駅下車京阪バス総合センター前下車 〒672 寝屋川市春日町 9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手 3 枚
南 大 阪 川 柳 会	19日(月) 夕 6 時より ラーメン・リモコン・ ルーツ・レモン	寺田町高松会館 国鉄環状線寺田町裏駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西 1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
もくせい 川 柳 会	19日(月) 午後1時半より 腰・響く・悲しい・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曾根下車東南歩 5 分 〒560 豊中市旭丘 8 番87-2 田中正坊
堺川柳会	20日(火) 夕 6 時より 錯覚・裁く・砂糖・坂	堺青少年センター3F 阪堺線綾之町西南 〒593 堺市堀上緑町 2-9-2 河内天笑
東 大 阪 川柳同好会	24日(土) 夕 6 時より 板前・素顔・義理・案内	東大阪市社会教育センター2階 近鉄布施駅北へ 5 分 〒579 東大阪市新池島町1丁目4-14 齊藤光利 句会費 500円 投句料 60円切手 3 枚
駒つなぎ 川 柳 会	26日(月) 夕 6 時より わんぱく・祝電・上役・引き込む	寺田町高松会館 国鉄環状線寺田町駅南口下車 南へ 1 丁 3 筋目左へ駅より歩 3 分 〒572 寝屋川市成田町19-28 里 小路

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円 (郵券可)、各題 3 句以内

原稿送り先 (〆切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒596 岸和田市荒木町 1-29-1 宮園射月芳

●募 集●

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

七月号発表 (5月15日締切)

川柳塔 (10句)	西尾 栗 選
水煙抄 (10句)	黒川 紫 選
愛染帖 (3句)	橘高 薫 風 選
課題吟 (各題5句以内)	
「恩」	仁部 四郎 選
「団地」	片上 明水 選
「交替」	藤後 実男 選

★用紙は川柳塔社柳箋を(使用ください)。

八月号発表 (6月15日締切)

川柳塔 (10句)	西尾 栗 選
水煙抄 (10句)	黒川 紫 選
愛染帖 (3句)	橘高 薫 風 選
課題吟 (各題5句以内)	
「炎天」	久家 代仕男 選
「追う」	松本 忠三 選
「潮時」	安藤 寿美子 選

5月の常任理事会は1日(木)

定価 五百円(送料50円)

半年分 三千二百円(送料共)

一年分 六千三百円(送料共)

昭和六十一年四月二十五日印刷

昭和六十一年五月一日発行

編集兼 中島 蓬太郎

発行人 藤原 童心 社

印刷所 藤原 童心 社

大阪市阿倍野区三木町二〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

〒545

発行所 川柳塔社

電話 (三六) 六九一四番

振替口座大阪 813336八番

本社5月句会

日時 五月七日(水) 午後六時

会場 メンズファッションセンター3階

東区内本町一丁目 電話 06・941・1918

地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角

おはなし

兼題 「魅力」 黒川 紫 香

「勉強」 津守 柳伸 選

「誇り」 藤村 亜成 選

「豆」 玉置 重人 選

西田 柳宏子 選

席題 二題 当日発表

各題三句以内厳守

会費 五百円

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。
投句料 300円(60円切手5枚)同封のこと。

川 柳 塔 社

6月の兼題 「下積み」 「暗記」
「比べる」 「牙」

6月の本社句会は7日(土)

『夜市川柳』募集

第12回

「仲居」

西尾 栗 選

締切 5月31日

投句先

〒593

堺市堀上緑町二一九一

河内天笑方

堺川柳会

編集後記

☆四月七日の本社旬会は、中島先々庵名誉会長長の追悼句会だった。告別式から初七日、満中陰忌と小石夫人のご心労は大変なものであった。そして追悼句会、川柳塔の同人は挙げて協力申し上げた。私は、追悼句会での小石夫人の「挨拶に深い感銘を受けた。要旨は、「生々庵は病に倒れて以来、ひたすら川柳塔のその後に心を残していたが、榎主幹をはじめ皆様が立派に運営して下さっているので安心してこの世を去ったに違いない。どうか皆様は、これから力を合わせて川柳塔の発展のために尽くして下さい。それが主人への何よりの供養だと思います」と。☆小石奥さん、いつまでもご健勝で、生々庵先生同様川柳塔を見守って下さい。☆当夜は、旬会後の溜り場を、寄らず帰宅してステレオをかけ、好きな新内の蘭蝶と、シヨパンのエチュードを聞いた。アシュケナージ

の弾く、イ短調コガラシは私の鎮魂の曲なのだ。☆昭和六十年度の紋太賞を同人の春城年代さんが受賞された。「マンスシンのほかは菜の花品なり」ほか五句が対称だった。そして、ときせん賞準賞を松原寿子さんが「みどりへみどりへ転がる毬の自由など」の句で受賞された。昨年には、赤木和子さんが、それらの賞と川柳塔賞を獲得して、三冠に輝いたが、このように川柳塔は女流作家の活躍が目まじしい。新京都の誌上旬会や月例旬会に参加するのも、稲葉冬葉、西山幸小出智子、西出楓葉、前川千賀子さんらで、これら女流の積極的な才能を一層伸ばし育てるグループ活動を早急に促進させたいものである。

☆五月には出雲の六十周年大会、六月は日川協の別府大会、九月には中国吟行の旅と続く。川柳の旅の交歓の中に地方の郷土料理を味わう楽しみがある。今月はグルメのアンケートにご協力をお願いした。

力をお願いした。☆暑中見舞広告、早い目に☆申し込み下さい。(薫)▼少年のころは、早く大人になれないものかと歳月の経つのを遅く感じていた。二十が過ぎると徐々に速度が速くなり、還暦すぎれば四十代、五十代があったのかと疑われるほどにめまぐるしい。六十も半ばになるかと先ゆきが見えて来たのか、慌しいうちに日々来るのを楽しく思う一刻がある。▼作家の池波正太郎氏の文章に「人間は還暦を越すとおもってもみなかった世界がひらけて来るものだ。それは六十を越えるまで、体が丈夫では人にもよるが、夫がこたえと、長かった人生のうちで、ほんのわずかな内だけれど、胸のうちは軽々となる。自分の先行きもわかって来るし、これから先どのように生きて行きたいのか、はっきりと目に見えてくる。」とあった▼かつて、川柳のテーマで死をよまれたものを一部の

方に嫌悪された時間があつた。死を見つめることは生を見ることだと思つていたので、嫌われたのが不思議でならなかった。▼ある日、桃まつりの宴で東大寺の清水公照氏の話を聞いた。「二十一世紀は宗教の時代になるだろう。死から人生を見直すのも、つばを押えた生き方だろう」▼ことほどきように、自分の思いと同じ考えに出会うと、わが意を得たりと確信にまでなってしまう。年寄りの頑固さは、これらに起因するらしい。(き)

☆前々から気になっていたあのティッシュペーパーというやつ、あれはなぜ二枚ずつ出てくるのだらう。一枚で足りると思うでも、つい面倒で、そのまま使ってしまう。弁当のフタのごはん粒から食べ始める戦中派にしてみれば、実に勿体ないと思うのである。☆ロール状のトイレットティッシュの場合、ミシン目が入ったのがあるが、ホルダーの紙切板で好きなだけ切ればいいのだから、これ無駄ではないのか。大体ロールというのは、回し始めると、かっぱえびせんではないが、やめられない、とまらない「一種の快感みたいなもの」があり、本質的に浪費を奨励する器具に思えてならない。☆ふだん何気なく使っているけれど、我々の周囲にはこの他に無駄なものも随分ある。紙のことです。紙で言えば、本を買うと本屋がサービスしてくれるブックカバー、あれも無駄もがなだ。

☆しかし、と近ごろ考えるようになった。この狭い国土に一億二千万もの人間がみな相応の暮らしをしていこうと思えば、無駄が必要☆「無用の長物」もあれば「無用の用」もあり世の中面白い。☆身近の無駄・無用をどんどん切り捨てていつて最後に気がついたら己れ自身も「なんでも」になつたら大変である。たしか、そんな落語があつたが。(史)

日刊

電波新聞

投稿欄案内

川柳 選者・橘高薫風
(掲載日) 毎週水・土曜日

俳句 選者・小寺正三
(掲載日) 毎週火・金曜日

短歌 選者・佐々木信夫
(掲載日) 毎週月・木曜日

投稿規定

はがき一枚に一句一首以内(川柳・俳句・短歌と明示する。コレ)。投稿随時。

自由課題・秀句には掲載紙贈呈。

投稿先

〒五三二 大阪市北区中之島一丁目 朝日新聞ビル6F・電波新聞大阪本社「学芸部」にて。

5つの個性・5つの色味!!

アイスキャンデー

ミルク・アズキ・パイン・チョコ・宇治金時



大阪は戎橋筋本店
なんば高島屋百貨店
堂北高島屋百貨店
京都高島屋百貨店
阪神百貨店
松坂屋百貨店
そごう百貨店
京阪ホール店

サンストア中之島店
サンストア淀屋橋店
アベノ新鉄百貨店
上本町新鉄百貨店
東大阪新鉄百貨店
奈良新鉄百貨店
京都新鉄百貨店

大阪は新川店
北のまち店
ドーカ力店
南海難波駅店
国鉄大阪駅店
梅田大丸百貨店
堺東店



大阪・なんば



TEL 641-0551